

なにものも私たちを
神の愛から引き離すことはできない(下巻)

人紙
マの手

古
神
寺
キ
リ
ス
ト
集
巻
G・ベック

なにものも
私たちを

神の愛

から引き離すことはできない(下巻)

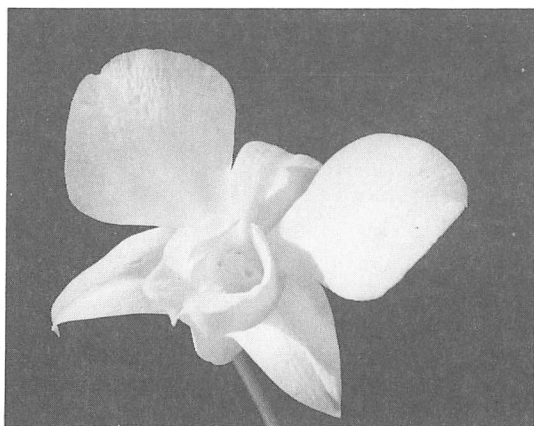
ローマ人への手紙

ゴットホルド・ベック著



あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。

(イザヤ 1:18)



しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、
これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

(ローマ 8・37)

なにもものも私たちを
神の愛
から引き離すことはできない (下巻)

吉祥寺キリスト集会
ゴットホルド・ベック著

目次

なにももの私たちを **神の愛** から引き離すことはできない (下巻)

第Ⅳ部 神の義と人の義の戦い 9

(ローマ人への手紙該当章と節)

19 神の義と人の義 9

20 人に対する神の主権 9

21 つまずきの石であるイエス 27

22 提供された義に対する態度 33

23 されど神は 11

第Ⅴ部 神と人とを愛せよ 93

24 徹底的な献身 12

25 真の交わり 12

26	生きた集会（具体的な勧め）	12	9	21	133
27	信者の公的生活（1）	13	1	7	158
28	信者の公的生活（2）	13	8	14	173
29	信者と主にある兄弟姉妹（1）	14	1	12	189
30	信者と主にある兄弟姉妹（2）	14	13	23	205
31	信者と主にある兄弟姉妹（3）	15	1	13	218
32	イエス・キリストのしもべパウロ	15	14	33	235
33	パウロの個人的なあいさつ	16	1	16	249
34	警告・奨励・賛美	16	17	27	266
あとがき					284
基礎的なみことば					326
「実を結ぶ命」「光よあれ」のすすめ					328
キリスト集会・家庭集会のご案内					334



神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子ともてす。(ロー1・8・14)

第Ⅳ部 神の義と人の義の戦い

新約聖書ローマ人への手紙

9章1節から11章36節まで

熊本城にて。末兼妙子さん（右）と松見とみえさん。



私たちの主イエス・キリストによって、私たちは神を大いに喜んでいるのです。（ローマ5・11）

黙想の家海岸（沖縄・恩納村）での洗礼式。



88 10 30

「神の愛」の上巻、ローマ人への手紙1―8章までの学びに引き続き、この下巻は9章からごいっしょに学びたいと思います。まず、始めのテーマは、「イスラエルの歴史における自分の義と神の義の戦い」です。そして、これが9―11章までの中心的なテーマとなっています。今日は、そのうちの9章1―13節までを学びたいと思います。聖書の本文は次の通りです。

私はキリスト¹にあって真実を言い、偽りを言いません。次のことは、私の良心も、聖霊によつてあかししています。私には大きな悲しみがあり、私の心には絶えず痛みがあります。³もしできることなら、私の同胞、肉による同国人のために、この私がキリストから引き離されて、のろわれた者となることさえ願いたいのです。彼らはイスラエル人です。子とされることも、栄光も、契約も、律法を与えられることも、礼拝も、約束も彼らのものです。⁵先祖たちも彼らのものです。またキリストも、人としては彼らから出られたのです。このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

⁶しかし、神のみことはが無効になつたわけではありません。なぜなら、イスラエルから出る者がみな、イスラエルなのではなく、アブラハムから出たからといって、すべてが子どもなのではなく、「イスラクから出る者があなたの子孫と呼ばれる。」のだからです。すなわち、肉の子どもがそのまま神の子どもではなく、約束の子どもが子孫とみなされるのです。⁹約束のみことはこうです。「私は来年の今ごろ来ます。そして、サラは男の子を産みます。」¹⁰このことだけでなく、私たちの先祖イスラクひとりによつてみごもつたりベカのこともあります。その子どもたちは、まだ生まれてもおらず、善も悪も行なわないうちに、

神の選びの計画の確かさが、行ないにはよらず、召してくださる方によるようにと、「兄は弟に仕える。」と彼女に告げられたのです。「わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。」と書いてあるとおりです。
(ローマ9・1～13)

この箇所は三つの部分に分けることができます。

I 1～8章と9～11章の比較

(1～3節)

II 選ばれた民、すなわちイスラエル

(4～5節)

III 神の選びと人間の決断

(6～13節)

I 1～8章と9～11章の比較

パウロは1～8章までで救いについてを中心に教えていますが、9～11章では主にイスラエルの歴史について述べています。ローマ人への手紙全体の中心テーマは「義」です。1章から3章20節までは、ユダヤ人の内にも異邦人の内にも、義人はいない、ひとりもない、ということが繰り返して述べています。3章21節から5章までには、主イエスによってもたらされた神の義が提供されているという喜ばしい福音が記されています。そして、6～8章までは、その提供された義を自分のものにした人がどのようにその義を体験するか、すなわち新しい生活の歩みについて述べられています。私たちがこれから学ぶ9～11章は、主イエスによってもたらされた義のみが神によって認められる、ということを、イスラエルの歴史を考えることによって明快に実証

しているのです。

また、1章から3章20節までは、主イエスを持たない人間の努力のむなしさについて、そして、21節から7章までは信仰について、すなわち、主イエスは自分のために何をなしてくださいだったのか、自分と共に、何をなしてくださいだったのかということについて詳しく語られています。さらに8章では、私たちの内に住みたまう生ける望みである主イエスについて語られています。そして、これから読み進む9～11章は、この主イエスに対してどのような態度をとるかということの重要性について、言いかえれば、キリストは「万物の上にあられる」ということについて私たちに深く教えているのです。

さらに別の観点からこのローマ書を見てみるなら次のようにもまとめることができるでしょう。3章20節までは「罪」について。21節から5章までは「義とされること」について。そして6～8章までは「聖化」、つまり「信者の成長」について記されていると言えます。そうしますと、これからの中心となる9～11章までは、「神から提供された恵みを受けること」と、「その恵みを拒むこと」の結果について記されていると見られます。

このようにいろいろな角度からまとめてみますと、全体として前半の1～8章までは神の救いがその中心的な内容です。その救いとは主イエスによって全人類のために成し遂げられたものであって、信じる者には例外なく値なしに与えられるものです。後半のうち、9～11章までは、提供された救いに対してイスラエルの民がどのような態度を取ったかを私たちに示しています。この9～11章についてその内訳をみてみますと、9章では過去のイスラエルの歴史について、10章

では現在のイスラエルのありさまについて、そして、11章では未来のイスラエルに起こるべきこととがらについて述べられています。

過去においては、神の義と恵みがイスラエルの民に対して提供されていました。ところが、残念なことにイスラエルの民の大部分は、提供された神の救いの道を拒んでしまったのです。この事実をパウロは非常に悲しんで嘆いています。そしてその嘆きと悲しみを9章1―2節で訴えています。8章においては、信者の喜びと信仰の勝利について記されています。罪人は神の子どもとされ、主イエスに似た者とされます。ところが、8章から9章に移るやいなや、信仰の勝利が嘆きの声に変わりました。この二つの節には何と大きな違いがあることでしょう。自分を全然かえりみないパウロの愛がここにあらわれています。8章においてパウロは、「私たちをキリストの愛から引き離すのは何者であるか。」と信仰を証しています。それにもかかわらず、パウロはイスラエルの民を救うためならば、パウロ自身がキリストから引き離されてもかまわないとまで断言しています。もちろん、キリストから引き離されるということがどんなことか、パウロは十分に承知していましたが、人間が人間を救うことは不可能であるということも知っていたのです。

人は自分の兄弟をも買い戻すことはできない。自分の身のしろ金を神に払うことはできない。たましいの贖いしろは、高価であり、永久にあきらめなくてはならない。

(詩篇49・7―8)

パウロは、罪のない者だけが人を救うことができる、ということを知っていました。罪のない者とはイエス・キリストのことにほかなりません。

神は、罪を知らない方を私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちがこの方にあつて、神の義となるためです。

(Ⅱコリント5・21)

パウロは自分自身でイスラエルの民を救うことは不可能であつても、そのためにはいかなる犠牲をもいとわないと言っています。それは、パウロが主イエスの愛に満たされていることのあらわれです。私たちは、まだ救われていない家族と一緒に生活しているとき、あるいは、まだ救われていない友人とともにいるとき、パウロのような愛に満たされているといえるでしょうか。パウロの証ししていることは彼にとつては決して誇張ではありません。彼は9章1節で「私はキリストにあつて真実を言い、偽りを言いません。」と言明しています。パウロの良心と聖霊が証ししていることでした。私たちもそのような証しが与えられるなら幸いです。

Ⅱ 選ばれた民、すなわちイスラエル

神に選ばれたのは、世界中の多くの民族の中でもイスラエルの民だけでした。パウロはイスラエルの民に与えられた八つの特権について述べています。この八つの特権について手短かに考えてみましょう。

1. 子とされること

イスラエル人は子とされる権利を持っていました。彼らは子どもとして受け入れられたのでした。出エジプト記にはこのように記されています。

「イスラエルはわたしの子、わたしの初子である。」

(出エジプト4・22)

イスラエルの民は、子どもとして「長子の権」をもっています。

2. 栄光

イスラエルには栄光が与えられていました。栄光はヘブル語では「シエヒーナ」という言葉です。イスラエル人には荒野においていつも頭上に雲が従っていましたが、この雲は神のご臨在をあらわすものでした。この雲について聖書では「シエヒーナ」つまり栄光という言葉が使われています。会見の幕屋の上にはいつでもこの雲があり、神がこの雲の中におられモーセと語られたのです。このようにして栄光を与えられた民族はイスラエル以外にはありません。

3. 契約

イスラエルには神の契約が与えられていました。神はアブラハムに対しては恵みの約束を与えられ、モーセに対しては律法を与えられました。

4. 律法

神はイスラエル人にたいしてモーセを通して律法を与えました。これは、イスラエル人にご自分の意志をはっきりとお知らせになるためでした。この神の意志はイスラエルの民に対して与えられたのであって、他のいかなる民に対しても与えられてはいませんでした。

5. 礼拝

礼拝、すなわち聖所で神に仕えることも、イスラエルの民だけに与えられた特権でした。生ける神はイスラエルの民に対してだけご自身を啓示され、共に住んでくださり、彼らを聖なる民としてくださったのでした。ほかの国々は、まことの礼拝の対象を知ることがなかったのです。

6. 約束

尊い約束は、将来においてイスラエルの民にのみ与えられるものです。

7. 先祖たち・預言者

先祖たち、つまり、アブラハムも、イサクも、ヤコブも、それから預言者たちもみなイスラエルの民に属し、彼らに先立って生まれたのでした。

8. キリスト

キリストも、人としてはイスラエルの民の内から出ました。しかし、たしかにキリストは彼らから、イスラエルから出られた者ですが、決してイスラエルだけの独占物ではないのです。

5節には、「キリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。」とあります。主イエスはイスラエルのみではなく、万物の上におられる方であり、神ご自身だからです。

この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。

(Ⅰヨハネ5・20)

五百年もまえにイザヤは主イエスについて証して、次のように預言しています。

ひとりのみどりごが、私たちのために産まれ、ひとりの男の子が、私たちと与えられる。主権はその肩にあり、その名は、「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

(イザヤ 9・6)

主はご自身について、こう言われました。

わたしと父とは一つです。

(ヨハネ 10・30)

御子の本質については、次のように言われています。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

(ヨハネ 1・1)

御子については、こう言われます。「神よ。あなたの御座は世々限りなく、あなたの御国の杖こそ、まっすぐな杖です。」

(ヘブル 1・8)

このような方である御子の地上での歩みについては、次のように示されています。

キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。

キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架

の死にまでも従われたのです。それゆえ、神は、キリストを高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、「イエス・キリストは主である。」と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。（ピリピ 2・6～11）

御子の本質と、その姿と、果たされた御業について、パウロは次のように要約しています。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。また、御子はそのからである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一の者となられたのです。なぜなら、神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ、その十字架の血によって平和をつくり、御子によって万物を、ご自分と和解させてくださったからです。地にあるものも天にあるものも、ただ御子によって和解させてくださったのです。（コロサイ 1・15～20）

このようにして、これらのイスラエル人に与えられた数々の特権を考えるとときに、彼らが全く

特別に選ばれた民であつたということは疑う余地がありません。この特権はただ神の恵みによつて与えられたものであり、決して彼らの手柄によるものではありませんでした。これらの賜物は、値なしに恵みによつて与えられたものだつたからです。それではなぜ、神はイスラエルの民をこのように特別にあつかわれたのでしょうか。残念ながら私たちにはそれを説明することはできません。私たちは、ただ神がイスラエル人を愛しておられたから、これらのものをお与えになつたのだという事実を知っているのみです。パウロもまたこの説明をしようとせずに、ただ、それらをお与えになつた神をほめたたえています。

このキリストは万物の上にあり、とこしえにほめたたえられる神です。アーメン。

(ローマ9・5)

Ⅲ 神の選びと人間の決断

このようにしてイスラエルの民は、神から非常に多くの特権を与えられておりましたが、彼らの大部分はその特権を自分のものとして受け取ろうとはしませんでした。ですから、彼らの苦難の原因は神にあるのではなく、彼ら自身の不信仰、不従順、すなわち罪にありました。パウロが4・5節で、イスラエルに与えられた特権について一つ一つ詳しく述べたのは、ローマの教会には多くのイスラエル人が属していたからでしょう。パウロは、肉によるイスラエル人、つまり、アブラハムの子孫がすべて真のイスラエル人なのではないと言っています。

割礼を受けているか受けていないかは、大事なことでありません。大事なのは新しい

創造です。どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。

(ガラテヤ 6・15-16)

神のイスラエルに属する人とはどのような人のことでしょうか。誰が一体真のイスラエルといわれることができるでしょうか。真のイスラエルとは真の信者のことにほかなりません。主イエスを受け入れる者、聖霊によって主イエスと結ばれている者、そのような人こそが新しく造られ、永遠のいのちを持っている者です。神のイスラエルとされるための条件は、新しい創造、すなわち、新しく生まれることです。このことは、神のみことばと聖霊による以外には不可能です。ただ単にアブラハムの子孫であるというだけでは、何の意味もありません。主イエスはあるとき、ユダヤ人たちと次のようなことをお話になったことがありました。

彼らはイエスに答えた。「私たちはアブラハムの子孫であつて、決してだれの奴隷になつたこともありません。あなたは どうして、『あなたがたは自由になる。』と言われるのですか。」イエスは彼らに答えられた。「まことに、あなたがたに告げます。罪を行なっている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるものではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことが、あなたがたのうちにはいつていないからです。わたしは父のもとで見たことを話していま

す。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行なうのです。」彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行ないなさい。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。あなたがたは、あなたがたの父のわざを行なっています。」彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。

私たちにひとり父、神があります。」イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいますからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。……あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。しかし、このわたしは真理を話しているために、あなたがたはわたしを信じません。あなたがたのうちだれか、わたしに罪があると責める者がいますか。わたしが真理を話しているなら、なぜわたしを信じないのですか。神から出た者は、神のことに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」

(ヨハネ 8・33―47)

8 節には「神の子ども」という表現が出てきますが、「神の子ども」とは一体どのような人を意味しているのでしょうか。それは、神のことばと霊によって新しく生まれ変わった者のことです。あなたは「神の子ども」として新しく生まれ変わることを、すでに体験されましたでしょうか。

ここでは、神の選びについて書かれています。神は、アブラハム、イサク、そして、ヤコブをお選びになりました。神はカルデヤのウルに住んでいる者たちの中から、ほかならぬアブラハムひとりをお選びになりました。そして、神はアブラハムの子孫のうちからイシマエルではなく、イサクを、さらにイサクの子どものなかからエサウではなくヤコブをお選びになったのです。なぜ、アブラハムが選ばれ、イサクが選ばれ、ヤコブが選ばれたのでしょうか。この問いに対して、やはり明確な答えは用意されていません。主なる神の導きは、私たち人間には理解することができません。しかし、その導きは間違いない完全なものです。神の選びは、人が救われるか、滅びるかということに対してあるのではなく、私たちに対して特別な使命を与えるためなのです。神はイスラエルの大部分を、イシマエルやエサウのように神の道具としてはお使いにならず、かえって取り除かれました。このことは、イシマエルやエサウをはじめとする多くのイスラエル人が滅びたということではなく、彼らが自分たちに与えられた使命を果たさなかったゆえに無益な者に引き渡されてしまったということなのです。私たちはすでに、神のみこころはすべての人が救われることである、ということをお学みいただけます。

神は、すべての人が救われて、真理を知ようになるのを望んでおられます。

(Ⅰテモテ2・4)

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(Ⅱペテロ3・9)

悔い改めて神から提供された恵みを自分のものにするなら、永遠の救いを手にいれることができます。しかし、この恵みを拒否するなら永遠の滅びに定められます。それゆえ、人間の決断は非常に大切なのです。

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。しかし、信じない者は罪に定められます。

(マルコ16・16)

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

(ヨハネ3・36)

信じることを否む者、すなわち、聞き従わない者は罪に定められます。

わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ。

(ローマ 9・13)

神が人間を憎まれるとき、その憎しみは人間の憎しみと異なった聖なる憎しみであり、義の憎しみです。と言うのは、その憎しみの原因がほかならぬ私たちの罪だからです。神は、罪や不従順や感謝を知らない心を憎みます。

また、不品行の者や、一杯の食物と引き替えに自分のものであった長子の権利を売ったエサウのような俗悪な者がないようにしなさい。あなたがたが知っているとおり、彼は後になって祝福を相続したいと思ったが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらう余地がありませんでした。

(ヘブル 12・16―17)

これこそが、イスラエルの大部分が選んだ道、つまり、自分自身の思いで歩もうとした道の結果にほかなりませんでした。私たちクリスチャンもこのような多くのイスラエル人たちと同じ道を歩む危険性を十分に持っています。主なる神は常に正しく完全です。たとえ、神の導きが私たちにとって間違っているように思えたとしても、その導きは完全であり正しいのです。主のみこころは私たちにとって益となること、つまり、最上の道を歩むことなのです。これらのことを、今日の学びを通してみなさまにぜひ覚えていただきたいと思います。

20 人に対する神の主権

ローマ人への手紙

9章14節から26節まで

- I 哀れみの器、すなわちモーセについて
- II 怒りの器、すなわちパロについて
- III 人間の責任、すなわち私たち自身に関する
ことについて



「したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。(ローマ9・16) エミリオさん(右)と松井志保さん。」

前に学んだように、9～11章までのテーマは「イスラエルの歴史における自分の義と神の義との戦い」です。今回は9章14～26節までをいっしょに学んでみたいと思います。

この箇所¹⁴のテーマは、21節にあるように「陶器師が粘土に対して持っている権利、あるいは立場」ですが、これはつまり「人間に対する神の主権」とすることが出来ます。

それでは、¹⁴どういうことになりますか。神に不正があるのですか。絶対にそんなことはありません。神は¹⁵モーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。¹⁶したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。聖書は¹⁷パロに、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。」と言っています。¹⁸こういうわけで、神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。¹⁹すると、あなたはこう言うでしょう。「それなのになぜ、神は人を責められるのですか。だれが神のご計画に逆らうことができません。」

²⁰しかし、人よ。神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、「あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言えるでしょうか。²¹陶器を作る者は、同じ土のかたまりから、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持っていないのでしょうか。²²ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。²³それも、神が栄光のため

にあらかじめ用意しておられたあわれみの器に対して、その豊かな栄光を知らせてくださるためなのです。神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださいましたのです。それは、ホセアの書でも言っておられるとおりです。「わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。『あなたがたは、わたしの民ではない。』と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる。」

(ローマ 9・14-26)

この箇所を通して私たちは、主なる神の偉大さと卓越性について学ぶことができます。

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。(ヘブル 11・3)

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。

(詩篇 33・9)

神の偉大さは人間の心では測り知ることができません。そして、人間はこの神の御手の中にあるのです。人間は意志を持たない粘土のような者ではなく、神によって形造られ、自由意志を持った者として存在しているのです。私たちは、これから次の三つの点について考えてみたいと思います。

I 哀れみの器、すなわちモーセについて

II 怒りの器、すなわちパロについて

III 人間の責任、すなわち私たち自身に関するについて

I 哀れみの器、すなわちモーセについて

哀れみの器とはモーセのことです。また怒りの器とはパロのことです。そして人間の責任とは私たち自身に関することです。すべての人は哀れみの器であるか、あるいは怒りの器であるかのどちらかになります。つまり、人間の生活を通して神の怒りが明らかになるか、あるいは神の恵みが明らかになるかのどちらかだということです。しかし、たとえどちらになろうとも、神の偉大さと主の卓越性が明らかになります。14節でパウロは「神に不正があるのですか」と問いかけていますが、すぐその後で「絶対にそんなことはありません」と力強く否定しています。神はその卓越性をいたずらにお用いにはなりません。神はいかなる時にも、その決して変わることはない恵みとその義の完全性をお示しになるために行動されます。神は、もし存在しておられるならば、完全で恵みに富み、全知全能の神であるはずで、そうでない神は神ではありません。哀れみの器であるモーセは、神の栄光のために用意された者とされたのです。それに対して、怒りの器であるパロは、滅びのために用意された者となったのです。15節の御言葉は、旧約聖書から引用された御言葉です。

彼らは早くも、わたしが彼らに命じた道からはずれ、自分たちのために鑄物の子牛を造

り、それを伏し拝み、それにいけにえをささげ、『イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ。』と言っている。
(出エジプト 32・8)

主はモーセに仰せられた。「あなたの言ったそのことも、私はしよう。あなたはわたしの心にかない、あなたを名ざして選び出したのだから。」すると、モーセは言った。「どうか、あなたの栄光を私に見せてください。」主は仰せられた。「わたし自身、わたしのあらゆる善をあなたの前に通らせ、主の名で、あなたの前に宣言しよう。わたしは、恵もうと思う者を恵み、あわれもうと思う者をあわれむ。」
(出エジプト 33・17～19)

主は彼の前を通り過ぎるとき、宣言された。「主、主は、あわれみ深く、情け深い神、怒るのにおそく、恵みとまことに富み、恵みを千代も保ち、咎とそむきと罪を赦すもの、罰すべき者は必ず罰して報いる者。父の咎は子に、子の子に、三代に、四代に。」

(出エジプト 34・6～7)

モーセによって、イスラエルの民はエジプトから贖い出されました。モーセがシナイ山の上において神と交わりをもっている間に、イスラエルの民は金で鑄た子牛を造りました。モーセは、この偶像を崇拜した民のために神にとりなし、その結果、神の哀れみを受ける事ができました。もしその時、神の哀れみがなかったとしたら、神の怒りによってイスラエルの民はもはや地上に

存在しなくなってしまうたことでしょう。ただ神の哀れみによって、イスラエルの民は滅びから免れたのです。

神の哀れみを人が妨げることはできません。そしてまた、この神の哀れみは人間の良い行ないによるのではありません。神は、御自分のあわれむ者をあわれみ、御自分のいつくしむ者をいつくしむ……。これは、神の自由です。神の自由意志によって人間は救われるのです。信ずる者はこの神の哀れみを体験しました。それはその人の願いや努力によるのではなく、哀れんでくださる神によることだったのです。

私たちが神に敵対する者であつたにもかかわらず、神は私たちを御自分のものとしてくださいました。この事は、私たち人間には理解する事も説明する事も不可能ですが、これは神の自由意志、すなわち神の御心にそつたことだったのです。モーセは自分の心を主に開きました。その結果、主はモーセに彼の罪を示すことができ、そしてモーセは主なる神の恵みを乞い願う者となりました。神の恵みを慕い求めた人は、それを体験することができます。罪人が神のもとにゆくと、神は義務的に私たちを赦してくださいさるものではありません。私たちを赦すことは神の御心であるがゆえに、神は私たちを赦し、哀れんでくださるのです。モーセの心が打ち砕かれることによって、モーセは栄光のために用意された器となりました。そしてこのモーセという器を通して、イスラエルの民族全体が救い出されたのです。

Ⅱ 怒りの器、すなわちパロについて

それと対照的なのはパロです。パロは、モーセのように神に対して心を開くことをしないで、かえって自分の心をかたくなにしました。モーセはイスラエルの全体を救いに導きましたが、パロはそれとは逆にエジプトの全体を神の裁きにおとしれました。モーセはへりくだることによって主に栄光を帰しましたが、パロは心をかたくなにして主に反抗しました。神は、パロがかたくな者となることをあらかじめ知っておられました。神がパロにエジプトの王という地位を与えたのは、その立場と権力を与えることによって彼の神に対する不従順を明らかにし、滅びに向かつて行く者として熟させることによって怒りの器とするためだったのです。出エジプト記に、「それでも、パロの心は、かたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。」という表現が、何回も繰り返してきます。

それでもパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主が仰せられたとおりである。

しかしエジプトの呪法師たちも彼らの秘術を使って同じことをした。それで、パロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞こうとはしなかった。主の言われたとおりである。

(出エジプト7・13、22)

ところが、パロは息つく暇のできたのを見て、強情になり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主の言われたとおりである。

しかしパロの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞き入れなかった。主の言われた

とおりである。しかし、パロはこのときも強情になり、民を行かせなかった。

(出エジプト 8・15、19、32)

パロは使いをやった。すると、イスラエル人の家畜は一頭も死んでいなかった。それでも、パロの心は強情で、民を行かせなかった。パロは雨と雹と雷がやんだのを見たとき、
またも罪を犯し、彼とその家臣たちは強情になった。

(出エジプト 9・7、34)

これらの箇所にも、パロは自分の心をかたくなにしたいと書いてあります。この結果、神は裁きとしてパロの心をさらにかたくなにしたと聖書に書いてあります。

しかし、主はパロの心をかたくなにされ、彼はふたりの言うことを聞き入れなかった。
主がモーセに言われたとおりである。

(出エジプト 9・12)

しかし主がパロの心をかたくなにされたので、彼はイスラエル人を行かせなかった。
しかし、主はパロの心をかたくなにされた。パロは彼らを行かせようとはしなかった。

(出エジプト 10・20、27)

モーセとアロンは、パロの前でこれらの不思議をみな行なった。しかし主はパロの心をかたくなにされ、パロはイスラエル人を自分の国から出て行かせなかった。

(出エジプト 11・10)

「わたしはパロの心をかたくなにし、彼が彼らのあとを追えば、パロとその全軍勢を通してわたしは栄光を現わし、エジプトはわたしが主であることを知るようになる。」そこでイスラエル人はそのとおりにした。

主がエジプトの王パロの心をかたくなにされたので、パロはイスラエル人を追跡した。しかしイスラエル人は臆することなく出て行った。

(出エジプト 14・4、8)

パロは、神が生きておられ、働いておられるということをよく知っていました。パロは、「神の指」(出エジプト 8・19)が働いたため、エジプトをぶよが襲ったということも知っていました。しかし、それにもかかわらず神の言うことを聞き入れなかったのです。神の忍耐を足げにし、神の警告に耳をかしませんでした。それゆえ、神はパロを御自身に対してめくらにし、つんぼにされたのです。パロは自らの救いを拒むことによって神の前に愚か者となり、自らの滅びをまねいたのです。ところが、結果的にはパロは神に反抗することによって、神の御計画を成就する者となりました。神が成就なさろうとする御計画を妨げることできるような人間は一人として存在しません。

このようにして、私たちはパロを通して、やはり主なる神の偉大さとその卓越性を知ることができます。主なる神は絶対的な力を持つ世界の支配者です。人間がたとえ神に従わず、へりく

だりの心を持たないとしても、そのことによって、かえって人間は神の御計画の推進者となるのです。全ての事柄を通して、神は御自身の計画を成し遂げられるからです。ですから、神に対して反抗することは愚かなことであり、また大変危険なことだということを知らなければなりません。

パロが怒りの器となったのは、彼自身のかたくなさのためであり、彼に責任があります。パロが怒りの器となり滅び行く者に定められたことは、神の勝手な思いではなく、パロ自身の罪の結果なのです。

モーセとパロを通して、私たちは、大切な次の二つのことを学ぶことができます。

1 哀れみの器とされることは、神の意志によるものであり、恵みによるのであるということです。

ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義とみとめられるのです。
(ローマ3・24)

2 人が自分を怒りの器とすることは、その人の神に対する反抗や心のかたくなさのゆえです。神はそのような人を、かたくなな者とし、滅びゆく者とする権利をお持ちになっておられます。

Ⅲ 人間の責任、すなわち私たち自身に関することについて

最後に、人間の責任についてもうすこし詳しく学んでみましょう。神の目的は、全ての人が

例外なく救われることです。それは、これらの聖句から明らかです。

事実、わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持つことです。わたしはその人たちをひとりひとり終わりの日によみがえらせます。(ヨハネ 6・40)

神はすべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

(Ⅰテモテ 2・4)

主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

(Ⅱペテロ 3・9)

しかしながら、この神の御心が実現するためには、人間が神の恵みを受けようとする心構えを必要とします。19節以下において私たちは、神と人間の絶対的な相違を学ぶことができます。多くの人々は、神を理解することができないため、神にどこか不完全なところがあると考えたり、神が気まぐれに事をおこなわれるかのように考えてしまっています。しかし、それはとんでもないことです。神は絶対的な主であられ、世界の支配者です。神は決して約束を取り違えるようなかたでもなければ、間違いをおかすこともありません。けれども、これに対して人間は、独善家で自

分の主張することを容易に訂正せず、自分自身を正しい者とするみじめで近視眼的な存在であり、神に敵対するものです。

謙遜に歩む者、従順に従う者、自分自身を信仰によって主に明け渡す者、こういう人々は、主からの祝福を受けます。ですから、この主の豊かな祝福を体験しない人があるとしたら、それはその人に責任があります。

わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。―神である主の御告げ。―彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。(エゼキエル 18・23)

彼らにこう言え。「わたしは誓って言う。―神である主の御告げ。―わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。」(エゼキエル 33・11)

あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。(ヤコブ 4・14)

人間は霧のようなものです。私たちは今日学ぶ箇所を通して、このことを深く心に留めたいも

のです。このことを示すために、主は陶器師と粘土のたとえを用いて、私たちに働きかけておられます。主は陶器師であり、私たちは御手のうちにある粘土です。

イスラエルの家よ。この陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。――主の御告げ。――見よ。粘土が陶器師の手の中にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の中にある。

(エレミヤ 18・6)

ああ、あなたがたは、物をさかさに考えている。陶器師を粘土と同じにみなしてよからうか。造られた者が、それを造ったものに、「彼は私を造らなかつた。」と言い、陶器が陶器師に、「彼はわからずやだ。」と言えようか。

(イザヤ 29・16)

ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造ったものに抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。

(イザヤ 45・9)

粘土が神によって用いられるようになるか否かは、私たち人間自身の決断によるのです。

ですから、だれでも自分自身を聖めて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。

(Ⅱテモテ 2・21)

人間のわがままな思い、つまり神に対して不平を言い、神に対して指図をしようという思いは、自分自身に滅びを招くことになります。主の御言葉を受け入れ、主に従う者は、主によって用いられる器となるのです。

人間は、その本性から言って怒りの器であり、不従順の子です。しかし聖書のどこをさがしても、神が人間を滅びに定めたとは書いてありません。しかしながら人間が生まれたままの状態、すなわち怒りの器であることに留まろうとするなら、その人間は裁きに会い滅びに会うのです。それゆえ聖書は何度も繰り返して、神との和解を受け入れなさいと私たちに告げているのです。主イエスを受け入れるものは、神の子供とされたと聖書に書いてあります。人間の内に住んでおられる主イエスは、栄光の望みです。内に住みたまう主イエスは成長して、私たちの内にキリストが形造られなければならないのです。主なる神が、私たち人間を造られたのは、私たちを通じて神の栄光が現われるようになるためです。自分を主なる神に開き明け渡すならば、その人を通じて神は御自身の栄光をあきらかになさることが出来ます。しかし主なる神に反抗し、恵みを拒み、神が与えられた光をしりぞけるものは、そのしりぞけた恵みを神から永遠に取り去られ、滅びゆく者と定められるのです。

主なる神は、永遠の昔にもうすでに私たち人間のうちに誰が主を受け入れ、従順に従う者になるかということを知っておられました。しかし、神は今日豊かな時代、恵みを提供しておられます。その神は、忍耐をもって怒りを抑えておられるのです。その理由は、私たちが悔い改めて導

かれるためです。

「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」
(ローマ2・4)

神の慈愛に対する私たちの態度は、それを軽んずるか、感謝をもって受け入れるかのどちらかしかありません。

パロは自分自身をかたくなにすることによって、神からさらにかたくな者とされてしまいました。このように人間の債務と神の裁きは、常に関係があります。また、パロは自分自身をかたくなにし、怒りの器となったにもかかわらず、そのことによっても、また神は御自身の偉大さと卓越性をあきらかにされたのです。次の御言葉によって、それはあきらかです。

それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。
また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。
(出エジプト9・16)

イスラエルは主がエジプトに行われたこの大いなる御力を見たので、民は主を恐れ、主とそのしもべモーセを信じた。
(出エジプト14・31)

ミリヤムは人々に答えて歌った。「主に向かって歌え。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれた。」
(出エジプト15・21)

モーセ、ミリヤム、そしてイスラエルの民全体は、エジプトのパロのかたくなさを通して、主なる神の偉大さと卓越性を見た結果、主に感謝しほめたたえました。15章14節から16節をみれば、イスラエルの民だけではなく周囲の国々の民も、主を恐れるようになったと書いてあります。すなわち、9章16節の預言は、ここに成就されたのです。

「それにもかかわらず、わたしは、わたしの力をあなたに示すためにあなたを立てておく。また、わたしの名を全地に告げ知らせるためである。」
(出エジプト9・16)

ローマ人への手紙9章24節から26節までには、主の哀れみが単にユダヤ人だけではなくやがて異邦人にも及んで、怒りの器を恵みによって哀れみの器とすることで書かれています。新約時代になり主の復活の後、五旬節には三千人の人々が提供された恵みを受け入れました。

なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。

そこで、彼のことを受け入れた者は、バプテスマを受けた。その日、三千人ほどが弟子に加えられた。
(使徒2・39、41)

彼らは哀れみの器とされたのです。哀れみの器は栄光のためにあらかじめ用意されたものです。なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじ

め定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。

(ローマ 8・29-30)

主イエスの十字架は、全人類に向かって「あなたがたはわたしの民ではない。死に定められた者である。しかし、もし提供された恵みを受け入れるなら、哀れみの器と変えられるのだ。」と私たちに語っています。私たちはいつたい哀れみの器でしょうか。それとも怒りの器でしょうか。どちらの器になるかは私たちの責任です。

なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった。」のであって、「つまずきの石、妨げの岩。」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからです。またそうなるように定められていたのです。

(Iペテロ 2・6-8)

「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」

(ヨハネ 3・36)

21 つまづきの石であるイエス

ローマ人への手紙

9 章 27 節から 33 節まで

神の容赦のない裁き——七つの例——

I 罪を犯した天使たち

II ノアの洪水が起こる前の世界

III ソドムとゴモラ

IV エジプトの王パロ

V エジプトの初子

VI イスラエルの民

VII 神の子

「義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。

すなわち、信仰による義です。(ローマ9・30)」主イエスによる救いを証する平井正彦さん・和子さんご夫妻。



前項で私たちは、主なる神の人間に対する絶対的な主権、あるいは陶器師の粘土に対して持っている権利について、またそこから導き出される二つのことを学びました。

1 神である主が人間を哀れみの器としてくださいます。これは神の御心であると同時に、主から与えられる恵みです。恵みは、人間が自分の力で獲得できるものではありません。信者は誰でも、自分は恵みに値いしない者であり、裁かれてしかるべき者だということをよく知っています。それにもかかわらず、主なる神が恵みによって救ってくださったのです。

2 人間が主なる神を拒むと、主は人間の心をかたくなにされます。これは主の裁きです。人間が自分を怒りの器とすることは、神に責任があるのではなく、人間の側に責任があるのです。

これらのことを考えることによって、私たちは人間の責任ということについて学びました。つまり人間は、自分勝手な道を歩む危険性を持っています。人間は、だめになるか、それとも救われるかのどちらかです。人間が、自分を哀れみの器にするか、それとも滅びの器にするかは、そのひと自身の決断にかかっています。

今日のテーマは「つまずきの石、妨げの岩であるイエス」とすることが出来ます。

また、²⁷イスラエルについては、イザヤがこう叫んでいます。

「たといイスラエルの子どもたちの数は、海べの砂のようであっても、救われるのは、残されたものである。²⁸主は、御言葉を完全に、しかも敏速に、地上に成し遂げられる。」

また、²⁹イザヤがこう預言したとおりです。

「もし万軍の主が、私たちに子孫を残さなかったら、私たちはソドムのようになり、

「ゴモラと同じものとされたであろう。」

では、³⁰どういうことになりますか。義を追い求めなかった異邦人は義を得ました。すなわち、信仰による義です。³¹しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めながら、その律法に到達しませんでした。³²なぜでしょうか。信仰によって追い求めることをしないで、行いによるかのように追い求めたからです。³³彼らは、つまずきの石につまずいたのです。それは、こう書かれているとおりです。

「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。彼に信頼する者は、失望させられることがない。」
(ローマ9・27-33)

ここで扱われている内容は、自分の義と神の義との間の戦いです。このテーマを他の言葉で言いかえると、「容赦しない神」あるいは「神の容赦のない裁き」です。謙遜でくだかれたたましいに対しては神の哀れみがあるが、傲慢で自分を正しいとする者に対しては、神の怒りが下るということです。このことを聖書から七つの例を引いて、考えて見たいと思います。

I 神に対して反抗する罪を犯した天使たち

多くの人々は神は愛であると語ります。しかしながら聖書の神は、真実の愛であるお方だけではなく、正しい怒りを下される方でもあります。

見よ。すべてのいのちはわたしのもの。父のいのちも、子のいのちもわたしのもの。罪

を犯した者は、その者が死ぬ。

(エゼキエル 18・4)

先週私たちは、人間の債務と神の裁きとは関係があるということを学びました。人間の罪に対しては必ず裁きが伴います。第一の例は、神に対して反抗する罪を犯した天使たちの例です。

神は、罪を犯した御使いたちを、容赦せず、地獄に引き渡し、さばきの時まで暗やみの穴の中に閉じ込めてしまわれました。

(Ⅱペテロ 2・4)

また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。(ユダ 6)

悪魔は、かつては天使たちの頭として神に仕える者でしたが、神に反抗することによって罪を犯し、この悪魔によって天使たちも罪を犯すようになったのです。悪魔とこの墮落した天使たちは、ともに主なる神の怒りのもとにあります。裁きが容赦なくやってきます。

それから、王はまた、その左にいる者たちに言います。「のろわれた者ども。わたしから離れて、悪魔とその使いたちのために用意された永遠の火にはいれ。」

こうして、この人たちは永遠の刑罰にはいり、正しい人たちは永遠のいのちにはいるのです。

(マタイ 25・41、46)

神は、悪魔と罪を犯した天使を容赦することはなさいません。罪を犯した者には、裁きが下されます。多くの人々は、自分自身に満足しています。ですから、とりたてて他の人々に対して悪いことをしなければ神によって裁かれることはないと思つていますし、あわよくば天国に入れてもらえるのではないかと思つています。しかしながら、新しく生まれることを体験しない人は、いつか驚きとともに自分自身の状態に目を開かせられることになります。

わたしに向かつて、「主よ、主よ。」と言う者がみな天の御国にはいるのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行なう者がはいるのです。その日には、大ぜいの者が、わたしに言うでしょう。「主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なつたではありませんか。」しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。「わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。」

(マタイ7・21-23)

神の御心を行なうことを望まない者は、神の裁きを免れることができません。神は私たちを愛してくださる方ですが、それとともに、私たちの罪をただでは見逃すことはなさらない方です。神は、悪魔と罪を犯した天使を容赦することはなさいませんでした。あなたは、神の裁きを免れることができるでしょうか。

Ⅱ ノアの洪水が起こる前の世界

第二の例は、ノアの洪水が起こる前の世界のことです。

また、昔の世界を赦さず、義を宣べ伝えたノアたち八人の者を保護し、不敬虔な世界に洪水を起こされました。

(Ⅱペテロ2・5)

主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾くのをご覧になった。それで主は、地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。そして主は仰せられた。「わたしが創造した人を地の面から消し去ろう。人をはじめ、家畜やうもの、空の鳥に至るまで。わたしは、これらを造ったことを残念に思うからだ。」しかし、ノアは、主の心になつていった。

これはノアの歴史である。ノアは、正しい人であつて、その時代にあつても、全き人であつた。ノアは神とともに歩んだ。ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤベテを生んだ。地は、神の前に墮落し、地は、暴虐で満ちていた。神が地をご覧になると、実に、それは、墮落していた。すべての肉なるものが、地上でその道を乱していたからである。そこで、神はノアに仰せられた。「すべての肉なるものの終わりが、わたしの前に来ている。地は、彼らのゆえに、暴虐で満ちているからだ。それで今わたしは、彼らを地とともに滅ぼそうとしている。」

(創世記6・5-13)

こうして、主は地上のすべての生き物を、人をはじめ、動物、はうもの、空の鳥に至る

まで消し去った。それらは、地から消し去られた。ただノアと、彼といっしょに箱舟にいたものたちだけが残った。

(創世記 7・23)

ノアは神の命令によって箱舟を作りました。この箱舟は神の避けどころを意味します。ノアは神の義と裁きを人々に告げ知らせましたが、誰も彼の言うことを信じませんでした。ただ八人だけが神を信じ洪水の裁きを免れましたが、その他の者は全部水に溺れて死んでしまいました。主イエスはこの事実を次のように説明しておられます。

人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。

(マタイ 24・37-39)

ノアの時代の人々は、罪の支払う報酬は死であるということを忘れてしまい、神は罪を見逃しにされる方ではないということを忘れ去っていました。しかしこれは今日の私たちの状態に似ていないでしょうか。多くの人々は、大変忙しい毎日を過ごしています。そして最も大切なことを忘れてしまっています。つまり自分と神、主との交わりを忘れているのです。主イエスは「人は新しく生まれなければ、神の国に入ることはできない」と言われました。あなたは新しく生まれることをすでに体験なさったでしょうか。ノアの時代、箱舟に逃れた者たちは、死を免れること

ができました。今日の私たちにとって、主イエスの救いがノアの箱舟に相当します。すなわち、主イエスによつてのみ、父なる神のもとに行き、天国に入ることができるのです。

Ⅲ ソドムとゴモラ

第三の例は、ソドムとゴモラです。

また、ソドムとゴモラの町を破滅に定めて灰にし、以後の不敬虔な者へのみせしめとされました。

(Ⅱペテロ2・6)

愛の神は、このソドムとゴモラという二つの都市の罪を、容赦されなかったのです。

そのとき、主はソドムとゴモラの上に、硫黄の火を天の主のところから降らせ、これらの町々と低地全体と、その町々の住民と、その地の植物をみな滅ぼされた。

(創世記19・24～25)

罪には必ず、容赦のない裁きがくだされました。この裁きは私たちに対する警告です。ソドムとゴモラに当時住んでいた人たちは、神の裁きをおそれようとせずに、それを馬鹿げたことであるとあざ笑いました。

そこでロトは出て行き、娘たちをめぐった婿たちに告げていった。「立ってこの場所から出て行きなさい。主がこの町を滅ぼそうとしておられるから。」しかし、彼の婿たちに

は、それは冗談のように思われた。

(創世記 19・14)

主はねたみ、復讐する神。主は復讐し、憤る方。主はその仇に復讐する方。敵に怒りを保つ方。だれがその憤りの前に立ちえよう。だれがその燃える怒りに耐えられよう。その憤りは火のように注がれ、岩も主によって打ち砕かれる。

(ナホム 1・2、6)

「だれがその燃える怒りに耐えられよう」という、この質問に対して、聖書はこう答えています。主イエスによって新しく生まれることを体験することによって、神の怒りを免れることができる。

IV エジプトの王パロ

第四の例はエジプトの王パロです。前回学んだように、パロは神が働いておられることをよく知っていました。モーセとイスラエルの民の背後には、生ける神が立つておられることも知っていました。しかし、それにもかかわらず彼はへりくだらなかつたのです。パロはわかつていながら主を拒むことによって、主の主権を軽んじたのです。パロは何度も何度も神の語りかけを体験しましたが、その度に神を拒みました。彼は神の御声を聞くことを欲せず、くだかれることも欲しなかつたのです。もしパロが神の前にへりくだつたならば、まちがいなく彼は哀れみの器となつたことでしょう。けれども彼は、怒りの器に定められたのです。もちろん神はパロをもお救い

になりたいと思っておりましたが、パロは真理を知ることを望みませんでした。神は正しい方ですから、人間の罪を見逃すことはなさいません。それゆえ、パロは裁きに会ったのです。

V エジプトの初子

第五の例は、エジプトの初子、つまり初めて生まれた子供のことです。

真夜中になって、主はエジプトの地のすべての初子を、王座に着くパロの初子から、地下牢にいた捕虜の初子に至るまで、また、すべての家畜の初子をも打たれた。

(出エジプト12・29)

出エジプト記を通して、私たちは二つのことを学ぶことができます。一つはすばらしい救いの体験であり、もう一つは神の容赦のない裁きです。いったい何によってこの違いが生じたのでしょうか。この決定的な相違をもたらしたのは、「血」です。神は裁きを免れることはできないと言われましたが、それと同時に、救いの道を示してくださいました。羊の頭にイスラエル人がその両手を置き、その羊をほふり、流された「血」を戸口のかもいに塗ることにによって裁きを免れるようにされたのです。羊に手を置くことは、手を置いた人の罪が羊にうつされたことを意味していました。そしてその羊はイスラエル人の罪の身代わりとしてほふられたのです。流された「血」は、裁きが通り過ぎた、もう終わったということの意味しています。

それで、律法によれば、すべてのものは血によってきよめられる、と言ってよいでしょ

う。また、血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。

(ヘブル 9・22)

もし、私たちが裁きに会いたくなければ、私たちのためにも「血」が流されなければなりません。主イエスの血潮は、私たちの罪のためにすでに流された「血」です。主イエスの「血」を信じる者は、「血」の力を体験します。罪の赦しとは、普通考えられるように宗教によってもたらされるものではなく、また、人間の考え出した立派な教えによってもたらされるものでもありません。ただ流された主イエスの血潮によってのみもたらされるのです。教えによるのではないということは、主イエスの流されたこの「血」について頭で理解することが大切なのではないということです。また、宗教によるものでもないということです、この流された「血」の力を私たちが感ずるかどうかということでもないということです。問題なのは、この血潮について、聖書が何を言っているかということであり、また聖書の語っていることを私たちが「信じる」かどうかということなのです。聖書が、主イエスの流された「血」について語っていることを信じるならば、私たちはこの「血」に対して感謝をささげるようになります。そして、そのように感謝することによって、私たちは血潮の力を体験することができるのです。血潮の力を体験したならば、その価値を理解することもできるようになります。

もしエジプト人が、イスラエル人と同じように子羊をほふってかまいに血を塗ったならば、彼らも裁きを免れたことでしょう。ところが彼らは、おそらくイスラエル人のしていることを馬鹿げたことであるとあざ笑ったのでしょうか。そしてその結果は裁きでした。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

(Iヨハネ1・7)

Ⅵ イスラエルの民

第六の例は、イスラエルの民です。

もし神が台木の枝を惜しまれなかったとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

(ローマ11・21)

台木とは、イスラエルの民を意味しています。私たちはすでに9章で、神が選ばれた民族はイスラエルだけだったということを学びました。神はイスラエルの民をご自分の瞳にたとえられるほど愛されました。

主は荒野で、獣のほえる荒地で彼を見つけ、これをいだし、世話をして、ご自分のひとみのように、これを守られた。

(申命記32・10)

しかしこのイスラエルの民は神を拒み、神の御子を十字架につけました。イスラエルの民は、神の提供された救いを受けること望まなかったのです。

ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打

つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。

(マタイ 23・37、38)

ユダヤ人たちは、自分自身のりっぱな行ないによって自分を義としようと望んだのでした。つまり彼らはへりくだって悔い改め、神から提供された義を子供のような信頼をもって受けようとは望まなかったのです。恵みの神に信頼するかわりに、彼らは自分自身の力で自分をより良くしようと思ったのです。神の恵みが提供されているにもかかわらず、彼らはその恵みを拒んだのです。その原因は不信仰です。

そうすれば、この方が聖所となられる。しかし、イスラエルの二つの家には妨げの石とつまずきの岩、エルサレムの住民にはわなとなり、落とし穴となる。(イザヤ 8・14)

この預言は成就されました。提供された恵みを高慢に拒む者にとつては、主イエスは妨げの石であり、つまずきの岩であり、このような高ぶりにある彼らは滅びます。一方、へりくだって信仰によって主イエスを受け入れる者は、救われて栄光を受けるようになります。自分自身の努力に頼ろうとする歩みには、安らぎも救いありません。自分の力に頼ろうとする者は、自分が罪人であるということを認めませんし、自分の力では神を喜ばすことができないということを知りません。イスラエル人の特徴は、高慢と自己中心と闇のわざを愛することでした。彼らは、神の

御声に耳を傾けようとしませんでしたし、救いを受けることも、主イエスの前にへりくだることも望みませんでした。

家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

(詩篇 118・22、23)

捨てられた石、つまり主イエスは永遠の救いの礎となりました。私たちが主イエスに対してどのような態度をとるかで、私たちが永遠に滅びるか、あるいは永遠に生きるかが決まります。

御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。

(ヨハネ 3・36)

また、シメオンは両親を祝福し、母マリヤに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」

(ルカ 2・34)

このシメオンの預言は成就されました。神の恵みの提供を受ける者は救われます。

VII 神の子

最後の例は、神の子です。

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

(ローマ 8・32)

わたしたちはこれまで、愛の神は同時に罪を容赦されない神であるということを学んできました。神は、悪魔と墮落した天使を容赦なさいませんでした。また、洪水前の世界をも容赦されませんでした。ソドムとゴモラも、パロも、エジプトの初子も滅ぼされました。そして、台木の枝であるイスラエルの民でさえも容赦なさいませんでした。赦されなかった理由は、全て彼らの罪のゆえです。しかしまた聖書には、神はご自分のひとり子をも容赦されなかったと書いてあります。主イエスは、潔くしみも汚れもない、罪を犯されなかった神の御子でした。それではなぜ、主イエスは神によって赦されなかったのでしょうか。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

しかし、彼を砕いて、痛めることは主のみどころであつた。もし彼が、自分のいのちを罪過のためのいけにえとするなら、彼は末長く、子孫を見ることができ、主のみどころは彼によって成し遂げられる。

(イザヤ 53・4、10)

なぜイエスは、罰せられ、神に打たれ、苦しめられ、容赦なく捨てられたのでしょうか。その

答えは、同じイザヤ書の53章5節にあります。

しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために碎かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

(イザヤ53・5)

主イエスが十字架上で死なれたのは、御自身の罪のためではなく、私たちの罪のためです。私たちの罪を贖い、私たちに永遠の命を与えるために、神は御自身の御子を容赦せず、惜しまず死に渡されたのです。それは十字架上で主イエスが、「なにゆえ、私をお見捨てになったのですか。」と叫ばれたほどでした。神は御自身の御子を惜しまれませんでした。神は十字架上にご自身の御子をご覧になったのではなく、全世界の罪そのものをご覧になったのです。

神は罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあつて、神の義となるためです。

(Ⅱコリント5・21)

神が、御自身の御子をお見逃しにならなかったのは、神の私たちに対するまったくき愛の現われです。

罪からくる報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

(ローマ6・23)

主イエスを拒む者は容赦なく裁きに定められますが、主イエスを受け入れる者には、恵みと哀れみが与えられるのです。つまずきの石は同時に神の恵みへの道です。自分の義に頼って救われようと思う者は主イエスにつまずきます。神の道を拒むこと、このことが人生における最大の失敗です。しかし主イエスに信頼する者は、決して失望させられることはありません。

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔ははすかしめないでください。」

(詩篇34・5)

この部分は、文語訳聖書によると「彼らの顔は、恥赤らむことなし。」となっています。あなたもこの主イエスを信頼なさいませんか。

22 提供された義に対する態度

ローマ人への手紙

10章1節から21節まで

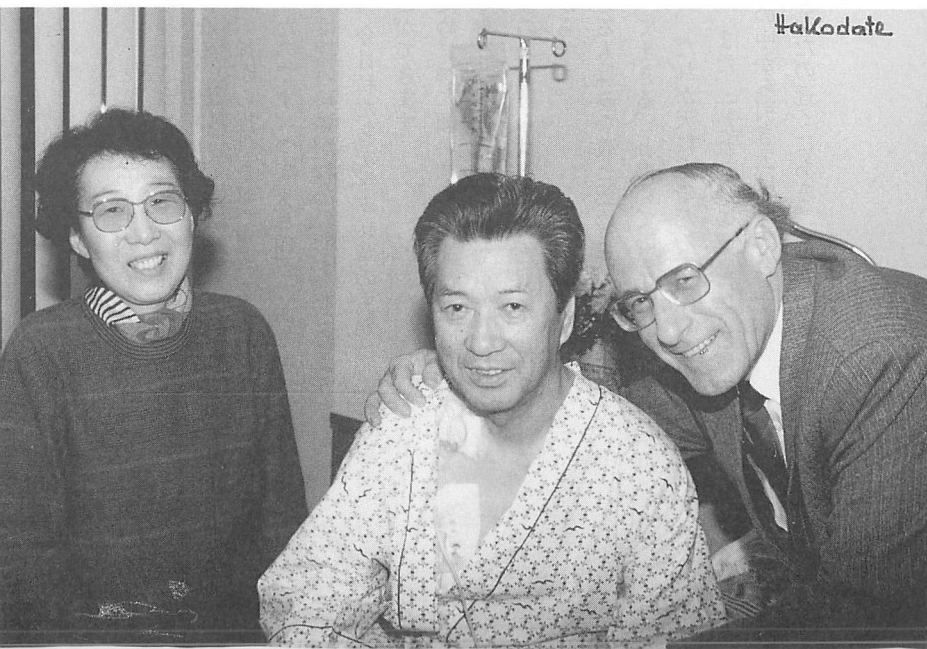
I 義とされるための二つの道
II 自己義認の道

(イスラエル、サウロ、パリサイ人)

III 神によって義とされる道

IV 岐路に立たされている私たち

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われるのです。(ローマ10・13)」小川幸一さん・昭子さんご夫妻とベックさん。



9-11章までのテーマは「自分の義と神の義との戦い」ということでした。私たちは9章を通して、神がどのようにイスラエルの民に恵みと救いを提供されたかを学んだわけです。イスラエルの民も、異邦人も、共に主の恵みにあずかるようになる、ということがすでにホセア書で預言されていました。ところが多くのイスラエル人たちは、神から提供された恵みを拒んでしまいました。一方、異邦人はこの恵みにあずかるようになったのです。つまり石である主イエスによって、ユダヤ人はつまずきました。しかし、異邦人は救いに導かれたのです。そのような時、イスラエル人はどのような態度をとったでしょうか。今日私たちが学ぶ10章の主題は、「提供された義に対する現在のイスラエルの態度」とすることが出来ます。

兄弟たち。私が心の望みとし、また彼らのために神に願い求めているのは、彼らの救われることです。私は、彼らが神に対して熱心であることをあかしします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。モーセは、律法による義を行なう人は、その義によって生きる、と書いています。しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、だれが天に上るだろうか、と言っているのか。それはキリストを引き降すことです。また、「だれが地の奥底に下るだろうか、と言っているのか。それはキリストを死者の中から引き上げることです。」

では、どう言っていますか。「みことばはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あ

あなたの心にある。」これは私たちの宣べ伝えている信仰のことばのことです。なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」ユダヤ人とギリシヤ人との区別はありません。同じ主が、すべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に対して恵み深くあられるからです。「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることができるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝える人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。次のように書かれていますとおります。「良いことの知らせを伝える人々の足は、なんとりっぱでしょう。」¹⁶しかし、すべての人が福音に従ったわけではありません。「主よ。だれが私たちの知らせを信じましたか。」とイザヤは言っています。¹⁷そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。¹⁸でも、こう尋ねましょう。「はたして彼らは聞こえなかったのでしょうか。」もちろん、そうではありません。「その声は全地に響き渡り、そのことばは地の果てまで届いた。」¹⁹でも、私はこう言いましょう。「はたしてイスラエルは知らなかったのでしょうか。」まず、モーセがこう言っています。「わたしは、民でない者のことで、あなたがたのねたみを起こさせ、無知な国民のことで、あなたがたを怒らせる。」

またイザヤは大胆にこう言っています。「わたしは、わたしを求めない者に見いだされ、わたしをたずねない者に自分を現わした。」²⁰ またイスラエルについては、こう言っています。「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」²¹

(ローマ 10・1-21)

私たちは、ユダヤ人たちが恵みによる義を拒み続けていることをここに読むことができます。10章の内容を一言で言い表わすならば、悔い改めと信頼を通して誰でも救われるということです。また、イスラエルの民は自分自身のした行ないのために罪に定められているということです。そこで私たちは、本文を次の四つに分けて考えてみることにしたいと思います。

I 義とされるための二つの道

II 自己義認の道（イスラエル、サウロ、パリサイ人）

III 神によって義とされる道

IV 岐路に立たされている私たち

I 義とされるための二つの道

聖書は、私たちが神の前に出るために道が二つあると語っています。それは、律法による道と、恵みによる道の二つです。律法の道によれば、私たちは律法の要求を百パーセント満たさなければ義とされることができません。律法によって神は私たちに良いこととは何であるか、また、神

によって何が要求されているのかをはっきりと示しておられます。もし人が律法の要求をすみからすみまで完全に満たすことができれば、その人は神の前に義とされることが出来ます。このような人は、自分の義によって神のもとに来て救いを受けることが出来ます。つまりこの人は、自分の正しさのゆえに救いにあずかることができたのです。ところが、このように自分の義によって神の前に義とされた人は、ただひとりを除いてはだれもいないのです。そのひとりとは、もちろんイエス・キリストのことです。

しかし、聖書の語っている第二の道は、このような自己義認の道ではなく、主イエスの義による道です。この主イエスの義による道は、私たちが自分の努力で手に入れることができるものではありません。ただ恵みによる贈り物としてだけ、私たちが受けることができるものなのです。この二つのうちで、はじめに述べた道は罪を背負った人間には決して進むことのできない道です。律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。

(ヤコブ 2・10)

聖書全体は、「義人はいない、ひとりもない」と告げています。主イエスだけが、律法を完全に行なうことができたただひとりのお方です。主イエスはご自身の義によって、神の前に義と認められました。ですから、主イエスが律法の「終わり」となられたのです。

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。

(ローマ 10・4)

この主イエスを受け入れる者は、だれでも主イエスのゆえに義とされるのです。これが第二の道です。そこで、この二つの道をもう少し詳しく見てみましょう。

Ⅱ 自己義認の道

モーセの五書、つまり、創世記から申命記までにおいて、モーセは神の律法をあますところなく記しています。神の律法を行なう者は生き、律法を破る者は死ななければなりません。イスラエルの民は何とかしてこの律法による道を歩もうとしました。自分自身の力によって義とされようとする、これがユダヤ人の特徴でした。このようにして、イスラエルの民は神の提供された道を断固として拒んだのです。

「神のことは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。」

(使徒 13・46)

これがイスラエルの民の悲劇でした。彼らはへりくだることを望みませんでした。律法は、常にあなたがたはこれをしななければならない、と私たちに要求してきます。律法の要求は自分自身の力ではとうてい満たすことのできないものであり、生まれつきのままの古い人間には無理な要求です。自分自身の力や努力によっては、生まれながらの人間は新しい人間に生まれ変わる

ことができません。律法の道は次のように語っています。律法の道を歩む者は、従うことを望みませんし、へりくだることも望みません。また、主を認めることを望まないで、何事でも自分自身の思いでなすことができると思っています。御名に助けを呼び求めようとしませんし、神の御声に聞き従うことなど考えてもみません。このような者は、神に対して反抗する者です。パウロはユダヤ人の特徴について、彼らは神に対して熱心であると語っています。確かに彼らは大変熱心であるかもしれませんが、その熱心は真理に基づくものではありません。つまり、彼らはへりくだろうとしませんでしたから、自分自身の置かれている状態を悟ることができなかったのです。パウロはそのような熱心さの実例を自分自身の経験に照らして示しています。彼は、自分自身の神に対する熱心さは、教会を迫害するほどであったと言っています。

その熱心さは教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。

(ピリピ 3・6)

このパウロの語っている律法の義が、すなわち自己義認なのです。彼は、自分自身の状態に対して盲目であったと同時に、神に対して盲目でした。ルカ18章に出てくるパリサイ人は、この自己義認についてのもう一つの例です。

パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。「神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。」

(ルカ 18・11)

今日でも、なんと多くの人々が自分自身の義をもとめて、熱心に活動していることでしょうか。なんと一生懸命に「私には非難されるところがない」と言おうとしていることでしょうか。ところが、彼らの熱心さは、残念ながら正しい熱心さだと言うことができないのです。彼らの熱心さは自分自身から出たものですから、どこまでいっても神を認めるようにはならないのです。

Ⅲ 神によつて義とされる道

聖書はこの第二の道を、「神による義」あるいは「信仰による義」と呼んでいます。恵みの道の特徴は、人間の神に対する信仰と信頼です。10章は、この道について私たちに示そうとしています。

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。

なぜなら、もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。人は心に信じて義と認められ、口で告白して救われるのです。聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

(ローマ 10・4、9-11、13)

主イエスは律法を完全に守られただけではなく、律法を破った人々の上にとどまっている神のろいと裁きをも取り除いてくださったのです。それゆえ、主イエスは私たちにとって義となられたのです。主イエスを受け入れる者には、神の聖霊が与えられます。この聖霊は律法を行なうことができる力を持っています。ですからもう私たちは天に昇る必要はないと聖書は教えています。というのは、主イエスが天から下って来てくださったからです。また、私たちは地の奥底にくだる必要ありません。主イエスが死者の中から引き上げられ、死を克服されたからです。パウロは「みことばはあなたの近くにある。」と語っています。私たちはみことばを正しく聞くことができさえすれば、信仰が与えられるのです。

信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

(ローマ10・17)

信仰の土台となるのは、神のみことばです。そのみことばを聞く者は生きた信仰を持つ者となります。「信じる人はみな義と認められるのです。」とあるとおりです。主イエスを受け入れるということは、とりもなおさず義を自分のものにするということです。

Ⅳ 岐路に立たされている私たち

今まで見てきましたように、私たちに与えられている二つの道とは、律法による道と恵みによる道です。私たちはこの二つの道を二つのはしごにたとえることができるでしょう。

第一のはしごは地上に立っているはしごで、このはしごを人は下から上へ自分の力で登り、神に達しようと試みますが、結局は不可能です。このはしごを登ろうとする者は、その目的を達することができません。この世の宗教は、多かれ少なかれこのはしごのようなものであると言うことができません。それに対して第二のはしごは、上から下へとかけられています。たとえば大きな船の上から降される縄ばしごのようなものです。このはしごは、行ないのはしごではなく、恵みのはしご、あるいは信仰のはしごと名付けることができます。そのはしごの一番下の段をつかめば、その人は救われるのです。

それでは、神は第一のはしご、つまり行ないによるはしごをどうして人間にお与えになったのでしょうか。ガラテヤ書3章24節によれば、「律法は私たちをキリストへ導くための養育係り」であると書かれています。誰でも始めはこの律法による道を歩んで、神に到達しようと試みます。自分で罪を捨て去って律法を行なおう、自分こそそれをすることができるという確信を持っているのですが、このような人が歩もうとしている道は大変危険な道であると言わなければなりません。なぜなら、彼は完全を要求されるからです。

だれでもモーセの律法を無視する者は、二、三の証人のことばに基づいて、あわれみを受けることなく死刑に処せられます。

(ヘブル10・28)

罪から来る報酬は死です。

(ローマ6・23)

その者たちはやがて時いたって神の白い御座の前に出るようになります。そして、その時もはや恵みは閉ざされており、一人一人の上に神の裁きがくだされるのです。

「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」
(ガラテヤ3・10)

神にのろわれるということは、永遠の滅びに定められるということを意味しています。ところが、もし罪人である私たちが、自分自身で律法を行なおうとする力がないということを認め、神に恵みを願い求めるのならば、私たちは救いをこの身に体験することができましょう。

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、イエスの血によって、大胆にまことの聖所にはいることができます。イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのためにこの新しい生ける道を設けてくださったのです。
(ヘブル10・19-20)

ここには「イエスの血によって……新しい生ける道を設けてくださった」と書かれています。自分の罪を認めた人は、自分が死に定められた人間であるということを知っています。そのような者たちにとって、神の裁きの目的は、自分ではなく主イエスの十字架です。イザヤ書53章5節には、主が御子イエスに下された懲らしめがどのようなものであったかが記されています。罪人が生きるようになるためには、主イエスの十字架が必要でした。主イエスは私たち罪人に永遠のいのちをお与えになるために私たちの代りに死なれました。

神はキリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。

(ローマ3・25)

自分自身の罪の債務を自覚している罪人、十字架上で主イエスがその自分の罪の債務をことごとく担ってくださったということを知っている罪人は、信仰へと導かれた人です。このような人はもはや自分の力でなにかができるとは思いません。彼はもはや「私はできる」とは言わず、「私は信じる」と言うのです。その人は、信仰によって神の義を自分のものとすることができます。自分の罪が赦されていると確信し、神の義を受け入れた人は永遠のいのちを自分のものにすることができます。

わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からのちに移っているのです。

(ヨハネ5・24)

このような裁きを免れた人は、終わりの日に白い御座の前に立つことはありません。そのかわりに、彼はキリストのさばきの座に現われることになります。

なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に應じて報いを受けることになるからです。

(Ⅱコリント5・10)

そのキリストのさばきの座とは、キリストを信じた者たちにキリストが備えてくださった称賛の場です。その時に信者がキリストの力によってなしたわざと、信者が自分の力によってなしたわざとの違いが明らかになります。

第一の道の結末は永遠の滅びであり、第二の道の結末は永遠の栄光です。主は私たちが正しい道を選ぶことを望んでおられます。正しい道とは行ないの道ではなく、信仰による道にほかなりません。この信仰の道は10章の中でくりかえしでてきますが、旧約聖書からの引用によってさらに福音そのものをよりはっきりさせています。特に11節と13節はそれを最も簡潔に述べています。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる。」のです。

(ローマ10・11、13)

「だれでも」ということばは、もはやユダヤ人と異邦人との区別がなくなったということを意味しています。主イエスとともに十字架につけられた強盗はこのひとつの実例です。彼は、人々からさげすまれ、あざけられていた主イエスを自分の救い主として認め受け入れたのです。「主よ。私のことをおぼえてください。」と彼は懇願しました。これこそ信仰です。彼は主イエスを主として認める前に、自分が罪人であることを認め、またその罪を告白しました。

「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」

(ルカ23・41)

これは自分自身が、希望のない捨てられた存在であるということを認めた人間が自分自身に対して下す判決です。悔い改めのない信仰、そのようなものは現実には存在しません。そのようなものは真の救いへ導くことがないからです。悔い改めのない信仰は、生きておられる神の福音ではありません。

最後に9節に書かれている大変重要なことについて考えてみましょう。すなわち、まず第一に「あなたの口でイエスを主と告白」するということの重要性です。主イエスを自分の主として「見いだすこと」、「認めること」、また「告白すること」。このことによって救いの確信がもたらされます。

9節で述べられている第二のことは、「神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じる」ことです。神のなさったことは、絶対的なことです。そのことに対して私たちのなしうることは、ただ神に信頼する、すなわち信じるということだけです。私たちは主イエスを引き降そうとする必要はありません。主イエスは天から下ってきてくださったからです。また、私たちは主イエスを死者の中から引き上げる、つまり復活させようとする必要はありません。神はもうすでにそれをなしてあげてくださったからです。私たちのなしうることは、ただ神のなしとげられたみわざに信頼して、それを自分自身のこととして受け入れ、神に感謝をささげることだけです。

イスラエルの民は、確かに福音が何であるかをよく知っていました。しかし、彼らは聞き従う

ことを望みませんでした。

しかし、すべての人が福音に従ったものではありません。

不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。(ローマ10・16、21)

イスラエルの民は、神から与えられた恵みの賜物を自分のものにしようとはしないで、自分自身の力で自分自身の義を追い求めてきたのです。私たちは、律法による義と信仰による義との二つの別れ道に立たされています。この岐路に立たされている私たちは、いったいどのような選択をなすべきでしょうか。神が示された道を歩もうと望まない人は、霊的に盲目にされてしまします。そして最終的には、イスラエルと同じようにかたくな者となってしまいうでしょう。神はみことばをもって私たちに決断を迫っています。たとえば、結婚で間違った選択をしてしまうことを「百年の不作」などといいますが、神の恵みを拒むということは、私たちにとって実に永遠の大問題なのです。

主なる神の永遠に朽ちない栄光に到達するためには、自分自身の努力は何の足しにもなりません。ただ、神のなしたもうたみわざを認めてそれを自分のこととして受け入れることによってのみ、人間は神の永遠の栄光に到達することができますのです。私たちは、イスラエルの民を例にして、現代に至るまでの約二千年の世界史において、神を認めずに自分自身の道を歩もうとすることがいかに恐るべきことであるか、ということを知ることができます。私たちはいったい神の示してくださった道のうちでどちらを選び、歩んでゆこうとしているのでしょうか。

23 されど神は

ローマ人への手紙

11章1節から36節まで

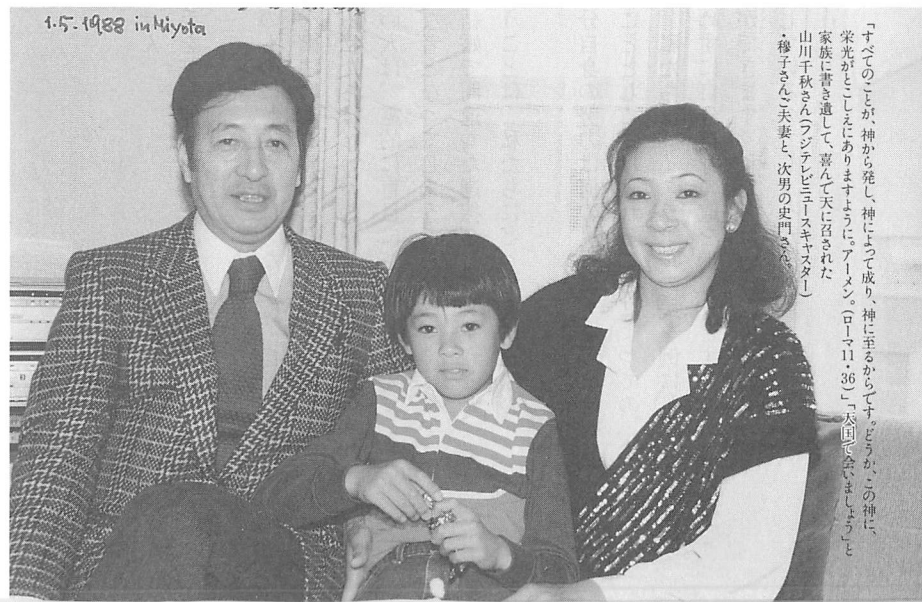
I 残された者たち

II 異邦人の救い

III イスラエル全体の救い

1.5.1988 in Miyota

「すべてのことが、神から発し、神によつて成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。（ローマ11・36）『天国で会いましょう』と家族に書き遺して、喜んで天に召された山川千秋さん（フジテレビニュースキャスター）・穆子さんと、次男の史門さん。」



私たちがいま学んでいる9―11章には、イスラエルの歴史のことが書いてあります。このイスラエルの歴史を見ると、イスラエルの民にとって一番大切な問題が、次のことであることが分かります。それは、神から提供され、値なしに受け取ることが許されている義を自分のものにするか、それともそれを拒んで自分の正しさ、つまり自分自身の義を求めるかということです。自分自身の力で追い求めた義は、決して神によって認められることはありません。これは、イスラエルの民にとっての問題であつたばかりではなく、私たちにとってもおそろかにできない問題です。私たちは、恵みによって与えられた主イエスを自分の人生に受け入れるか、さもなければ自分自身の義を追い求めるかのどちらかなのです。イスラエルの民は、主イエスによって与えられた神の恵みを拒んでしまいました。ですから彼らは、神の裁きの下におかれています。これが10章までの内容でした。11章はこのようなイスラエルの状態にも関わらず、神がイスラエルに対してどのような計画を持っておられるかということについて、すなわち、将来のイスラエルの姿について記しています。その標題は、「されど神は……」です。

すると、神はご自分の民を退けてしまわれたのですか。絶対にそんなことはありません。この私もイスラエル人で、アブラハムの子孫に属し、ベニヤミン族の出身です。神は、あらかじめ知っておられたご自分の民を退けてしまわれたものではありません。それともあなたがたは、聖書がエリヤに関する個所で言っていることを、知らないのですか。彼はイスラエルを神に訴えてこう言いました。

「主よ。彼らはあなたの預言者たちを殺し、あなたの祭壇をこわし、私だけが残されま

した。彼らはいま私のいのちを取ろうとしています。」

⁴ところが彼に対して何とお答えになりましたか。

「バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある。」

⁵それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます。もし恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなり、では、⁷どうなるのでしょうか。イスラエルは追い求めていたものを獲得できませんでした。選ばれた者は獲得しましたが、他の者は、かたくなにされたのです。こう書かれていますとおりです。

「神は、彼らに鈍い心と見えない目と聞こえない耳を与えられた。今日に至るまで。」
ダビデもこう言います。

¹⁰「彼らの食卓は、彼らにとつてわなとなり、網となり、つまずきとなり、報いとなれ。その目はくらんで見えなくなり、その背はいつまでもかがんでおれ。」

¹¹では、尋ねましょう。彼らがつまずいたのは倒れるためなのでしょう。絶対になんかことはありません。かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。¹²もし彼らの違反が世界の富となり、彼らの失敗が異邦人の富となるのなら、彼らの完成は、それ以上の、どんなにかすばらしいものを、もたらすことでしょう。¹³そこで、異邦人の方々に言いますが、私は異邦人の使徒ですから、自分の務めを重んじています。¹⁴そして、それによって何とか私の同国人にねたみ

を引き起こさせて、その中の幾人かでも救おうと願っているのです。もし彼らの捨てられることが世界の和解であるとしたら、彼らの受け入れられることは、死者の中から生き返ることではなくて何でしょう。

¹⁶ 初物が聖ければ、粉の全部が聖いのです。根が聖ければ、枝も聖いのです。もしも、枝のなかのあるものが折られて、野生種のオリーブであるあなたがその枝に混じってつがれ、そしてオリーブの根の豊かな養分とともに受けているのだとしたら、あなたはその枝に対して誇ってはいけません。誇ったとしても、あなたが根をささえているのではなく、根があなたをささえているのです。枝が折られたのは、私がつき合わされるためだ、とあなたは言うでしょう。²⁰ そのとおりです。彼らは不信仰によって折られ、あなたは信仰によって立っています。高ぶらないで、かえって恐れなさい。²¹ もし神が台木の枝を惜しまれなかつたとすれば、あなたをも惜しまれないでしょう。

²² 見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つき合わされるのです。神は、彼らを再びつき合わせることもできるのです。もしあなたが、野生種であるオリーブの木から切り取られ、もとの性質に反して、栽培されたオリーブの木につがれたのであれば、これらの栽培種のもものは、もっとたやすく自分の台木につがれるはずです。

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の一部がなくなつたのは異邦人の完成のなる時までであり、こうしてイスラエルはみな救われる、ということです。こう書かれていとおります。

「救う者がシオンから出て、ヤコブから不敬虔を取り払う。これこそ、彼らに与えたわたしの契約である。それは、わたしが彼らの罪を取り除く時である。」

彼らは、福音によれば、あなたがたのゆえに、神に敵対している者ですが、選びによれば、先祖たちのゆえに、愛されている者なのです。

神の賜物と召命とは変わることがありません。ちょうどあなたがたが、かつては神に不従順であつたが、今は、彼らの不従順のゆえに、あわれみを受けているのと同様に、彼らも、今は不従順になつていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。なぜなら、神は、すべての人をあわれもうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみところを知つたのですか。また、だれが主のご計画にあづかつたのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によつて成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

私たちがこれから学ぼうとしている11章は一つの問いによって始まっています。「神は、ご自分の民を退けてしまわれたのですか。」これはイスラエルの民にとっては、何よりも大切な質問です。確かに、10章を見るかぎりにはイスラエルは神に退けられてしまったように思えます。しかし、パウロは聖霊によって「絶対にそんなことはありません。」と答えているのです。イスラエルはその不信仰にもかかわらず、神によって与えられたその使命の故に退けられることはありません。イスラエルの民は、民族全体としては神から提供された恵みを拒みませんでした。このようなイスラエルの態度に対する神の答えはどうだったでしょうか。三つの答えがこの11章で語られています。それをこれから順番に見て行くことにしましょう。

I 残された者たち

第一の答えは、イスラエルの歴史には、神から提供された救いを受け取って神に喜ばれる歩みをした人々がいつの時代にも民の中にいたということです。1-7節は、このことについて語っています。神は、ご自分の民をお見捨てになりません。その証拠に、いつの時代でもイスラエルの民の中に神によって祝福された人々がいました。旧約聖書をみるといつでもそのような人々がいたことが分かります。恵みを追い求め、恵みにあずかることができた人々がいかなる時代にも存在しました。エリヤの時代には、そのような人々が七千人いたと言われています。妥協するこ

となく、神の側に立った人々が彼らのうちに絶えたことはありませんでした。新約聖書の時代におけるパウロもそのうちの一人でした。恵みを追い求めないものは、恵みに対して盲になり、その結果かたくなな心にされてしまいます。神に対して盲になることは神の裁きです。神の恵みとは何だろうかと考え研究することよりも、恵みを追い求めることの方がはるかに大切です。それと同じように、私たちが信じられるかどうかではなく、信じたいと思うかどうか大切です。それは、主を信じようとする人々には、神ご自身が信じることのできる力を与えてくださるからです。

イスラエルの歴史を見ると、いつもこのように恵みを追い求め、恵みにあずかった人々がいました。ところが、この恵みを拒み、自分の力で義を求めようとする人々は、神によってその心をかたくなにされてしまいました。神は今日もなお自分自身をすべて神に捧げる人を求めておられます。この神の求めに対して、私たちはいったいどんな態度を取るでしょうか。御言葉は次のように語っています。

あなたがたが知っているとおり、彼は後になつて祝福を相続したいと思つたが、退けられました。涙を流して求めても、彼には心を変えてもらふ余地がありませんでした。

(ヘブル 12・17)

これは、神の責任ではなく、人間の責任です。恵みを拒み続けると、無関心になります。これも神の裁きです。神の声に聞き従うことを望まなければ、聾になつてしまいます。

神は、イスラエルの民にご自身の義をお与えになろうと望んでおられました。しかし、彼らはそれを分かっているながら拒んだのでした。彼らは自分自身の力によって神の前に義とされることを望んだのです。その結果、彼らは虚しい努力を続けなければならなかったのです。これも神の裁きでした。前回学びましたように、自分自身の義を求める人の特徴は、「私ならできる。」と思うことでした。それに対し神によって義とされる人の特徴は、「私は信じる。」ということですよ。信じたいと思う人には、信じるべき方をも示されます。そして、大勢の不信仰な民の中にも、このような態度を取った人々がいたのでした。

恵みを拒んだイスラエルに対して神の取られた態度は、彼らのその不従順さにもかかわらず、いつの時代にも彼らのうちに幾人かの神を恐れる人々を残しておかれた、ということです。

Ⅱ 異邦人の救い

恵みを拒んだイスラエルの民に対して、神がお示しになった第二の答えは、8122節に書かれています。確かにイスラエルは民族全体としては神から退けられましたが、その代わりに、異邦人たちが救いにあずかるようになったのです。イスラエルの民によって拒否された神の恵みは異邦人に提供され、彼らは感謝をもってこの恵みにあずかったのです。イスラエルが墮落したことによって、異邦人は救いにあずかったのです。しかし、これは異邦人にとっては思いもかけないことでした。恵みを宣べ伝える使命を持っていたパウロは、まず始めにイスラエルの民に伝えようとしていました。しかし、彼らはパウロを拒んだので、パウロは異邦人に福音を宣べ伝えたのです。

そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。「神のことは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへ向かいます。」

(使徒13・46)

すると、主は私に、「行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす。」と言われました。

(使徒22・21)

イスラエルは今日、神から遠く離れた民族です。彼らは神の御言葉に耳を傾けず、神のお示しになることを見ようとしなかつた。このようにイスラエル民族は今日も神から退けられているのです。

17〜24節で、イスラエルの民は、何度も常緑樹のオリーブの木にたとえられています。ヨハネ4章22節には「救いはユダヤ人からでるのです。」とかかれています。もちろん、主イエスはユダヤ人でした。パウロはここでオリーブの枝が折られて、そこに野生種のオリーブの枝が接ぎ木されたと言っています。オリーブの木の枝が折り取られた、ということはイスラエルの民が民族として神から退けられたことを示しており、野生種の枝が接ぎ木されたというのは、異邦人が恵みにあずかるようになったことを示しています。イスラエルの民は、不信仰によって折り取られ、異邦人は信仰によって立てられました。異邦人が救いにあずかったのは、それによってイ

スラエルの内にねたみが起こり、イスラエルも彼らと同じ救いの道に立ち帰るためでした。また21節によれば、これは異邦人に対する警告でもあります。つまり、異邦人がイスラエルを見て、自分たちも自分の義に頼り神から退けられてしまわないようになるためでもあります。

ローマ人への手紙の2章と11章とを比較してみましょう。2章はユダヤ人に対する警告でした。それに対して、11章は異邦人に対する警告です。2章の警告は次のようなものでした。「ユダヤ人よ。あなたがたは異邦人よりも優れた者だと思ってはなりません。というのは、神は一人一人をその行いに従ってさばかれるからです。」11章では「異邦人よ。あなたがたはユダヤ人に対して高ぶってはなりません。あなたがたもまた罪を犯し続けるなら、ユダヤ人と同じように神の裁きを容赦なく受けることになるからです。」と警告されています。

イスラエルの民は、神の恵みを拒み続けることによって退けられました。しかし、神の裁きはそれだけで終るものではなく、かえって裁きによつて異邦人をお救いになろうとされたのでした。ドイツのことわざに「人は色々なことを思いめぐらす、支配するのは神である。」という言葉があります。これは聖書の中にも何回も繰り返してくる真理です。ヤコブの息子のヨセフは奴隸としてエジプトに売られました。しかし、このことによつてやがて彼の家族全体が救われることになったのです。

あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。

ダニエルは獅子の穴に投げ込まれました。しかし、まさにそのことによってダリヨス王の目が神に対して開かれたのです。その結果、人々の前に神の偉大な力が告げ知らされることとなったのです。

「この方は人を救って解放し、天においても、地においても、しるしと奇蹟を行い、獅子の力からダニエルを救い出された。」このダニエルは、ダリヨスの治世とベルシヤ人ク羅斯の治世に栄えた。

(ダニエル 6・27-28)

イスラエルの民は神によって遣わされた救世主を退けて、十字架につけました。しかし、主イエスが十字架にかけられたことによって、全人類に救いが及ぶようになりました。

パウロは、ユダヤ人の会堂から追放されました。しかし、その結果彼によって救いが異邦人に告げ知らされるようになったのです。全能の神は、最終的にはご自分の恵みを拒んだユダヤ人をさえ、お救いになる計画をもっておられます。

神は愛です。ですから、たとえ私たちが神を悲しませるようなことをしてしまったとしても、神は私たちのために益を図ってくださいます。私たちのどんな悩み、苦しみも、私たちが神の愛を信じることができるなら、祝福へと変えられます。私たちの立場が不利に見えるような時にも、神に信頼することによって私たちには望みが与えられます。たとえ、どんな状況におかれているとしても、主を見上げることができさえすれば、私たちの立場は希望に満たされたものに変えら

れるのです。

イスラエルの民によって、神は他の諸民族をも祝福することを望まれました。しかし、イスラエルの民は提供された恵みを拒みましたから、救いはまず異邦人に宣べ伝えられることになりました。「先のものは後になり、後のものが先になる。」とあるとおりです。けれども、このイスラエルの民もやがては神のもとに回復されるということが聖書に約束されています。

ユダヤ人は神の示された道を歩もうとせず、不信仰だったため神から退けられました。異邦人は信仰によって救いを獲得しましたが、もし、彼らが神のいつくしみの中に留まっていなければ切り落されてしまうと22節に述べられています。神との交わりの内に留まらないものは、やがて高慢になります。高慢とは、すなわち自分自身を正しいと思うこと、自己義認に他なりません。この高慢は神がなによりも忌み嫌われるものです。ですから神を恐れることは確かに知識の初めです。

Ⅲ イスラエル全体の救い

神の恵みを拒んだイスラエルの民に対する神の第三の答えは、23―36節にあるように、イスラエル全体が救いにあずかるようになるということです。イスラエルの民に対する裁きは、永遠に続くものではなく一時的なものです。25節によれば、この裁きは「異邦人の完成のなる時まで」と記されています。イスラエルが霊的な事柄に対して盲にされた、という神の裁きはいつか終るようになります。「異邦人の完成」とは、神が定められた異邦人の救われる者の数が満たされる

ことです。こうして、神のご計画が成就されるのです。キリストのからだなる教会は天に引き上げられ、イスラエルの救いはそのときから始まります。

23節には「再びつぎ合わす」ことが書き記されています。また、26節には「イスラエルはみな救われる」とあります。このようにイスラエルの民全体が神に立ち帰ることが約束されています。主イエスの血によって、彼らの罪は必ず贖われるのです。やがて、彼らは自分自身の義を追い求めることをやめ、神から与えられた賜物である主イエスを自分のものとするようになるのです。私たちには測り知ることのできないほどの神の寛容がここに現わされています。主なる神は世界中で一番かたくなな民であるイスラエル民族に対して勝利されようとしておられるのです。神は恵みを拒んだイスラエルを退けられましたが、イスラエルの民に対する選びのご計画を放棄されることはありません。3章では異邦人も、またユダヤ人も神はおなじように不従順の内に閉じ込められました。

ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。

すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。(ローマ3・9、19)

ところが11章31〜32節によりますと、ユダヤ人も異邦人もすべての人が神によって哀れみを受けることが約束されています。

彼らも、今は不従順になっていますが、それは、あなたがたの受けたあわれみによって、今や、彼ら自身もあわれみを受けるためなのです。なぜなら、神は、すべての人をあわれ

もうとして、すべての人を不従順のうちに閉じ込められたからです。(ローマ 11・31-32)

異邦人の時の終るまで、エルサレムは異邦人に踏み荒されます。

(ルカ 21・24)

つまり、救いのおきもまた永遠に続くわけではなく、異邦人の時の終るまでがその「救いの時」なのです。

神は言われます。

「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた。」

確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。

(Ⅱコリント 6・2)

恵みにあずかりたいと思う人、救いにあずかりたいと思う人は、今日でもまだそれを味わい知ることが出来ます

私たちは今までイスラエルの歴史を通して学んできましたが、それはただ単に知識を得るために学んできたものではありません。そうではなく、私たちの真の目的は自分自身の魂の救いを得るためにほかなりませんでした。ローマ人への手紙 11 章の内容は使徒の働き 15 章 13-18 節に端的に示されています。

ふたりが話し終えると、ヤコブがこう言った。「兄弟たち。私の言うことを聞いてください。神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお

召しになったかは、シメオンが説明したとおりです。預言者たちのことばもこれと一致しており、それにはこう書いてあります。

「この後、わたしは帰って来て、倒れたダビデの幕屋を建て直す。すなわち、廃墟と化した幕屋を建て直し、それを元どりにする。それは、残った人々、すなわち、わたしの名で呼ばれる異邦人がみな、主を求めるようになるためである。大昔からこれらのことを知らせておられる主が、こう言われる。」

(使徒15・13～18)

この箇所を要約しますと、次のようになります。

1. 主なる神は、異邦人の中からご自身の民をお召しになります。これは、今日の神のみわざです。(14節)

2. イスラエルの回復です。(16節) イスラエルの回復の時は、異邦人の救いの時が終った後に始まります。

3. それから、全世界にイスラエル人による宣教が行われます。ユダヤ人は一人残らず神のしもべとして用いられるようになります。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

(ローマ11・33)

すべてのものごとの源は主にあります。そして、諸々の力も主のものです。すべての行いの目

的も主にあるのです。パウロはただ主なる神の測り知れない知恵と愛とを心から賛美し、神を礼拝することができただけでした。11章は神が永遠に変わらないお方であることを証しています。私たちがこれまで見てきたように、神の選びとさばき、イスラエルの民をお選びになったことと、その同じイスラエルの民をおさばきになったことは決して矛盾することではありません。確かに神はイスラエルの民をその罪のゆえにかたくなにされましたが、それは神が恵みに富みたまうお方であるということと矛盾しないのです。神は悔いることのない方です。それは決して失敗なさることがないからです。また、決して変わることはない方でもあります。それは、真実なお方からです。私たちはこれらの事実をしっかりと胸に刻んで歩んで行きたいものです。たとえ私たちの目に神の導きが矛盾だらけのように見えるとしても、この事実に確信を置いて歩みたいものです。

神は、ご自身のご計画をよくご存じです。ですから、私たちはたとえ神の御心を完全に知ることができないとしても、私たち自身を完全に主の御手にゆだねて歩んでいくことができます。やがて時がくれば、私たちはすべてを知ることになるでしょう。そして神が本当に私たちのために善を図ってくださったということを知ることができるようになるでしょう。

イスラエルの神、救い主よ。まことに、あなたはご自身を隠す神。（イザヤ45・15）

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道

よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

(イザヤ 55・8、9)

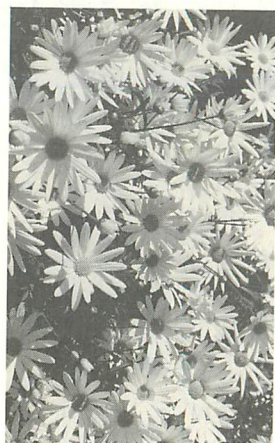
これもまた、万軍の主のもとから出ることで、そのはかりごとは奇しく、そのおもんばかりはすばらしい。

(イザヤ 28・29)

隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし、現わされたことは、永遠に、私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。

(申命記 29・29)

たとえ私たちは理解することができなにしても、主に対する絶対的な信頼を持って、すべてを主にゆだねて歩んでいこうではありませんか。



第Ⅴ部 神と人とを愛せよ

新約聖書ローマ人への手紙
12章1節から16章27節まで



日航操縦席で、飛松辰典さん・佐玖子さんご夫妻。

飛松武志さん、島村佳弥さんとベックさん。



左から藤本賢二さん、飛松武志さん、飛松辰典さん・佐玖子さんご夫妻。

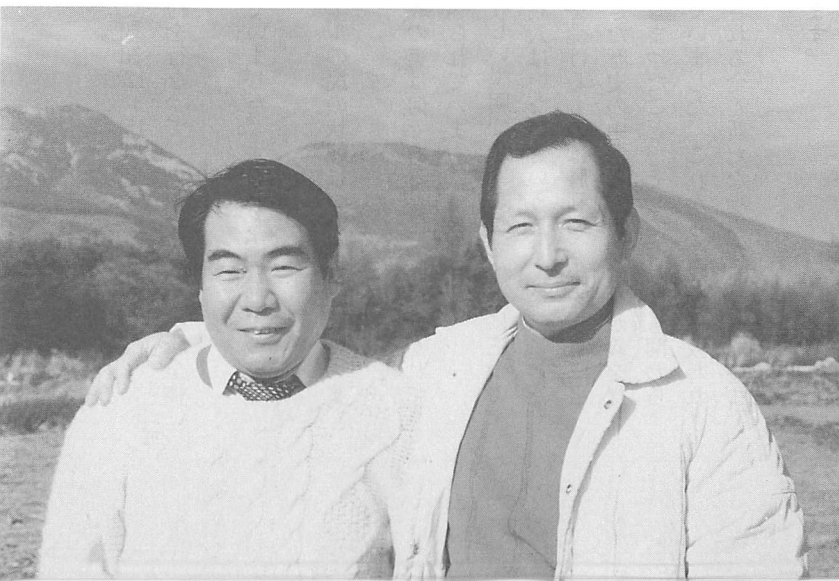


24 徹底的な献身

ローマ人への手紙

12章1節から2節まで

- I あなたがたの体を、神に捧げなさい
- II この世と調子を合わせてはいけません
- III 心の一新によって自分を変えなさい



西経井沢にて。熊谷邦雄さん(左)と武井達郎さん。
「みことはあなたの近くにある。あなたの口にあり、あなたの心にある。(ローマ10・8)」

これから私たちは、ローマ人への手紙の第三番目の部分である12～15章を学びます。

その前に、これまでの部分の復習とこれからの部分の要約を行なって、ローマ人への手紙全体をいろいろな角度からまとめ直して見ることにしましょう。

1～8章までは、神の義とは何であるかについて書かれていました。すなわち、教理について述べられていました。

次に、9～11章までは、神の義のために召されたイスラエルの民の状態について書かれていました。すなわち、イスラエルの歴史についてです。

第三の12～15章では、神の義の現われとは何であるか、義の実は何であるかについて書かれています。すなわち、救われた者の歩みについて具体的に述べられています。

教え、すなわち教理とは、罪と義、「聖化」についての詳しい説明です。ここでは主に三つのことが書かれていました。第一にこの世にはひとりとして義人はいないということ。第二に神がご自身の義をこの世にくださったこと。第三にその神の義を受けるものは勝利の人生を歩むことができるということです。また、イスラエル人がたどってきた歴史の中から、実際に神が義を提供してくださったこと、その義をイスラエル人は拒否してしまったこと、そしてそれにも関わらずイスラエル人は神によって受け入れられたことが書かれていました。これから学ぶのは救われた者の歩みについてですが、そこでは主の恵みによってなされる全く新たな歩みが記されています。

それぞれの部分に表題をつけるならば、次のようになります。

1～8章

1 キリストを持たない人生

2 私たちのために死なれたキリスト

3 キリストと共にある私たち

4 私の中に住んでくださるキリスト

9～11章 全ての者の上におられる神

12～15章 私を通して現われてくださる神

ローマ人への手紙は、全体を通して次の二つの点を強調しています。すなわち、第一に、人間の罪とその失われた状態について。第二に、成し遂げられた救いの御業によって神の大きな愛が全人類に対して明らかにされたこと。完全な救いにあずかることが今もお、私たちに許されており、その完全な救いにあずかるものは永遠の栄光のために召されているということです。

特に、9～11章までは、神がどのような手段をもって私たちを育まれるか、またイスラエルの歴史を通して神がご自身の栄光を究極的にはどのような形で現わしてくださるのかについて語っています。主イエスによる完全な救いを体験した人は、自分に成されたすばらしい御業に対してどのように応えたら良いのかという切なる願いを持つようになります。この答えが以下の12～15章にあります。また、この答えを簡単に要約した御言葉を、私たちはマタイの福音書22章に見出すことができます。

そこで、イエスは彼に言われた。「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」

(マタイ 22・37～39)

私たちはこの二つの戒めの御言葉をもって、12～15章の表題とすることができます。これから学ぶこの四つの章では、新約聖書における倫理が取り上げられ、問題となっていますが、ここで聖書における倫理とこの世の倫理との違いについて少し考えてみる必要があります。この世の倫理は、国々の風土、習慣などによって規定された慣習、または生活規範です。一方、聖書における倫理は、そのような特定の地域や時代などに束縛されない、独立した生活態度です。一般に倫理とは、宗教や哲学に付随したもので、人間に様々なことを要求しますが、聖書における倫理とは、聖霊によって新しくされた人間に現われる新たな生活態度です。この二つの倫理の違いは、理想と現実との違いです。理想主義者は、自分の人生の目標を目の前に掲げていますが、それに到達することは決してありません。聖書が与えると約束している新しい人生は決して観念的なものではなく、現実に進むことができるものとして私たちの前に示されているのです。

9～11章までは、全体からみると挿入された部分になりますから、12章は実は8章から続けて読まれるべき章です。ですから12章は8章最後の言葉を受けて、「そういうわけですから……」という言葉で始まっているのです。新しい歩みは、体験した救いの結果です。信じる者は、主イ

エスから与えられた神の義を持っています。主イエスは聖霊によって信じる者のうちに住んでいくのださりと、信じる者の新しい歩みによって主イエスが明らかにされるようになります。人の表面に現われてきたものによって、その内側に何があるのかを知ることができるからです。

ローマ人への手紙は、1章以下新しいのちについての記述から始まっていますが、これが12章以下のような勧めの言葉によって始まっていないのは喜ぶべきです。それは5章に書かれているように、神による平和を持っているものだけが神による勧めの言葉をも受けることができるからです。ローマ人への手紙は、まず最初に人間に与えられた神の賜物について語り、そして、12章からはその賜物を受けた人間の果たすべき使命について書かれています。最初に「生けるまことの木」の必要性について述べた後、12章からは、その「生けるまことの木」が必然的に結ぶ実について述べています。神の賜物とは、人間が福音によって新たなものとされることです。福音とは神の御力そのものです。そして、新たにされた人間は、今までの人生とは全く別の歩みをするようになるのです。

12章全体のテーマは、信者と集会との関係についてです。これをほかの言葉で言い換えるなら、集会における御霊の実とすることができるようでしょう。つまり、この12章に書かれていることは、すでに救いを受けた信者に対して語られているのです。

私たちは、この12章を三つの部分に分けて考えることができます。第一の部分は1～2節で、これは信者の立つべき基盤について述べています。第二の部分は3～8節までで、ここでは集会の一致と様々な賜物の現われについて述べています。第三の部分は9～21節までで、ここには具

体的な勧めについて細かく書かれています。

さらに、言い換えますと、第一の部分は、徹底的な献身について。第二の部分は、真の交わりについて。そして、第三の部分は、生きた集会について書かれていると言えましょう。

この章には非常にたくさんの方の命令、つまり、信者に対する勧めについての記述がみられ、それらは全部で三四にもなります。また、信者がいろいろな場において取るべき態度についても記されています。これらを分類してみると、1～3節には一人一人の信者と主との関係について、4～16節までは信者同志の関係について、そして17～21節には信者と未信者との関係について書かれていると考えることができます。

そこで私たちは1、2節から、信者が主に対してどのような態度を取るべきかということを手探してみたいと思います。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。²この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。

(ローマ12・1、2)

信者が主に対して取るべき態度は、信者とほかの信者との関係や、信者と未信者との関係の基

礎となります。ですから、信者が主に対する関係は、二心なく純粹で、混じりけのないものでなければなりません。神が信者に対して要求されていることを、この箇所から三つ読み取ることができます。

I あなたがたの体を、神に捧げなさい

II この世と調子を合わせてはいけません

III 心の一新によって自分を変えなさい

この三つの点について順番に考えてみることにしましょう。

I あなたがたの体を、神に捧げなさい

この言葉は新約聖書全体の倫理を一言で言い表わしています。信者の新たな生活は、神への礼拝そのものであるべきです。私たちの体つまり罪の器は、神に捧げられまったく神によって支配されたものとならなければなりません。旧約聖書に出てくる全焼のいけにえと同様に、私たちは自分自身の体を余すところなく主に捧げ、私たちの主に対する献身を現わさなければなりません。恵みによって新たにされた私たちの人生を、私たちは喜びと感謝を持って主に捧げようではありませんか。私たちの霊だけでなく、私たちの魂も肉も主に捧げるべきです。主に対する私たちの新たな関係の基礎は、罪を赦され、義とされたことです。私たちが神によって新しくされたということの証拠は、私たちが自分を主に完全に捧げるかどうかということに現わされます。ところが、なんと多くの信者にこのような証拠を見いだすことができないことでしょう。新しい人生は、

自分自身を主に捧げざるを得ません。信者は、誰でも自分の体は自分自身の物ではなく、神の聖霊の宮であるということを知っているはずです。かつては罪の道具であったこの体は、今は主の道具として用いられ、主の御栄光を現わし、主の御計画を成就するために役立てられなければなりません。

からだは不品行のためではなく、主のためであり、主はからだのためです。

不品行を避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、不品行を行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。（Ⅰコリント 6・13、18、20）

不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとペリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかわりがあるでしょう。神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。

「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたもの

に触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

愛する者たち。私たちはこのような約束を与えられているのですから、いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしうではありませんか。

(Ⅱコリント 6・14～18、7・1)

主は信じる者に、「あなたはわたしのもの。(イザヤ 43・1)」と言っておられます。このことは、主が私たちの身も心もご自分のものとして要求しておられるということを示しています。信者の日々の生活は、主に捧げられたものでなければなりません。つまり一瞬一瞬が、主に對して備えられ、主の求めに應じていつでも応えられる状態にあることを主は望んでおられます。これこそ霊的な礼拝であり、これ以外の礼拝はいかなるものであれ表面的なものに過ぎず、無価値なものです。

あなたがたは、世界の光です。

このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

(マタイ 5・14、16)

喜びをもって主に感謝しながら自分を主に對する奉仕に備えること、これこそが私たちの取るべき態度です。12章1節で、供え物という言葉が使われていますが、このことはパウロの証しに

もあるように、私たちが瞬間瞬間に自分自身を十字架につけて主に従うことであり、またバプテスマのヨハネが証しているように、「彼は栄え、私は衰えなければならぬ。」という態度です。このような態度のあるところには、神の御力が明らかにされます。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れていくのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。

いつでもイエスの死をこの身に帯びていますが、それは、イエスのいのちが私たちの身において明らかに示されるためです。

(Ⅱコリント 4・7、10)

私たちの献身は、神に受け入れられる聖い生きたものでなければなりません。

生きた、ということは毎日が新たなことで、決して一回限りでないことをさしています。「神よ。私を整えてください。私に導きを与えてください。」これが私たちの日々の祈りでなければなりません。

聖なる、ということはこの世や罪から全く解放され、主なる神にすべてを捧げることを意味しています。私たちのなすべきことは、すべて主なる神に対してでなければなりません。神に受け入れられる、とは常に神のご栄光を目の前にみていることです。

アサは父ダビデのように、主の目にかなうことを行った。

(Ⅰ列王記 15・11)

彼(ヨシャパテ)はその父アサのすべての道に歩み、その道からそれることなく、主の

目になうことを行つた。

(Ⅰ列王記 22・43)

主なる神はまた私たちに、「あなたがた私の息子、娘よ。私の心になうものたちよ。」とおっしゃりたく思つておられます。

イスラエルの民について、聖書は次のように語っています。

「『この民は、口先では私を敬うが、その心は、わたしから遠く離れている。彼らが、わたしを拜んでも、むだなことである。人間の教えを、教えとして教えるだけだから。』」

(マタイ 15・8、9)

しかし、これと対照的に、神に受け入れられる献身とは次のような思いから出てくるものです。あなたのみこころを行うことを教えてください。あなたこそ私の神でありますから。

(詩篇 143・10)

この命令は、きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから出て来る愛を、目標としています。

(Ⅰテモテ 1・5)

Ⅱ この世と調子を合わせてはいけません

すべてを主に捧げた人ならば、この第二番目の勧めはたやすく理解することができるでしょう。

信者はこの世の習わしに捕われる必要がないということです。

世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。(ヤコブ 4・4)

この世の罪から自分を聖別しなければ、神によって喜ばれる献身をすることができません。主イエスに自分を捧げることは、今までの自分の生涯に対して終止符を打つことにほかなりません。私たちはこの世から聖別されなければなりません。というのは、私たちは外面的に主に従っているのではなく、心から主に従うことを望んでいるからです。世から聖別されるということは、外面的なことを意味するのではなく、内面的なことです。

キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみことろによったのです。

(ガラテヤ 1・4)

主は、ご自分に従うものに対して次のように語っておられます。

わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。(ヨハネ 17・14)

もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したの

です。それで世はあなたがたを憎むのです。

(ヨハネ 15・19)

罪と世に対してはつきりした態度を取っている信者は、自然とその生活態度によつてそのことが現われてきます。主イエスの側に立つものは世と対立することになるでしょう。ここでそのような態度を取ったパウロ、ペテロとヨハネの言葉をみてみることにしましょう。

ですから、彼らの仲間になつてはいけません。あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあつて、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。——光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。——そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。

(エペソ 5・7-10)

従順な子どもとなり、以前あなたがたが無知であつたときのさまざまな欲望にしたがわず、あなたがたを召してくださつた聖なる方にならつて、あなたがた自身も、あらゆる行ないにおいて聖なるものとされなさい。それは、「私が聖であるから、あなたがたも、聖でなければならぬ。」と書いてあるからです。

(1ペテロ 1・14-16)

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだから

からです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行う者は、いつまでもなが
らえます。

(Ⅰヨハネ 2・15-17)

この世に対してはつきりした態度を取ることができず、徹底して主イエスの側に立つことをし
ない信者は、段々とこの世に馴染んだ者となってしまう。「この世と調子を合わせる」とは
一体どのようなことを意味しているのでしょうか。

第一に、思い煩いです。

また、いばらの中に蒔かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わし
とがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

(マタイ 13・22)

主の約束があるにもかかわらず、自分自身を心づかいの奴隷にすることはこの世的な生き方
です。主は思い煩うな、とはつきり語っています。

第二に、自分の利益だけを考えること、これもこの世的な生き方です。

この世の子らは、自分たちの世のことについては、光の子らよりも抜けぬがないものな
ので、……

(ルカ 16・8)

この世的な生き方をする人は、自分の利益を求め、ほかの人々の犠牲の上に立って、必要なら
ばほかの人を欺くことさえもやりかねません。

この世的な生き方の第三番目は、主のことを思うのではなく、他人の財産や人がどう考えるかが気になったり、自分の気持ちなどに支配されてしまうことです。

あなたがたの間にねたみや争いがあることからすれば、あなたがたは肉に属しているのではありませんか。そして、ただの人のように歩んでいるのではありませんか。

(Ⅰコリント 3・3)

ねたみ、嫉妬、分裂などはこの世的な生き方の結果です。

この世は悪魔によって支配されています。聖書によれば、悪魔は「この世の神」として人々を真の神の光からくらまそうと一生懸命です。

この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。

(Ⅱコリント 4・4)

享楽を求める心、自己中心、所有欲、名誉心など、これらは皆この世的な生き方に属するものです。主は、この世と調子を合わせてはいけなさと命じておられます。

Ⅲ 心の一新によって自分を変えなさい

今日私たちは、この世の中のさまざまな出来事を通して、すべてのことがらが終りに近づいているということを知ることができます。一つには、悪の実の成熟であり、もう一つは、善の実の

成熟です。

不正を行なう者はますます不正を行ない、汚れた者はますます汚れを行ないなさい。正しい者はいよいよ正しいことを行ない、聖徒はいよいよ聖なるものとされなさい。

(黙示録 22・11)

このような中であって、聖霊は、私たちを完全に聖霊の支配下に置きたいと願っておられます。このようにして主イエスは、私たちの内に形作られるようになります。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(Ⅱコリント 3・18)

この聖霊による働きは、私たちの心の内に起こるものであり、外側に起こるものではありません。私たちの考え、感情、意志などは聖霊の働きによって完全に換えられ新たなものとされなければなりません。新しく生まれ変わることによって、私たちは新しい思いを与えられます。そして日々の生活において主と交わりを持ち、祈りつつ主のみこころを尋ね求め、そのことによって私たちが日々一層多く主のみこころを知ることができます。私たちがすべてのことがらにおいて主にみこころを問い、祈り求めるならば、私たちは主によって訓練された者となり、私たちの決定を主のみこころに沿って下すことができますようになります。

ダビデは常に主に尋ね求めた人でした。

この後、ダビデは主に伺って言った。……

そこで、ダビデは主に伺って言った。……

そこで、ダビデが主に伺ったところ、……

(Ⅱサムエル 2・1)

(Ⅱサムエル 5・19)

(Ⅱサムエル 5・23)

またダビデの子ソロモンも、主のみこころを第一とした人でした。

「善悪を判断してあなたの民をさばくために聞き分ける心をしもべに与えてください。

さもなければ、だれに、このおびただしいあなたの民をさばくことができるでしょうか。」

この願ひ事は主の御心になつた。ソロモンがこのことを願つたからである。

(Ⅰ列王記 3・9、10)

主にお伺いを立てるならば、その人は主のみこころを知ることができます。このことは大変大切で、それは、私たちの生活の一部分が改善されるという程度に止りません。そうではなく、私たちの人生の根本が新たにされるということなのです。主を信じるものは、この世の霊と主の霊とを見分けることができなければいけません。また、人間の知恵と神の知恵との違いをも学ばなければなりません。これらの基礎となるのは、徹底的な献身です。まず、自分自身を神に捧げるならば、その人は聖霊の御力を体験するでしょう。そして、主の御姿に変えられるものとされます。

神のみこころとは何でしょうか。また、何がよいことで、何が神に受け入れられ完全であるのでしょうか。これらのことを信者はよくわきまえていなければなりません。

神のみこころとは、正しいことと、義なることをあらゆることがらから区別して知ることです。もちろん、それは私たちが主に命令されたからするのではなく、喜びと感謝をもって自発的に主を喜ばせたいという気持ちによって行われることが大切です。

神に受け入れられるためには、たとえ私たちが人間の心で主のみこころや導きを理解することができないとしても、主のみこころを信頼してその導かれる道を歩むことです。そのためには、私たちが自分自身を神に捧げ、神によってまったく新に作り変えられたものとされることがどうしても必要です。

あなたはもう、そのような歩みを始めておられるでしょうか。神に導かれることの喜びとすばらしさをもう経験されたでしょうか。心から神の前にへりくだり、自分の人生を明け渡すならば、今日からあなたも栄光への道を歩むことができるようになるのです。

25 真の交わり

ローマ人への手紙

12章3節から8節まで

I 信者同志の正しい関係

1 健全な自己認識

2 切り離すことのできない一致

II 七つの異なった賜物

1 預言

2 奉仕

3 教えること

4 勧め

5 分け与えること

6 指導

7 慈善

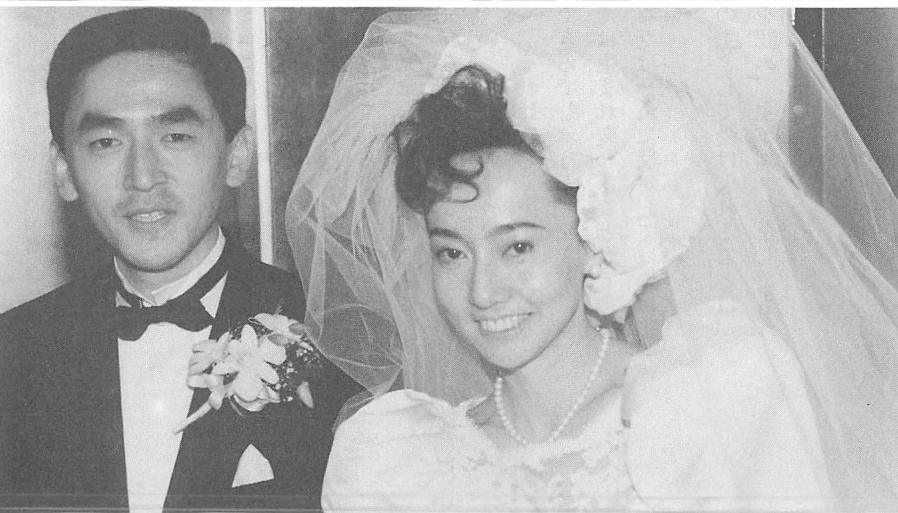
清水まみさんの洗礼式の日、上野鮎子さんと。



飯島さん宅の家庭集会(祐天寺)。



飯島力里子さんと白石光一さんの結婚式。



現代の大きな問題は、コミュニケーションの欠如です。科学の進歩や通信技術の発達にもかかわらず、人と人とのコミュニケーション、すなわち交わりはたいして進歩していません。それどころか、かえって薄くなってしまうといえましょう。私たちはもともと自分の家族のことを考える必要があるでしょう。夫婦の間に本当の意味でのコミュニケーションがあるでしょうか。お互いに心からの交わりを持っているでしょうか。あるいは、両親と子どもたちとの間はどうでしょう。私たちには大勢の友達がいるかも知れませんが、いったい心が通い合う親友は何人いるでしょう。私たちの生活には十分なコミュニケーションが成り立っているでしょうか。

主イエスは次のように言われました。「わたしは、迷える羊が命と完全な満足を得るためにこの世にやってきました。」そうです。キリストとの交わりにこそ完全な満足があります。ですからもともと大切なことは、イエス・キリストをまず知ることです。いったいどのようなにしてこのイエス・キリストなる方を知ることができるようになるのでしょうか。それは新しく生まれ変わるることによつてです。では、どうしたら新しく生まれ変わることができるでしょうか。死人が自分で再び生き返ることができないのと同じように、だれも自分の力では生まれ変わることができません。甦りの主であるキリストがそれをなしてください。あなたはそれに反対してはいけません。主イエスにすべてをやっていただきますしう。

イエス・キリストを自分の救い主として、命として、また人生の主として受け入れることは、もともと大切なことです。主イエスを受け入れるとは、自分の罪を認め、主イエスのなしたもうた救いを信じ、感謝して受けることです。

私たちの魂は神に対して死んでいます。しかし、主イエスを受け入れることによって生きようになります。私たちの魂は、神に対してつんばですが、主イエスを受け入れることによって聞こえるようになります。私たちの魂は、神に対して盲ですが、主イエスを受け入れることによって目が開かれます。一言で言いますと、孤独な精神生活がもう終りになるということです。愛情の渴きは完全に満たされます。あらゆる欲望とあらゆる空しい努力はなくなります。すなわち心の平安がおとずれるのです。

甦えられて、今日も私たちのまん中におられるイエス・キリストだけが、人間の心に満足を与えることができます。イエス・キリストは今日も罪の赦しという素晴らしい贈物を提供してくださっています。

どうでしょう。あなたにはこの贈物を受け取る心の備えがあるでしょうか。あなたのためにも貴い血潮を流して新しい命を与えてくださった主イエスに、感謝されたでしょうか。あなたの債務は支払われ、罪は赦され、咎は取り去られたことについて、今日、感謝しようではありませんか。どうか、罪の赦しという素晴らしい贈物をためらわずに受け取ってください。罪の赦しを受け入れることは、主イエスを受け入れることです。そして、主イエスを受け入れるということは、主イエスを持つということなのです。このように主イエスを自分のものとして持っている人は、永遠の命と真の平安、また本当の喜びを得ることができるのです。

わたしたちが今日学ぼうとしている箇所も実はこの真の交わりについて述べられています。ローマ人への手紙の1―8章までは、一人一人の人間の救い、そして一人一人の信者の信仰生活

についての教えでした。12章からは、信者一人一人のことがらではなく、信者と集会との関係について書かれています。私たちの救いは、個人的なものです、救われたものは集会の中にとけ込まなければなりません。信者の集会における交わりについて大切なことがらが3〜8節までに書かれています。ですから、この3〜8節までの主題は真の交わりとすることができでしょう。私たちはここで集会における一致と多様性について学ぶことができます。前回、私たちは1、2節で信者の神に対する正しいあり方を学びました。今日、私たちは信者同志の正しい関係について学んでみたいと思います。

私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののに分けてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。

一つのからだには多くの器官⁴があつて、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、大ぜい⁵いる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官⁶なのです。

私たちは、与えられた恵みに従つて、異なつた賜物を持つているので、もしそれが預言であれば、その信仰に應じて預言しなさい。奉仕⁷であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。勧め⁸をする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれをしなさい。

(ローマ12・3〜8)

この箇所を前半と後半とに分け、まず私たちに与えられた正しい交わりの関係について学んだ後に、パウロが述べている一つ一つの賜物について考えてみましょう。

I 信者同志の正しい関係 (3～5節)

II 七つの異なった賜物 (6～8節)

I 信者同志の正しい関係

新しく生まれることによって、私たちは主イエスの肢体となるのです。主によって新しく生まれたものは、だれでも自分の救いの確信を持っていますが、私たちがみ体なる教会の肢体である、という事実についてはつきり認識している人はあまり多くありません。キリストにある一つの体とは、靈的で有機的な結合です。この結合はいかなる人間的なつながりよりも強いものです。信者はこの事実をはつきりと知らなければなりません、集会の中に実際に真実な交わりを持つように変えられなければなりません。私たちは皆一つの家族です。そして、この一つの家族であるということは一時的なものではなく、永遠のものなのです。一つの家族の中で、一人一人がまったく自分かつてなことをしているとしたら、その家族は真の交わりを持つていたとは言えません。本当の交わりを損なう原因は自我です。高慢、自己中心、砕かれていない心、これらは真の交わりを破壊します。パウロは3節で、「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。」と語っています。

私たちがドイツに帰りましたとき、ある家族と一緒に一つの家で生活したことがありました。

その家族には四人の子供がおり、一番下の男の子の名前はルネちゃんといいました。ある時私がその子に、「ねえ、ルネちゃん。ルネちゃんが一番好きなのはだあれ。お父さん、それともお母さん。」と尋ねてみますと、こう答えました。「僕が好きなのは僕だけだい。」

大部分の信者もこの子どもと同じように自分自身のことばかりを考えているのではないでしょう。そうでない人はいるとしても、おそらく劣等感にさいなまれていたりして別な意味で人のことばかり気にしているというふうではないでしょうか。よく、自分は取るに足らないもので、駄目な人間だなどと卑下する人がありますが、それは日本人独特の人前だけの謙遜か、そうでなければ、自己憐憫にすぎません。高慢は間違った態度です。けれどもこの自己憐憫も主のしもべとして決してふさわしいものとはいえません。パウロは、自分自身を神の前に正しく評価することを知っていました。

神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。

(Ⅰコリント 15・10)

パウロは12章3節で、「信仰の量りに応じて、」と言っていますが、これは、「主に信頼するものは、その信頼に応じて貴い働きをするものとされる。」という意味です。自分自身を正しく評価するとは、つまりまことの謙遜な自己認識とは、次のように考えることです。「主イエスは私を贖ってくださいました。私は主イエスに信頼します。私は主にあつてなんでも行うことができます

が、主なしには何もできません。私は主によって愛されている者ですから、もはや無価値な存在ではありません。しかし、私に何かの価値があるとすれば、それは私が自分の思うことをするからではなく、神のみこころを行うからです。私が自分の力で何かをできるからではなく、主にあってなすことができるからです。」

このように主を誇ることでできる人は、健全な自己認識のできる人です。高慢と自己卑下とはともに間違った態度であり、結局は同じ自己主張の裏返しにすぎません。

あなたは信者として、主イエスの体の一部分となって、主の体を構成するべきです。あなたに託された主の使命、あなたにしかできないことを通して主に奉仕するべきです。

しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」（ヤコブ4・6）

使命を果たすことは与えられた恵みによる力によってのみ可能です。主に仕えるとは、主を個人的に信頼することです。何をもつて、私たちは主に仕えることができるでしょうか。信者同志の真の交わりが成り立つために、どのような奉仕をすることができでしょうか。これらの問いは、私たちが常に主に対して持つべき問いかけです。

4、5節で私たちは、切り離されることのできない一致について読むことができます。つまり、私たちはキリストにあって一つの体であり、キリストご自身をその頭とし、私たち一人一人はその体の器官なのです。ここで私たちは、一つ一つの器官がほかのすべての器官に対して調和を保

ちながら奉仕するさまを学ぶことができます。これは様々な奉仕の現れです。パウロはここで、ほかの人々の持っている賜物を自分の物よりもより優れたものであると思いたくない、と勧めています。一つ一つの器官は独立して存在しているのではなく、ほかの多くの器官の助けを必要とします。それと同じように、私たち信者も一人一人独立した存在であるということはありません。一つの体の中で、たとえば口が何か美味しいものを食べているからといって、そのために目がねたみを起こす、ということはありません。なぜなら、口はその食べ物を食べることによってからだ全体のために奉仕しているからです。同じように、人が速く歩くとき、手は足に向かって、「どうしてそんなに速く歩くのか。」と文句を言うことはありません。なぜなら、足は自身のために動いているのではなく、体全体のために動いているからです。

主が、自分ではなくほかの人を用いられたからといって、私たちはねたむことをしません。なぜなら主にあって私とその人とは一つだからです。私たちはお互いに交わることによって、お互いの持っている欠点について知るようになりますが、そのことによって愛し合うようになるのです。主イエスは、私たちに自己犠牲の愛を持つようにと勧めておられるではありません。そうではなくて、自己犠牲の愛を、すなわち神の愛をあふれるばかりに与えてくださっているのです。

私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

一つ一つの器官は、体全体が正常に働くためにそれぞれかけがえない使命を持っています。

しかし、同一の聖霊がこれらすべてのことをなさるのであって、みこころのままに、おののにそれぞれの賜物を分け与えてくださるのです。からだは一つでも、それに多くの部分があります。ですから、からだの部分はいくつ多くあっても、その全部が一つのからだです。主にある兄弟たちもそれと同様です。

こういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。それどころか、体の中で比較的弱いとみられる器官が、かえってなくてはならないものなのです。

それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。

(Ⅰコリント 12・11～12、20～22、25)

キリストの体は、キリストの器官であり、また道具です。主イエスはその体を通してこの地上において御業をお示しになりたく思っておられます。ですから、一つ一つの器官が自分の使命をよくわきまえてその使命を実行することが非常に大切です。このことは、実際には信者が自分自身の自我を捨てることを意味しています。自分を捨てることによってのみその人は主によって用いられるようになるのです。また、そのときのみ完全な満足を得ることができます。このような心構えができている人は、主イエスと同じように、「私の喜びは父のみこころを行うことで

す。」と証しすることができます。新しく生まれた人は、だれでも、主のみからの器官です。それゆえ、一人一人の信者が主のみからだ全体の中にあつてどのような立場にあるか、どのような奉仕をもつて仕えるべきか、と言うことをよくわきまえ知ることが大切です。

第一に大切なことは、私たちがキリストにあつて一つの体である、と言う事実をはっきりと知ることです。

第二に、私たちはその体にあつて様々な賜物をもつて主に仕える使命を持っているということを知ることです。

器官のうち、一つとして独立して存在することができるものではありません。一つ一つの器官は、神からの祝福を得るためにほかの者の助けを受ける必要があります。私たち一人一人は、ほかの信者に対して責任を持っています。一人一人はほかの信者に奉仕するために召されているので、もしある人が祝福を受けるとすれば、それはその人を通してほかの人々も祝福を受けるためにほかなりません。

みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。

(Iコリント12・7)

Ⅱ 七つの異なった賜物

1 預言

預言とは、神の御言葉を実際に私たちの信仰生活においてどのように生かすべきかを告げるこ

とです。ここで大切なことは信者の良心と意志です。

預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。

(Ⅰコリント 14・3)

信者を靈的に成長させるために、この賜物は必要不可欠なものです。預言を通して、信者一人の罪が明らかにされ、主の栄光も現されます。集会の目的も預言を通してはつきりと示されています。預言する者は、いわば集会の目の役割を果していると言えましょう。

預言をないがしろにはいけません。

(Ⅰテサロニケ 5・20)

どうして預言をないがしろにはいけないのでしょうか。それは、預言によって罪を犯している人が責められるためです。

罪を犯しているものをすべての人の前で責めなさい。ほかの人をも恐れさせるためです。

(Ⅰテモテ 5・20)

預言者ナタンはダビデのもとに行き、罪を犯しているのはあなたです、と言いました。このように預言者の務めは非常に難しい務めです。というのは、多くの信者は彼ら自身罪を抱えているからです。ダビデは、そのときに直ちに悔い改め、主のもとに立ち帰りましたが、今日の信者のなかにはこのダビデのように罪に対して決然とした態度を取る人が大変少なくなっています。預

言をする者は、二つの危険性を常に持つていることに注意するべきです。第一は、外側から加えられる迫害や中傷であり、第二は、預言をするもの自身の心の中にある罪です。ですから、預言する者は常に神の霊によって語るべきであり、自分の霊によって語ることはないように自分自身を十分に吟味していなければなりません。このような側面から、預言をするものは吟味されなければならぬのです。

預言する者も、ふたりか三人が話し、ほかの者はそれを吟味しなさい。

(Ⅰコリント 14・29)

預言の内容に聖書と少しでも違うことがあるとすれば、それはただ集会に混乱をもたらすものですから、否定されなければなりません。間違った預言をするという可能性は、常に存在しています。ですから、常に主に対してすべてを頼ってゆくという姿勢が大切です。

2 奉仕

奉仕とは、汗とはこりにまみれて主に仕えることを意味しています。大切なことは、私たちの奉仕がどのような内容のものであるかということではなく、その奉仕がただ主にたいしてのみなされたかどうかということです。私たちは人々に仕えるか、主に仕えるかのどちらかの態度しかとることができません。主の栄光のみを追い求めているか、あるいはほかのものを求めているかのどちらかです。自分自身を完全に主に捧げることがなければ、奉仕はありえません。自分自身に目を留める人や、ほかの人々に目を向ける人は実際問題としてこの奉仕の務めにあずかること

ができません。ですから、この奉仕の際に一番大切なことは主に対する忠実さです。

3 教えること

預言の場合には、信者の良心と意志に対して語りかけますが、教えは信者の理性に訴えかけるものです。教えとは、聖書の真理を人間の理性で分かるようにくだいて説き明かすことです。聖書を通じて、神の真理を人々にはっきりと伝えることは今日非常に大切な務めです。ですから、教えの内容は常に聖書に合っているかどうか吟味されなければなりません。聖書の御言葉に自分の意志で何かを付け加えたり、聖書の御言葉を割り引きして考えることなどは神によって呪われる行為です。

4 勧め

勧めとは、聖書の御言葉が信者の生活において具体的な形を取って現れるために助けとなることです。

彼（バルナバ）はそこに到着したとき、神の恵みをみて喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

（使徒11・23）

また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに對してするように、あなたがたひとりひとりに、ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

（Ⅰテサロニケ2・11、12）

さて、兄弟たち。私は、私たちの主イエス・キリストの御名によって、あなたがたにお願います。どうか、みなが一致して、仲間割れすることなく、同じ心、同じ判断を完全に保ってください。

(Iコリント1・10)

私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。

(Iコリント4・14)

勧めもまた、神に対する使命であり、神の御霊にすべてをゆだねることを必要とします。勧めをする人はそれを聞く人が実際にその勧めに従うことができるように勧めなければなりません。正しい勧めをすれば、多くの人々はその勧めに従うようになります。これを聞く信者が勧めによって打ちのめされるのではなく、大きな喜びに満たされなければなりません。勧めによって信者は道を踏み外さないようにという警告を受けます。

罪を指摘されることは確かに苦痛ですが、その人は同時に祝福をも受けることになります。新たな道を示されるからです。

5 分け与えること

分け与えるということもまた恵みの賜物ですが、多くの人々はこの賜物について誤解したり、軽視したりしています。単に霊的なことのみならず、物質的なことにおいても、聖霊の導きによって行うべきです。

苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。私はあかしします。彼らはみずから進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。

(Ⅱコリント 8・2-4)

旧約聖書の時代には、イスラエルの民はその全収入の十分の一を神に捧げなければなりませんでした。自ら望むと望まざるとにかかわらず、そうするように義務づけられていたのです。しかし、新約聖書の時代にある私たちは、自分の意志に反して捧げることは必要ではありません。マケドニアの信者たちは、「みずから進んで」すなわち、自発的に、また力以上に捧げたということが書いてあります。

ひとりひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は喜んで与える人を愛してくださいます。

(Ⅱコリント 9・7)

この世の原則は、「たくさん持っているからあげましょう。」ですが、聖書の原則はたくさん持っているいいないにかかわらず、「さしあげますから受けてください。」です。分け与えることは、自分の名譽のためになされるべきでもなければ、人によく思われたいためにするのもありません。人間は本質的に物惜しみをし、人から何かを受けたいという思いを持っていますが、聖霊は私たちを、人に与える者としてくださいます。地上の富に頼ることは、私たちの信仰生活をしり

すばみにさせてしまいます。

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。

(Ⅱコリント9・8)

6 指導すること

指導するためには熱心さと勤勉さが要求されます。また、本当の意味で人を指導するためには自分を空しくして、謙遜にならなければなりません。

神よ。私を救ってください。水が、私ののどにまで、入ってきましたから。

それは、あなたの家を思う熱心が私を食い尽くし、あなたをそしめる人々のそしりが、私に降りかかったからです。

(詩篇69・1、9)

弟子たちは、「あなたの家を思う熱心がわたしを食い尽くす。」と書いてあるのを思い起こした。

(ヨハネ2・17)

イエス様に特徴的なことは、いつでも神の家族と神の家に対する熱心でした。指導するときの危険性は、その熱心さに倦み疲れてしまうことです。ですから、パウロはここで、熱心に指導しなさいと強調して勧めているのです。ほかの人々を指導することには大きな責任が伴います。指

導するためには、まず指導者が自分自身を神に捧げること、また、自分自身を無にして神に仕える態度が必要です。さらに、上からの知恵、慎重な配慮、そして変わらぬ忠実さを持たなければなりません。指導する者は人々に訓戒を与えるだけでなく、一人一人に対して実の父母のような愛情を持って指導し、その人自身が群れの模範とならなければなりません。

たといあなたがたに、キリストにある養育係が一人あろうとも、父は多くあるはずがありません。この私が福音によって、キリスト・イエスにあつて、あなたがたを生んだのです。ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。

(Ⅰコリント 4・15～16)

また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに對してするように、あなたがたひとりひとりに、ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。

(Ⅰテサロニケ 2・11～12)

人に指導する者は、成長した信者でなければなりません。

「人がもし監督の職につきたいと思うなら、それはすばらしい仕事を求めることである。」ということばは真実です。ですから、監督はこういう人でなければなりません。すなわち、非難されるところがなく、ひとりの妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、品位があり、よくもてなし、教える能力があり、酒飲みでなく、暴力をふるわず、温和で、争わ

ず、金銭に無欲で、自分の家庭をよく治め、十分な威厳を持って子どもたちを従わせている人です。——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう。——また、信者になつたばかりの人であつてはいけません。高慢になつて、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。また、教会以外の人々にも評判の良い人でなければいけません。そしりを受け、悪魔のわなに陥らないためです。

(Ⅰテモテ3・1-7)

これと反対に、正しくない指導者について聖書は次のように語っています。

私は教会に対して少しばかり書き送ったのですが、彼らの中でかしらになりましたがっているデオテレベスが、私たちの言うことを聞き入れません。それで、私が行ったら、彼のしている行為を取り上げるつもりです。彼は意地悪いことばで私たちをのしり、それでもあきたらずに、自分が兄弟たちを受け入れないばかりか、受け入れたいと思う人々の邪魔をし、教会から追い出しているのです。

(Ⅲヨハネ9-10)

7 慈善

貧しい人、惨めな立場におかれている人、病人は施されることを必要としています。慈善も重要な賜物です。また、慈善を行なえることは信者の特権です。なぜなら、慈善は神に喜ばれることだからです。

ただ私たちが貧しい人たちをいつも顧みるようにこのことでしたが、そのことなら私も大いに努めて来たところです。
(ガラテヤ2・10)

さらに慈善は、罪を犯した人を喜んで赦すことでもあり、つまり、その罪を後からほじくり返したりせず、かえってその欠点を覆うことだからです。弱い人々、孤独な人々は慈善を必要としています。

私たちは今まで七つの異なった賜物について考えてきました。

ひとりひとり神から与えられたそれぞれの賜物を持っているので、人それぞれに行き方があります。

あなたがたは、言葉といい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあつて豊かなものとされたからです。それは、キリストについてのあかしが、あなたがたの中で確かになったからで、その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。(Iコリント7・7、1・5-7)

賜物とは、誰か特定の個人を満足させるために用いられるものではなく、集会全体の益になるために用いられるべきものです。一つ一つの器官がほかの器官のために奉仕することになること、つまり、一人一人の信者がほかの信者に仕えるようになることが真の交わりを成り立たせます。主が私たちの心の目を開いてくださって、私たちがそれぞれに与えられた使命をよくわきまえて

仕え合うことができれば、それこそ主の望まれていることなのです。



久田博さん・倫子さんご夫妻の洗礼式にて。田中順治さん・節子さんご夫妻と。



野口クリさんとお嫁さんのとも子さん。

今川三枝子さん(左)と義理のお姉様の池田幸子さん。



26 生きた集会（具体的な勧め）

ローマ人への手紙

12章9節から21節まで

I いつわりのない愛——信者に対して（9～16節）

- 1 真の愛は悪を憎みます
- 2 兄弟に対する尊敬
- 3 日々の勤勉
- 4 患難にある喜び
 - a 将来を見つめることの必要性
 - b 主を見上げることの必要性
 - c 聖徒に目を向けることの必要性
- 5 自分を虚しくすること
 - a 祝福すること
 - b 共に喜ぶこと
 - c 共に泣くこと
- 6 一つ心となること



「知れ。主こそ神。主が、私たちを造られた。（詩篇100・3）」
主にあつてもに喜ぶ
長女古田康子さん、次女小松和江さん、三女保国照子さんの三姉妹。

Yasukuni

28.

future
Kono

- II
- a 高ぶらない
 - b 身分の低い者を大切にする
 - c 自分を知者と思わない
- 1 悪を持って悪に報いてはならない
- 2 復讐してはならない
- 3 敵の頭に炭火を積みなさい
- 平和を図ること——未信者に対して(17～21節)

日本各地から軽井沢・バイブルキャンプに集った方々。「互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず…」(ローマ12・16)」



ローマ人への手紙12章全体の主題は、キリスト者と真の教会との関係です。いいかえれば、真の教会における聖霊の実と言えましょう。そして、この12章は、いままで見てきましたように三つの部分に分けて考えることができます。

第一の部分は、1―2節です。ここでは信者の立つべき基盤について述べています。すなわち、徹底的な献身についてです。献身とは、自分自身をすべて神に捧げることによつてのみ、自分が聖い者とされるということです。パウロは自分自身を神に捧げることが願っていました。献身は、聖霊が信者の心の中に住んでくださることによつてはじめて可能になります。

真の礼拝とは、徹底的な献身です。捧げるといふ聖書の言葉のものと意味は「近づく」という言葉でした。神に近づきたいと思う人、神についてさらによく知りたいと思う人は、自分自身を神に捧げなければなりません。主なる神は、人間の体とも交わりを持ち、ご自身のご栄光のためにお用いになりたく思っています。私たちの日々の生活の、朝起きてから夜寝るまでのすべてを神は支配なさりたいのです。

主イエスのご生涯こそ、この徹底的な献身の模範でした。

ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしい香りをおささげになりました。

（エペソ5・1―2）

パウロも、徹底的な献身の模範でした。

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

(ピリピ 1・21)

私たちはどうでしょうか。

私たちの肉体を構成している物質は、それ自体善でも悪でもありません。ところが、肉体は神の道具ともなれば、また悪魔の道具ともなります。ローマ人への手紙6章において、私たちは自分たちの肢体が不義の器か、義の器かのどちらかであることを学びました。旧約聖書における供え物とは、動物でした。しかし、動物は自分の意志に従っていけにえとして捧げられたものではありません。人間の罪を贖うため、強制的にいけにえとして捧げられたのでした。しかし、私たちは自分自身を自らの意志によって進んでいけにえとして捧げなければなりません。もちろん、私たちの捧げものは自分たちの罪の赦しのためではありません。私たちの罪のためには主イエスご自身がいけにえとなってくださったからです。そうではなく、私たちはもうすでに自分が主によって贖われたからこそ、自らを生きた供え物として捧げるのです。このような徹底的な献身こそ、主の喜ばれる生活です。この献身がなければ信者の生活はすべて徒勞に終ってしまいます。

2節にはこの世について書かれています。「この世」とは、神を認めずに生きる人々をさしています。私たちが神によって新しくされたのなら、私たちの世に対する関係は、今までとはまったく違ったものにならなければなりません。私たちの考え、思い、感情、好み、意志、これらのものは聖霊の支配のもとに置かれなければなりません。この結果こそ、私たちが神のみこころは何かをわきまえ知るために欠くことのできないものです。

神のみこころは、神に対して自分自身を徹底的に捧げ、この世と妥協することのない人にのみ明らかにされます。ですから、主なる神のみこころを知るための必要条件は、徹底的な献身です。この献身なしに、本当の意味で主イエスに従うことはできません。

さらに、私たちは第二の部分である3～8節までを振り返ってみましょう。この箇所の主題は真の交わりでした。聖霊の導きにしたがうことによって、信者は自分自身が何であるかということと正しく知ることができます。

自信を失って、自分は役に立たないと思っている信者を神はお用いになることができません。

また、それと同様に思いついて、自分はなんでもできると思っている信者も神はお用いになることができません。ですから、自分自身を正しく認識することがどうしても必要です。私たちは信仰が進むにしたがって、自分を大切にする気持ちが少なくなり、主イエスを大切にする気持ちが大きくなってきます。このようにして私たちは自分を正しく認識することを学んでゆくのです。聖霊の賜物は、ある特定の個人に属するのではなく、集會全体に役立てられなければなりません。この賜物を用いることはひとりひとりの信者に託された責任です。一つ一つの肢体はほかの肢体に仕えるために存在しているからです。

さて、私たちがこれから学ぼうとしている第三の部分である9節からは、12章の中心的なことが書かれています。パウロはこれまでは謙遜の重要性について語ってきましたが、ここからは愛について特に強調して語っています。真の交わりの必要条件は謙遜でした。そして、これから学ぶ生きた教会の必要条件は、愛です。

9 節からのパウロの勧めは信者に対して語られたもので、未信者のための道徳ではありません。新約聖書では、私たちが自分の力で遂行することのできる道徳についてではなく、聖霊によって新しくされた新しい生活について書かれています。どのような宗教にも、道徳律が存在します。つまりそれは、人間の中に少しでも残っている良いものが成長してくるようになることを願っているからです。道徳とは、人間のあるべき理想的な状態を示しているものです。しかし、人間の努力は皆みじめな結果に終わってしまいます。聖書はこれとはまったく違ったことを私たちに示しています。聖書によれば、人間の中には何一つとして良いものがないために、神は人間を退けられ、キリストと共に十字架につけられたのです。自分自身に破産し、主イエスによって新しい命を体験した人は、この新しい人生を歩むことができます。神は、私たちに不可能なことを要求なさることはありません。

9 - 21 節の主題は、信仰生活において信者がお互いにすべきこと、また未信者に対して取るべき態度についてです。それではまず、この箇所を読んでみましょう。

愛には偽りがあつてはなりません。悪を憎み、善に親しみなさい。⁹ 兄弟愛を持つて心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。¹⁰ 勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。¹¹ 聖徒の入用に協力し、旅人をもてなしなさい。¹² あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであつて、のろつてはいけません。¹³ 喜ぶ者といつしよに喜び、泣く者といつしよに泣きなさい。¹⁴ 互いに一つ心となり、高ぶつた思いを持たず、かえつて身分

の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思つてはいけません。¹⁷だれに對してでも、惡に惡を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。¹⁸あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する人たち。¹⁹自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐は私のすることである。私が報いをする、と主は言われる。」²⁰もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。²¹惡に負けてはいけません。かえって、善をもって惡に打ち勝ちなさい。

（ローマ 12・9―21）

私たちはさらにこの部分を二つに分けて考えることができます。

9―16節までは、信者に対する態度の勧め

17―21節までは、未信者に対して取るべき態度の勧め

しかし、この二つのどちらにも共通して勧められていることは、いつわりのない愛です。そしてこの偽りのない愛の現われとして、6項目に要約されるさまざまな勧めが語られています。これからそのひとつひとつについて考えてみたいと思いますが、ここで語られている愛とは、もちろん人間的な愛についてではなく、神の愛、すなわち主イエスの愛であることに注意してください。

I いつわりのない愛——信者に対して

1 真の愛は悪を憎みます

神のみところに従わず、隣人の心におもねる人は、真の愛を行っているとはいえません。未信者は根本的に自分自身のことを中心に考え、自分の利益を求めています。世の中には、大変礼儀正しい人がいますが、そのような人々も必ずしも真実の愛を行っているとはいえません。

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと真実をもつて愛そうではありませんか。

(Iヨハネ3・18)

真の愛は罪を憎みます。

ああ。悪を善、善を悪と言っている者たち。彼らはやみを光、光をやみとし、苦みを甘み、甘みを苦みとしている。

(イザヤ5・20)

主なる神はいかなる罪をも嫌われます。ですから、私たちもあらゆる罪を嫌い憎まなければなりません。私たちは罪に対してはつきりした態度を取らなければなりません。多くの信者の場合、罪に対する態度のうち四分の三ぐらいいは、まあどうでもいいのではないか、という気持ちのようです。しかし、例えばダビデは罪に対してはつきりとした態度を取りました。

主よ。私は、あなたを憎む者たちを憎まないでしょうか。私は、あなたに立ち向かう者を忌みきらわないでしょうか。私は憎しみの限りを尽くして彼らを憎みます。彼らは私の

敵となりました。

（詩篇139・21～22）

真の愛は悪を憎みます。あなたはどうか。

2 兄弟に対する尊敬

信者はみな主イエスに属しています。主イエスは一人一人のために愛を思っておられ、一人一人を愛しておられます。主イエスが一人一人をこのように大切に扱っておられるのですから、私たちも尊敬を持っていたがいに仕え合うべきです。兄弟たちもやはり私たちと同じように主イエスが愛してくださっているのですから、尊敬し合うべきで、劣っているところがあるからといって決して軽蔑するなどということがあつてはなりません。

私たちは、自分が死からのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛していないものは、死のうちにとどまっているのです。（Ⅰヨハネ3・14）

それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあつても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。

（コロサイ3・12～14）

地にある聖徒たちには威厳があり、私の喜びはすべて、彼らの中にあります。

(詩篇 16・3)

私は、あなたを恐れるすべての者と、あなたの戒めを守る者とのともがらです。

(詩篇 119・63)

3 日々の勤勉

真の愛は熱心に主に仕えることを目標とします。怠惰や安逸をむさぼることが入り込む余地はありません。確かに神の愛は熱心さを伴います。私たちの行いが、すべて主に對する愛に根ざしていることこそ信仰の結果です。

奴隸たちよ。あなたがたは、キリストにしたがうように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。人のごきげん通りのような、うわべだけの仕え方でなく、キリストのしもべとして、心から神のみこころを行い、人ではなく、主に仕えるように、善意をもつて仕えなさい。

(エペソ 6・5-7)

使いにやる者にとって、なまけ者は、齒に酢、目に煙のようなものだ。(箴言 10・26)

自分の仕事をなまける者は、滅びをもたらす者の兄弟である。

(箴言 18・9)

なまけ者よ。蟻のところへ行き、そのやり方を見て、知恵を得よ。蟻には首領もつかさどる支配者もないが、夏のうちに食物を確保し、刈入れ時に食糧を集める。なまけ者よ。いつまで寝ているのか。いつ目をさまして起きるのか。しばらく眠り、しばらくまどろみ、しばらく手をこまねいて、また休む。だから、あなたの貧しさは浮浪者のように、あなたの乏しさは横着者のようにやって来る。

（箴言 6・6―11）

あなたがたのところで、私たちは締まりのないことはしなかったし、人のパンをただで食べることもしませんでした。かえって、あなたがたのだれにも負担をかけまいとして、昼も夜も労苦しながら働き続けました。それは、私たちに権利がなかったからではなく、ただ私たちを見ならうようにと、身をもってあなたがたに模範を示すためでした。私たちは、あなたがたのところに行ったときにも、働きたくない者は食べるなど命じました。ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締まりのない歩み方をしている人たちがあると聞いています。こういう人たちには、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。

（Ⅱテサロニケ 3・7―12）

私たちは、日々の仕事に対して勤勉であるべきです。けれどもここに一つの危険性があります。

それは、私たちが地上の仕事の奴隷になってしまう危険です。私たちは熱心で勤勉に与えられた仕事を全うしなければなりません、私たちの心は常に主に対して燃やされていなければなりません。私たちが仕えているのは会社の社長でも、学校の校長先生でもありません。主ご自身に仕えているのです。このような奉仕の土台はやはり、12章1節に述べられていたように、私たちの徹底的な献身です。私たちは主に対して徹底的に献身するべきなのであって、決して会社や学校に対してではありません。

4 患難にある喜び

私たちの心に神の愛が注がれているなら、どのような患難にあっても失われることのない喜びが与えられます。

この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ5・5)

この喜びは、私たちが現在おかれている患難から目をそらし、来るべき将来の栄光に目を向けるとき与えられます。また、私たちの周囲の人間や境遇から目をそらし、主へと目を向けるときに与えられます。さらに、私たちが自分中心の願いから目をそらし、ほかの兄弟たちの入り用に對して心を用いるときに与えられます。この三つの点について詳しく考えてみましょう。

a 将来を見つめることの必要性

12節に「望みを抱いて喜び、」と書かれているように、私たちは新しく生まれることによって

生ける望みを持つようになりました。その希望とは、主イエスご自身にほかなりません。ですから、私たちは喜びに満たされ、患難の中にあっても私たちに確固たる確信が与えられるのです。苦難や患難は私たちを弱めるためではなく、逆に強めるためにある訓練なのです。目に見えるものに目を留めるならば、私たちはきつと絶望し、追い詰められて八方ふさがりの状態になってしまいうでしょう。しかし、そのときに私たちが未来を望み見ることができれば、私たちには希望が与えられます。なぜなら患難は過ぎ行くものであり、主は近いからです。

主は近いのです。

（ピリピ 4・5）

b 主を見上げることの必要性

主に目を留めるとは祈ることにほかなりません。12節の続きには「絶えず祈りに励みなさい。」とあります。正しい導きと本当の力は上からのみ与えられます。私たちはすべてのことを祈りによって、主との交わりによってなすべきです。それ以外には何事も成し得ないからです。このようにすることによって、私たちの心は主に静められ、多くの問題は全く違って見えるようになるでしょう。

主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いとによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ 4・5～7）

あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。(コロサイ3・2)

苦難の日にはわたしを呼び求めよ。わたしはあなたを助け出そう。あなたはわたしをあがめよう。

(詩篇50・15)

c 聖徒に目を向けることの必要性

私たちがここに書かれているパウロの勧めをただ表面的にだけ受け取るなら、一つ一つの勧めは互いに無関係のようにしか思われないうが、実はそれぞれが緊密に関係し合っています。つまり、これらの勧めは、中心にある真の愛の現われなのです。私たちが将来を望み見るなら、それは主を見上げることになります。そして、主を見上げるならば、私たちは自分の問題にばかり捕らわれてしまうのではなく、聖徒の入り用を満たしたいという願いが起こされるようになります。兄弟の必要に心をつかうなら、私たちは自分のことを思い煩っている余裕がなくなります。このようにして自分を縛りつけている足かせから解放されることは大変重要で

もちろん、このように聖徒の入り用に協力するということは、未信者に対して言われているものではありません。主を信頼することができ者のみが、将来に対して希望を持つことができ、そのときにだけ聖徒の必要を満たしたいという願いが湧き起ってくるからです。

集会の使命は、社会問題を考えることや福祉的な奉仕を行うことではありません。そうではなく、重荷を負っている兄弟たちに対して必要な助けを与えることです。ですから未信者は集会の

援助を受けることができません。また、集会から援助を受けることのできる信者も限られた人々であるべきです。このことについてパウロはやもめの例を用いて説明しています。

やもめの中でも本当のやもめを敬いなさい。

やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、良い行ないによつて認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良い業に務め励んだ人としなさい。

（Ⅰテモテ5・3、9―10）

パウロは、聖徒の欠乏を自分の欠乏だと思いなさい、自分のことだと考えて助けなさいと言っています。主なる神は私たちをほかの人々のために心を砕くことができるようにしてくださいませ。初代教会はこの良い模範を示しています。彼らはすべての持ち物を共有し、乏しい人はいなかったと書かれています。私たちも自分の持ち物に対して正しい態度を取らなければなりません。私たちに与えられたものは、主に仕えるために用いるべきです。パウロは持ち物を共有することを命じてはいませんが、持ち物に対して次のような勧めをしています。

この世で富んでいる人たちに命じなさい。高ぶらないように。また、たよりにならない富に望みを置かないように。むしろ、私たちにすべての物を豊かに与えて楽しませてくださる神に望みを置くように。また、人の益を計り、良い行いに富み、惜しまずに施し、喜んで分け与えるように。また、まことのいのちを得るために、未来に備えて良い基礎を自

分自身のために築き上げるように。

(一テモテ6・17〜19)

私有財産を聖書は認めています。しかし問題は、私たちの持ち物に対する態度にあります。私たちが持ち物を所有しているのであり、持ち物が私たちを支配しているようであってはいけません。ですから、パウロは「旅人をもてなさない。」と言っています。もてなしは単に信者に対してのみではなく、未信者に対してもするようにと勧められています。「もてなさない」という言葉は原語によれば「追い求めなさい」とか「熱心に願い求めなさい」という意味の言葉が用いられているからです。

5 自分を虚しくすること

続く14節には「あなたがたを迫害するものを祝福しなさい。」とあります。信者は未信者に対して憎しみの心を持つてはいけません。また信者は、だれもが未信者から憎まれたりいやがられたりすることを経験しています。憎むものに対して、信者が取るべき態度は祝福だと聖書は言っています。祝福とは他の人の益を図り、他の人の願うことをすることを意味しています。信者がこの地上に存在するのは、他の人々が主の祝福を受けるようになるためにほかなりません。救いと光、愛が信者によって明らかにされるべきです。私たちは私たちに向けられる憎しみ、ねたみ、反対に対してどのようにしたら良いのでしょうか。主イエスの取られた態度は次のようなものでした。

ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさはか

れる方にお任せになりました。

（Ⅰペテロ 2・23）

私たちは福音書の中にしばしば「イエスは黙っておられた。」「イエスは何も言わなかった。」「イエスは何もお答えにならなかった。」という言葉が出てくるのを知っています。自分を虚しくすることは祝福する者となることです。そしてそれはともに喜び、共に泣く者となることです。もちろん、自分を虚しくすることは自分でできるようなことはありません。これは聖霊の実です。真の愛は自分自身を忘れさせるからです。共に喜ぶということの例は、次の箇所に書かれています。

あなたがたのうちに羊を百匹持っている人がいて、そのうちの一匹をなくしたら、その人は九十九匹を野原に残して、いなくなった一匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか。見つけたら、大喜びでその羊をかついで、帰ってきて、友達や近所の人たちを呼び集め、『いなくなった羊を見つめましたから、いっしょに喜んでください。』と言うでしょう。

（ルカ 15・4～6）

花嫁を迎えるものは花婿です。そこにいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。

（ヨハネ 3・29）

このように自分を虚しくした人間の代表は、バプテスマのヨハネでした。

あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。

(ヨハネ 3・30)

このような態度を取ることができるものだけが、本当の意味で人と共に喜ぶことができる人です。さらに、私たちは聖書の中に「共に泣く」と言うことの多くの例を見いだすことができます。

エズラが神の宮の前でひれ伏し、涙ながらに祈って告白しているとき、イスラエルのうちから男や女や子どもの大集団が彼のところに集まってきて、民は激しく涙を流して泣いた。

(エズラ 10・1)

そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」イエスは涙を流された。

(ヨハネ 11・33-35)

エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。

(ルカ 19・41)

真の愛によって人は変えられ、自分を忘れて共に泣くようになります。

6 一つ心となること

真の愛のあるところでは、人々は互いに一つの心となることができます。一つの心になるとは、まったく同じことを考えるようになるということではありません。愛によってたがいに尊敬し合い、心が通い合う交わりのある集いになる、ということです。この点についてもまた、主イエスは私たちに模範を示されました。

こういうわけですから、もしキリストにあつて励ましがあつて、愛の慰めがあり、御霊の交わりがあり、愛情とあわれみがあるなら、私の喜びが満たされるように、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにしてください。何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだつて、互いに人を自分よりもすぐれた者と思ひなさい。自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。∴それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。

（ピリピ 2・1-5）

信者は互いに助け合い、同じ目的を目指し、主の栄光を望んで互いに励まし合わなければなりません。16節には、「自分の低い人に順応しなさい。」とありますが、これは貧しい人、賢くない人、小さい人々に心を合わせることです。つまり、思い上がった考えや高慢を捨てて、信者同志が一つになることが大変重要なのです。

主はすべて心おこる者を忌みきらわれる。確かに、この者は罰を免れない。

（箴言 16・5）

しかし、神は、さらに豊かな恵みを与えてくださいます。ですから、こう言われています。「神は、高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる。」（ヤコブ 4・6）

これらの御言葉は未信者に対してではなく、すでに救いを受けている信者に対して語られたものです。

よく聞きなさい。愛する兄弟たち。神は、この世の貧しい人たちを選んで信仰に富むものとし、神を愛するものに約束されている御国を相続する者とされたではありませんか。

（ヤコブ 2・5）

自分を知恵のある者と思うな。主を恐れて、悪から離れよ。

（箴言 3・7）

パウロも、「自分こそ知者だなどと思つてはいけません。」と言っています。うぬぼれる者、碎かれていない者は、主がお用いになることができません。

自分を知恵のある者と思っている人を見ただろう。彼よりも、愚かな者のほうが、まだ望みがある。

（箴言 26・12）

愛は自慢せず、高慢になりません。

（1コリント 13・4）

今日の世界のもっとも一般的な特徴は、自分自身を「知者」と考えることです。このような考えを持つ人はやがて自分の本当の姿を知ったときに失望せざるを得ません。主イエスは、ご自分を知者であるとされたことは一度としてありませんでした。そうではなく、私は父のみこころを行っているだけである、と言われたのです。

Ⅱ 平和を図ること——未信者に対して

私たちは与えられた神の愛を現わすために、特に未信者に対しては平和を図るべきであると書かれています。そしてこの平和を図ることについては17節以下に三つのことが命令されています。

1 悪をもって悪に報いてはならない

2 復讐してはならない

3 敵の頭に炭火を積みなさい

この三つのことについて簡単に考えてみましょう。

1 悪をもって悪に報いてはならない

だれでも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。

（Ⅰテサロニケ5・15）

主イエスは私たちに対して「あなたがたは私の証人です。」と言われました。ですから私たちもまた主イエスと同じように、決して悪をもって悪に報いてはいけません。私たちの態度はその

点で十分用心深いものである必要があります。

私は、全き道に心を留めます。いつ、あなたは私のところに来てくださいますか。私は、正しい心で、自分の家の中を歩みます。私の目の前に卑しいことを置きません。私は曲がったわざを憎みます。それは私にまといつきません。

(詩篇101・2-3)

真の愛によって私たちの心が満たされるとき、私たちはすべての人々に対して平和を保つことができるようになります。パウロは真の愛について次のように述べています。

すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。

(Iコリント13・7)

2 復讐してはならない

このように、真の愛を与えられるようになった人は、喜んで自分の権利すらも放棄しようとするようになります。しかし、生まれながらの人間は、自分自身の要求を追求し争いを好みます。互いの利害関係が対立し感情的になったとき、復讐の心がわいてきます。この世では「そんなことをするのなら、こうしてやる。」という態度を取ったとしても当然のことのように思われがちです。しかし聖書は、信者には自分自身で復讐をする権利はない、と言っています。

復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。私は主である。

(レビ19・18)

ダビデもまた自分自身で復讐する権利を持つとうとしました。彼は復讐するチャンスがあったにもかかわらず、あえて主の御言葉に従おうとしたのです。

彼は部下にいった。「私が、主に逆らって、主に油そそがれた方、私の主君に対して、そのようなことをして、手を下すなど、主の前に絶対にはできないことだ。彼は主に油そそがれた方だから。」ダビデはこう言って部下を説き伏せ、彼らがサウルに襲いかかるのを許さなかった。サウルは、ほら穴から出て道を歩いて行った。（Ⅰサムエル 24・6～7）

主イエスもまた、ご自身で復讐なさることはありませんでした。真の愛は真の自由をもたらすからです。

そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

（ルカ 23・34）

3 敵の頭に炭火を積みなさい

これは旧約聖書からの引用です。

もしあなたを憎む者が飢えているなら、パンを食べさせ、渴いているなら、水を飲ませよ。あなたはこうして彼の頭に燃える炭火を積むことになり、主があなたに報いてくださる。

（箴言 25・21～22）

かつてしばしば行われた刑罰のように、炭火の上を裸足で歩くことならばあるいはできるかもしれませんが、頭に燃える炭火を積むと言うことは、耐えがたいことです。敵にパンを食べさせ、水を飲ませること、このように対立関係にある敵に対して愛のある態度を示すということは、その敵にとってはまさに頭に炭火を積まれることです。このように理解しがたく常識では理解できない愛を示された人は、その愛の真実の前に降参せざるを得ないでしょう。もし私たちが復讐しなくなったときには、このようにせよ、と神の御言葉は語っています。なぜなら、真の復讐は神に委ねるべきものだからです。

復讐と報いとは、わたしのもの、それは、彼らの足がよろめくときのため。彼らのわざわいの日は近く、来るべきことが、すみやかに来るからだ。

(申命記 32・35)

敵に対する態度はまた、主イエスの取られた態度のうちに啓示されています。復讐してはならない、という言葉はネロの時代のローマに住んでいたクリスチャンに対して語られた御言葉でした。当時の信者は、ローマの憎しみに対して打ち勝つ力をこの御言葉から与えられました。その力とは主イエスの愛でした。信者は敵に対してどのように振舞うべきでしょうか。信者は攻撃的になつてはいけません。たとえ攻撃されたとしても、それに仕返しをするということがあつてはなりません。悪に対して悪をもつて報いることをせず、善をもつて悪に打ち勝ちなさい、と言われています。

キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。のの



磐田に向かう車中。左から加藤淑子さん、渥美民子さん、大塚玲子さん。



左から原万里子さん、内田亜佐美さん、清水偕子さんと子どもたち。



左から渡部良子さん、
竹内多恵子さん、藤本光子さん。

私たちの態度もそのようであるべきだと思います。

しられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方
にお任せになりました。

(I ペテロ 2・22～23)

27 信者の公的生活（1）

ローマ人への手紙

13章1節から7節まで

政治権力に対する態度

I 権威とは何か

1 神によって立てられた者

2 神の定め

3 神のしもべ

II 権威の使命は何か

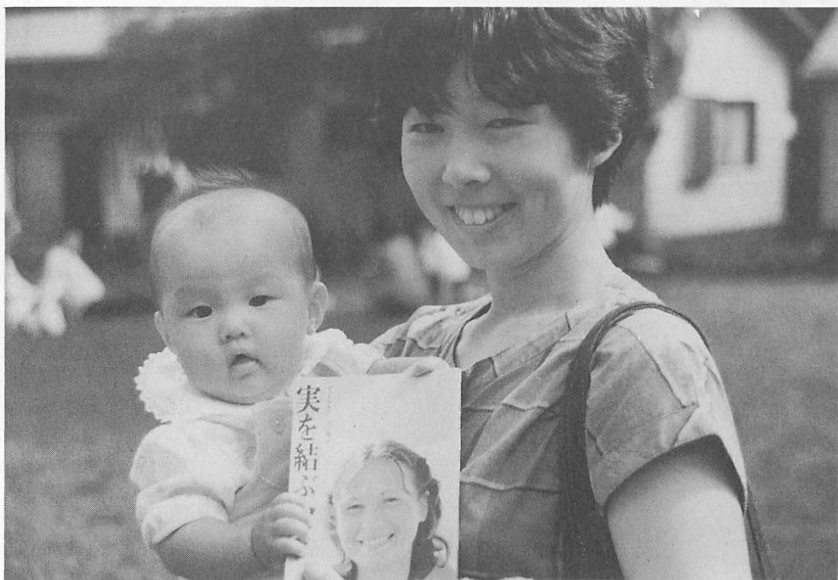
1 善をほめる

2 悪を罰する

III この権威に対して取るべき態度

1 信者は神を認めない権力にも従うべきか

2 信者はどんな点でも従わなければならないのか



「悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。（タイ18・3）」酒井美恵さんとお嬢さんの結実さん。

さてこれから、ローマ人への手紙13章に入りたいと思います。12章で学んだように、この13章にも多くの勧めが出てきます。これらの勧めは、前にも述べたように、すでに救いを受けた信者のためのものであって、未信者のためのものではありません。これらの勧めの根底あるのは神から与えられた新しい生活です。12章から15章までの表題は、私たちを通して現われるキリスト、とすることが出来ます。つまり、新しくされた人生は現実に反映されなければならないということです。私たちの生活のどんな些細な部分でも、私たちの生まれながらの性質によって支配されることがあってはならないのです。

12章のテーマは、信者と集会の関係でした。13章のテーマは、信者の公的生活です。

さらに、この13章を三つの部分に分けて考えることが出来ます。まず、1-7節までは、政治権力に対する態度についてです。次に、8-10節までは、信者の社会生活についてです。最後に、11-14節までは、社会生活における心構えについてです。

これらの政治、また社会生活は、信者にとって重要な生活の場です。そしてこれらのいずれの場においても、信者は新しくされた生活の証を立てなければなりません。主イエスを受け入れることによって、だれでも主イエスの義を自分自身のものとすることが出来ます。そして、この主イエスの義は、信者の日常生活を通して外に現われなければなりません。

この7節までの部分は、特に権威に対して信者が取るべき態度を記しています。この部分に書かれていることを一言で要約するなら、キリスト者は権威に対して従順と謙遜をもって従わなければならないということです。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。したがって、権威に逆らっている人は、神の定めにそむいているのです。そむいた人は自分の身にさばきを招きます。支配者を恐ろしいと思うのは、良い行ないをするときではなく、悪を行なうときです。権威を恐れたくないと思うなら、善を行ないなさい。そうすれば、支配者からほめられます。それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。ですから、ただ怒りが恐ろしいからだけでなく、良心のためにも、従うべきです。同じ理由で、あなたがたは、みつぎを納めるのです。彼らは、いつもその務めに励んでいる神のしもべなのです。あなたがたは、だれにでも義務を果たしなさい。みつぎを納めなければならない人にはみつぎを納め、税を納めなければならない人には税を納め、恐れなければならない人を恐れ、敬わなければならない人を敬いなさい。

(ローマ 13・1-7)

ここで私たちは三つの質問を通してこの箇所について考えていくことにしましょう。

I 権威ある者とは何か

II 権威ある者の使命は何か

III この権威に対してどのような態度を取るべきか

I 権威ある者とは何か

この質問に対して、聖書は三つの答えを用意しています。

1 節によれば、権威とは神によって立てられたものです。また、2 節によれば、権威は神の定めです。そして4 節によれば、権威は神のしもべです。

神はノアに次のように言われました。

人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

（創世記 9・6）

このとき以来権威ある者は、神によって剣を帯び、悪を行なうものに対して怒りをもって報いる者と定められたのです。このように、権威ある力は実は神から与えられたものであり、権威ある者が権威を行使することは神がお許しになったことなのです。権威が神のしもべであるということは、すなわち、権威の背後には神が立っておられると言うことを意味しています。ですから、私たちが権威を単なる人間の力と見ることは間違っています。彼らを立たせられている神に目を留めなければなりません。

パウロがこの13章で問題にしているのは一人一人の権力者ではなく、権威そのもの、すなわち、神が人間の社会に与えられた秩序です。そして、権威、すなわち秩序を与える力は、神の定めであるということが再三強調されています。ですから、私たちは政治的な権威に対しても、国家権

力に対しても従わなければなりません。この權威がなければ、私たちの社会は無政府状態になります。そうなれば一人一人の人間は勝手気ままなことを始めるでしょう。私たちは以前群馬県で起こった悲しむべき連合赤軍の事件を覚えていますが、もし社会が無政府状態になればこのような事件は日常茶飯事となってしまうでしょう。パウロは權威の原理を取り上げているのであって、權威の具体的な現われ、たとえば民主主義、共和主義、独裁主義、社会主義などといった個々の政治形態の優劣を論じているわけではありません。また、歴史上の具体的な政治家一人一人がどうであつたかということでもありません。パウロがここで強調しているのは、支配者と民衆、あるいは政治的指導者と国民のあり方について神がどのようにお定めになつたかです。この意味において、權威は神から与えられたもののなのです。そして、その目的は秩序を守り、人々を保護することです。子どもたちが両親に従うべきであり、妻が夫に従うことが神のみこころであるように、人々は国家権力に従うべきなのです。

Ⅱ 權威ある者の使命は何か

第二番目の質問は、權威の使命は何かということでした。しもべはだれでもある特定の任務を持つています。神のしもべである政治権力もまた特別の神から与えられた使命を持つています。このことについてパウロは二つのことを述べています。

權威の使命は、第一に善を行なう者を誉めることであり、第二に、悪を行なう者を恐れさせることです。權威は、悪に対して堤防とならなければなりません。堤防のように悪の流れをせき止

め、それらが全地を浸すのを妨げなければなりません。政府はどのようなものであれ、悪を行なう者に対して彼らが大きな恐れを持つように、懲らしめをもって報いなければなりません。また一方で、今日の世界のもっとも顕著な特徴は、あらゆる権力に対して反抗しようとすることです。また、権力に対して軽侮の念を持つ傾向が蔓延しています。それはテロリズムのような形でも現われてきています。

神は権力に剣を帯びさせることによって悪を行なう者に報いようとしています。こうして秩序を守ろうとしておられるのです。剣とは悪を行なう者を罰する権利のことです。

わたしはあなたがたのいのちのためには、あなたがたの血の値を要求する。わたしはどんな獣にでも、それを要求する。また人にも、兄弟である者にも、人のいのちを要求する。人の血を流す者は、人によって、血を流される。神は人を神のかたちにお造りになったから。

（創世記 9・5―6）

そのとき、イエスは彼に言われた。「剣をもとに納めなさい。剣を取る者はみな剣で滅びます。」

（マタイ 26・52）

とりこになるべき者は、とりこにされて行く。剣で殺すものは、自分も剣で殺されなければならぬ。ここに聖徒の忍耐と信仰がある。

（黙示録 13・10）

權威は神のしもべとしてことを行います。そして神のみが權威者にその責任を問うことができます。もつとも理想的な法律は十戒の上に立てられたものでしょう。法律が制定される目的は、人々をある一定の秩序の中に入れ、その秩序を守らせることです。それゆえ、法律は常に罰則をとまいます。法律を守らない人は必ず処罰を受けることになります。權力を行使することによって、秩序を維持することができます。

もちろん、国家權力の使命と、主イエスの体なる教会の使命とは異っています。集会の使命は福音を宣べ伝え、罪人を神に立ち返らせ、信者を靈的に成長させ、あらゆることがらを通して、主イエスに栄光を帰すことです。集会はすべての人々に仕えるものであり、もつともひどい犯罪人にも愛を示すものでなければなりません。どのようなひどい不正に対しても忍耐を持たなければなりませんし、どのような状況に追い詰められても、みずから手を下して復讐することは許されません。これとは反対に、国家權力のなすべき使命は、犯罪人を捕え、不正を裁き、悪人にその報いをすることです。このように、懲らしめの任務によって權威は神の道具として用いられています。

Ⅲ この權威に対してどのような態度をとるべきか

私たちはいままでこの世に存在する權威が、その善し悪しにかかわらず、神によって立てられたものであることを見してきました。そして、神がそれらの權威を与えられたのは、社会の秩序を守り、広がる悪に対する堤防となるためであることも学んできました。そこで、三番目の問いは、

私たちはこの權威に対してどのような態度を取るべきか、ということです。1節には、「人はみな、上に立つ權威に従うべきです。」と書かれています。自ら進んで權威に従うことは、神が信者に求めておられることです。ですから、神に従うことを望んでいる人は、神のしもべである權威にも従います。未信者は罰を恐れて權威に従います。それは、新しく生まれることを体験していない生まれながらの性質を持った人は、決して自分を従わせることを望まないからです。しかし、信者は自分の良心によって、自ら進んで權威に従います。これは新しく生まれたことの証しです。

パウロは權威に従う具体的な行動について、6―7節で税を納めることについて述べています。神のしもべである国家に税を納めなくてもよい、などと聖書には決して書かれていません。神のしもべに払わないことは、神ご自身に対して捧げないことになります。權威に対して反抗することとは、神に対して反抗することにはかなりません。私たちは權威に対して従順に従うことを義務づけられています。權威は税を集める権利を持っています。これは聖書にはつきりと書かれています。神の御言葉に完全に従う人は、神によって祝福を受けます。税金に関して自分で行ういろいろと考え巡らすことは、ときに危険なことです。私たちは子どものように従順に御言葉に従って、神から祝福を受けたいものです。ある人々は次のように考えるかもしれませんが。政府は税金を集めてその一部分を無駄使いしたり、官僚たちの私腹を肥すために用いたりするかもしれません。あるいは不必要と思われる軍備の拡張に用いるかもしれません。もしそのように使われるくらいなら、私は税金を納めずにむしろそのお金を貧しい人々に施したい……けれどもこのような考え

は、あまり聖書的ではありません。このことはたしかに一理あるように見えますが、聖書はそういうには勧めていないのです。

それでは、さらに質問を進めて、神を否定するような政府にも私たちは従うべきなのか、という問いについて考えてみましょう。

パウロは、ネロの時代のローマ帝国の支配のもとに苦しんでいたイスラエルに生活していました。そしてパウロはこれらの多くの勧めをローマに住んでいる信者に対して書き記しました。彼はローマ帝国によってなんと多くの苦しみを味わわされたことでしょうか。何年間もの間捕われの身になり、その上結局殺されてしまったのです。ところが、彼はこのローマの政治権力に対して反抗したのではなく、かえって従ったのです。私たちは神のゆえに権威に対して従わなければならない。神はすべての権威の上に座しておられるからです。神は諸々の権威を越えた権威であり、至上の権威です。神はすべての権威の根源なのです。

わたしによって、王たちは治め、君主たちは正義を制定する。わたしによって、支配者たちは支配する。高貴な人たちはすべて正義のさばきつかさ。
(箴言 8・15-16)

王さま。いと高き神は、あなたの父上ネブカデネザルに、国と偉大さと光栄と権威とをお与えになりました。神が彼に賜わった偉大さによって、諸民、諸国、諸国語の者たちはことごとく、彼の前に震え、おののきました。彼は思いのままに人を殺し、思いのままに人を生かし、思いのままに人を高め、思いのままに人を低くしました。こうして、彼の心

が高ぶり、彼の霊が強くなり、高慢にふるまったので、彼はその王座から退けられ、栄光を奪われました。そして、人の中から追い出され、心は獣と等しくなり、野ろばとともに住み、牛のように草を食べ、からだは天の露にぬれて、ついに、いと高き神が人間の国を支配し、みこころにかなう者をその上にお立てになることを知るようになりました。

（ダニエル 5・18～21）

權威に対する反抗はどのようなものであれ罪です。

わが子よ。主と王とを恐れよ。そむく者たちと交わってはならない。（箴言 24・21）

ローマ帝国の皇帝ネロは、何千人とも知れぬ信者たちを苦しめ、彼らの首を斬り、火あぶりの刑に処し、猛獣の餌食にしました。ところがパウロはこのような極悪非道の政治権力であっても、神のしもべであることを認めたのです。たとえどんなに納得のいかない支配者であっても、それは無政府状態の混乱よりはましと言えるでしょう。パウロは当時のローマ帝国の政府を認め、尊敬を持っていました。ですから制定された法律に対して従順に従うべきであると記しています。人間はその心の欲するままを無制限に行うことを許されていません。私たちは一人でこの世に生きているのではなく、ほかの人々と共に社会生活を営んでいます。そこには秩序が必要です。法律は社会における共同生活に秩序を与えるものです。信者は自分が属している權威に対して心から進んで従わなければなりません。もちろん、権力によって不当な取扱いを受けているときに、

法律で定められた方法によって、自分に与えられている権利を主張し守ることは、権威に対する反抗ではなく、むしろ権威を認め、それに従うことを意味しています。

彼らがむちを当てるためにパウロを縛ったとき、パウロはそばに立っている百人隊長に言った。「ローマ市民である者を、裁判にもかけずに、むち打つてよいのですか。」

このため、パウロを取り調べようとしていた者たちは、すぐにパウロから身を引いた。また千人隊長も、パウロがローマ市民だとわかると、彼を鎖につないでいたので、恐れた。

(使徒 22・25、29)

最後に私たちにとって大切な一つの問いについて考えてみましょう。

信者は、どのようなことでも権威に従わなければならないのでしょうか。権威の命ずることが神の御言葉に反する場合、あるいは、自分の良心に反するような場合、私たちは一体どのような態度を取るべきでしょうか。言うまでもなく、信者は神だけに従うべきであり、たとえ神に従うことによって殉教の死を遂げることがあっても、その道を歩まなければならないません。

そこで(民の指導者たちは)彼らを呼んで、いっさいイエスの名によって語ったり教えたりしてはならない、と命じた。ペテロとヨハネは彼らに答えて言った。「神に聞き従うより、あなたがたに聞き従うほうが、神の前に正しいかどうか、判断してください。私たちは、自分の見たこと、また聞いたことを、話さないわけにはいきません。」

(使徒 4・18～20)

ペテロをはじめ使徒たちは答えて言った。「人に従うより、神に従うべきです。」

（使徒 5・29）

キリスト者は決して革命家ではありません。信者は自分の属する国の中で忠実な市民としての義務を行い、国家の命令が己の良心にもとらないかぎり、国家権力に対しても従順に従わなければなりません。私たちの良心にもとることは、私たちが神の証し人であることを妨げ、私たちが世の光、地の塩であることを妨げるようなことです。パウロは当時の社会の政治的、社会的な秩序を無くしたり革命を起こしたりすることは考えていませんでした。

奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由にな리なさい。

あなたがたは、代価をもつて買われたのです。人間の奴隷となつてはいけません。

（I コリント 7・21、23）

さらにパウロは上に立つものに対して祈ることをはっきり勧めています。

そこで、まず初めに、このことを勧めます。すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願ひ、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもつて、平安で静かな一生を過ごすためです。

（I テモテ 2・1・2）

權威のために祈ることは、私たちがそれらに従順に従い、尊敬することを可能にします。もし私たちがどうしても自分の良心に照らして、従うことが難しいような場合でも、信仰による不従順ゆえの罰を潔く受けることは、広い意味で権力を認めそれに従うという態度を現わします。そのときには罰を受けるという心構えがなければなりません。

人の立てたすべての制度に、主のゆえに従いなさい。それが主権者である王であっても、また、悪を行なう者を罰し、善を行なう者をほめるように王から遣わされた総督であっても、そうしなさい。

人がもし、不当な苦しみを受けながらも、神の前における良心のゆえに、悲しみをこらえるなら、それは喜ばれることです。

(Ⅰペテロ 2・13-14、19)

あなたは彼らに注意を与えて、支配者たちと權威者たちに服従し、従順で、すべての良いわざを進んでする者とならせなさい。

(テトス 3・1)

パウロやペテロがこのように語っているとき、彼らは支配者や權威者たちが、良い者であるか悪い者であるか、また信者であるかどうかとも問題にしていません。そうではなく、すべての權威は、たとえそれがどのようなものであっても、秩序を与えるものであると語っています。

先にもお話ししたように、現代社会では、多くの人が上に立つ者に対して反抗しようとしています。若者は年長者に対して反抗し、学生は教授に対して、社員は上役に対して反抗するとい

うのが現代の世相です。神は王を立てて権力をお与えになり、同様に教師や、両親にも必要な権威をお与えになりました。

民はおのおの、仲間同士で相しいたげ、若い者は年寄りに向かつて高ぶり、身分の低い者は高貴な者に向かつて高ぶる。
(イザヤ3・5)

おのおの、自分の母と父とを恐れなければならない。

あなたは白髪の老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。
ない。わたしは主である。
(レビ記19・3、32)

パウロの時代に、ローマの皇帝ネロは、神から与えられた自分の権威を間違つて用いました。それにもかかわらずパウロはその権威を無視しませんでした。と言うのは、ネロは暴君であつたけれども神によつて剣を帯びたものだからです。従順を通して秩序を維持し、そのことによって神に栄光を帰すことができます。それは神が秩序の神だからです。

前回私たちは、私たちの行動が道徳や規範によつて強制されたものではなく、私たちの内に住んでおられる主イエスの現われとなるべきであるということを学びました。物事を行う動機は愛でなければなりません。私たちが権力に従うのは、主イエスに対する愛のゆえにほかなりません。私たちが主イエスを愛するのは、主イエスが先に私たちを愛してくださったからです。主イエスは、「わたしを愛するものはわたしの命令を守ります。」と言われました。主イエスはかつてペテ

口に向かって、「あなたはわたしを愛するか。」とお尋ねになりました。そして、同じ質問を私たちにもしておられます。あなたは主を愛しますか。

私たちの答えは私たちの実際の行動によって示されるでしょう。

「私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。(詩篇23・6)」と期待している諸岡梅子さん。



28 信者の公的生活（2）

ローマ人への手紙

13章8節から14節まで

I 信者の社会生活

1 借りてはならない

2 互いに愛し合いなさい

II 信者が社会生活を営む上での心構え

1 眠りからさめなさい

2 闇のわざを捨てなさい

3 光の武具を着けなさい

お父様の淳ノ助さんの洗礼の日に。藤本賢二さん・佐和代さんご夫妻。「主イエス・キリストを着なさい。（ローマ13・14）」



13章の主題は、信者と公的生活についてです。前回私たちは、13章の1〜7節までを学びました。この部分の主題は、信者の政治権力に対する態度でした。これに続く部分について、私たちは13章の後半、すなわち8〜14節までを、二つのポイントに分けて考えてみたいと思います。

8〜10節までは、信者の社会生活についてであり、11〜14節までは、信者が社会生活をおくる上での心構えについてです。

簡単に要約しますと、新たな義、すなわち神から与えられた義は、自らその人の表に現れてくるようになるということです。主イエスは私たちにただ新しいのちを与えただけではなく、そのいのちが具体的な形として人の表面に現れてくるようにと願っておられます。まず、今日の御言葉をお読みしましょう。

だれに対しても、何の借りもあつてはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。⁹「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。」という戒め、またほかにどんな戒めがあつても、それらは、「あなたの隣人をあなたのように愛せよ。」¹⁰ということばの中に要約されているからです。愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。¹¹あなたがたは、今がどのようなときか知っているのですから、このように行いなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。¹²夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。¹³遊興、酩酊、

淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

(ローマ13・8-14)

I 信者の社会生活

私たちが社会生活を行うために、つまり、人々と協力して社会生活を営むために、聖書は二つのすめをしています。それは、8節に書かれているように、誰に対しても何の借りもあつてはいけないこと、そして、互いに愛し合いなさい、ということです。ほかの人に対して、借りを持たないということは、私たちが祝福のうちに共同生活を営むために必要な条件です。今日の時代に特徴的なことの一つに、人々が互いに借りをつくりあうということがあります。借りをつくることはキリスト者にとつてはあまりよいこととはいえないでしょう。

私たちの信じている天の父は、すべての物を支配しておられ、私たちはその父によつて必要な物をことごとく与えられるのです。ですから、人間に対して借りをつくるということは、決してよい証しにはなりません。主は再びこの地上に、私たち信者を天に引き上げるために来られますが、その日、その時はいつか分らないと聖書に書いてあります。私たちは、いつ主が来られてもよいように備えをしていなければなりません。そのためには、他人に借りがあるということとはふさわしくないことでしょう。聖書は信者に、いついかなる時にも福音にふさわしく歩むようにと教えているからです。

続いて、第二の命令は、互いに愛し合いなさいということです。これは、聖書が私たちに語っている対人関係の上でのすすめです。愛するものは、隣人に対して害を与えません。神の意志はモーセの十戒に現されていますが、それら全体を統一する基盤が愛なのです。神の愛のあるとき、律法は成就されます。

私たちは、神から愛されるには足りない者ですが、それでも、主はそのような私たちに對していのちを捨ててくださいました。主が、私たちを先に愛してくださいましたから、私たちは互いに愛し合います。これは私たちの義務であり、主が私たちのためにいのちを捨ててくださいましたことに對して、私たち信者が持っている責任です。

ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

(エペソ 5・1-2)

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行いと真実をもって愛そうではありませんか。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

(Iヨハネ 3・18、16)

愛は、自らを捧げて隣人に対して益を図ることです。本当の愛は、他人の喜びを喜びとし、他人が幸せになるのを見て満足することです。たとえば他人の幸せな結婚生活を見て、それを心から祝福する気持ちになり、決してその結婚生活を故意に乱したりねたむ思いをもったりすることのないことです。本当の愛は、ほかの人々のいのちを心から尊重します。他人を傷つけたり、ましてや殺そうなどという思いを持つことはありません。また他人の持ち物に対して尊重の念を持ち、ねたむことはありません。本当の愛は、決してほかの人々をうらやんだり、何かをせしめようなどという思いを抱くことはありません。

本当の愛とは、このようなものであり、もしこのような愛を持った人々が構成する国家があるとしたら、その国にはもはや犯罪も起ることがなく、自己中心の行為もない地上の天国であるといえましょう。主が再び来られるまでは、残念ながらこのようなことは起こりえません。しかし、一つ一つの集会はこの世の中であって、この地上の天国となりうる可能性を持っているのです。この真実の愛は、キリスト者の持つ特権であるのみならず、キリスト者の義務でもあります。このような愛は、生まれながらの人間には備わっていません。この世の人々の大部分の行いは、この真実の愛とは反対のものであり、ねたみや憎しみによるものであることが多いのです。

私たちも以前は、愚かな者であり、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快樂の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。

（テトス 3・3）

人間は、新しく生まれ変わることによって神の愛を体験すると同時に、その愛を自分のものとするようになります。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

この希望は失望に終ることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

(ローマ5・1―2、5)

神の命令は、自分を愛すると同じように、あなたの隣人を愛せよ、です。神の愛を獲得した人は、もはや他人を憎むことができません。そのような人は、言葉によると行いによると問わず、隣人に対して危害をくわえたり、いのちをそこなったりすることはできません。またこのような人は姦淫や、盗み、むさぼりの念を持つことがありません。

真の愛は、自分を他人から孤立させておくことはできません。なぜなら、愛は必ずほかの人に語りかけていく性質のものだからです。この神の愛が、私たちの行いや言葉の源とならなければなりません。この愛が、人生のあらゆる場面において主導権を持つようにならなければなりません。9節に書かれている神の命令は、私たちが自分の持ち場を踏み越えて、他人の領域に踏み入ることがないように、という神の禁止条項です。ここでは、人間の愛が書かれているのではなく、神の愛について述べられているのです。神の愛が、具体的な現れをとったのは、主イエスにおい

てです。キリスト者が、主イエスによってより強く支配されればされるほど、キリスト者も主イエスの愛を強く反映する者となります。

主イエスによって愛されている者は、ほかの人々をも愛することができるようになります。

Ⅱ 信者が社会生活を行う上での心構え

信者が新生を体験すると、真の生きた望みを持つようになります。信者が将来において天に引き上げられることは、信者の希望です。

主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会います。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもつて互いに慰め合なさい。(1テサロニケ4・16-18)

主がまもなく来られるということこそ、キリスト者の生きた希望であり、信者の思いのすべてとならなければなりません。私たちが、ただ頭でこのことを理解し、信じようとしているということ、実際に私たちが日々主を待ち望む生活をおくっているということには大変な相違があります。ですから、パウロは私たち信者に対して三つのすすめを書きおक्तたのです。

1. 眠りからさめなさい

2. 闇のわざを捨てなさい

3. 光の武装を着けなさい

この三つの点について簡単に考えてみましょう。まずパウロは、眠りからさめるべき時刻がもうきている、と言っています。彼の生涯はまさに一日一日が主を待ち望む生活でした。ですからパウロは、ローマの信者たちにしつかり目を覚ますようにと書きおくったのです。彼は自分がどのような時代に生活しているかをはっきりと認識していました。パウロは自分の生きている時代を永遠の光に照らして見ていたのです。

そのとき、御霊が補佐官の長アマサイを捕らえた。

「ダビデよ。私たちはあなたの味方。エッサイの子よ。私たちはあなたとともにいる。平安があるように。あなたに平安があるように。あなたを助ける者に平安があるように。まことにあなたの神はあなたを助ける。」

イスサカル族から、時を悟り、イスラエルが何をなすべきかを知っている彼らのかしら二百人。彼らの同胞はみな、彼らの命令に従った。

(I 歴代誌 12・18、32)

かつてダビデは、誤解された結果荒野に追放されましたが、その時、「時を悟った」人々はダビデとともに荒野で過ごすために家庭を捨て、仕事を捨ててダビデに従って行きました。彼らは、ダビデが王として召されたにもかかわらず捨てられたのを見て、「時が迫っている」ことを知ったのです。この人々は、ダビデとともに迫害を忍んだ人々でした。彼らは、その時こそダビデの

側に立つべきであるということを知っていたのです。

今日という時もまた、私たちが霊的な眠りをむさぼっていてよい時ではありません。私たちははっきりと主イエスの側に立たなければなりません。皆が眠り込んでしまっているようなときには、うつかりすると、自分も眠りに連れ込まれてしまう危険性があります。このような危険性から逃れるためには、私たちはどういう心がけが必要でしょうか。それは、主イエスに目を留めながら生活することです。模範的な信者であるエペソのクリスト者たちに対して、パウロは目を覚ましなさいと勧めたのでした。

明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、クリストが、あなたを照らされる。」

（エペソ 5・14）

またヨハネは次のように警告しています。

小さい者たちよ。私があなたがたに書いてきたのは、あなたがたが御父を知ったからです。父たちよ。私があるがたに書いてきたのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。若い者たちよ。私があるがたに書いてきたのは、あなたがたが強い者であり、神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。

（Ⅰヨハネ 2・14）

聖書は、何が近づいているか、について三つのことを述べています。

1. 時が近づいています。

夜はふけて、昼が近づきました。

(ローマ 13・12)

この預言のことを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを心に留める人々は幸いである。時が近づいているからである。

(黙示録 1・3)

「この書の預言の言葉を封じてはいけない。時が近づいているからである。」

(黙示録 22・10)

2. 主の来られる時が近づいています。

主は近いのです。

(ピリピ 4・5)

あなたがたも耐え忍びなさい。心を強くしなさい。主の来られるのが近いからです。

(ヤコブ 5・8)

3. 全ての終わりの時が近づいています。

万物の終わりが近づきました。

(I ペテロ 4・7)

時が近づいており、主の来られるのが近づいており、そして、万物の終わりが近づいています。ですから、パウロは、闇のわざを打ち捨てて光の武器をつけようではないかとすすめているのです。人が闇から離れようとするならば、そこには必ず戦いが起こります。私たちは主イエスの力によつてのみ、この戦いに勝利をおさめることができます。私たちが誤解してはならないのは、パウロは「あなたがたは、これから光の子どもになりなさい。」といっているのではないということです。そうではなく、「あなたがたは、もうすでに光の子とされたので、光の武器で勝利を得なさい。」と言っているのです。

「夜はふけた。」とパウロは語っています。夜とは、不信仰のことです。神と神の御言葉に対する反抗のことであり、また風俗や道徳が退廃することを指しています。13節には正しくない生活が具体的に挙げられています。これは、信者に対して語られていることに注意してください。それはつまり、信者といえどもこの様な生活、すなわち、遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活を送る可能性があるということです。

闇のわざとは、次のようなものを指しています。ねたみ、金銭欲、高慢、自己中心、嘘をつくこと、汚れ、愛のないこと、この世との妥協、責任感のない生活などです。

光が世に來ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。

（ヨハネ 3・19）

なぜ、このような人々は光よりも闇のほうを愛したのでしょうか。彼らは、光に来て、悔い改めることを望まなかったからです。罪から解放されようと望む人は、光のもとに来て、自分の罪を告白しなければなりません。

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨ててはあわれみを受ける。

(箴言 28・13)

闇のわざとは、ちょうど麻醉薬のようなものです。闇のわざによって、信者は罪に対して無感覚になり、霊的に眠らされてしまうからです。このような信者は、目覚めて祈っている者であるとは決して言えません。ですからパウロは、あなたがたは眠りからさめるべき時刻がもう来ている、と言っているのです。これは、光と闇との激烈な戦いにほかなりません。主イエスの側に立つと望む者は、みな闇のわざの力をその身に被らなければなりません。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

(エペソ 6・12)

私たちは、罪に対して断固とした態度を取るべきです。私たちの心のうちに、主イエスの支配する領域が広がれば広がるほど、主の来たりたまう時はそれだけ近くなるのです。霊的に半分眠っている状態の人々には、ほかの人を導きたいという思いも責任も起りえません。私たちの人生は、主イエスに一刻も早くお会いしたいという思いにみたされ、私たちが自らを捨てて主に仕え

ていきたいという思いにみたされたものでなければなりません。私たちの希望について、パウロは次のように語っています。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

（ピリピ 3・20～21）

パウロは私たちに対して、あなたがたは世の光であり、地の塩であるから、あなたがたの思いとその目標は主イエスでなければならぬと語っています。たとえほんのわずかな妥協であつてもこの世と妥協することは、このパウロのすすめを実行することの障害になります。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあつてはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。

（ガラテヤ 6・14）

パウロはさらにことばを続けて、14節に「主イエス・キリストを着なさい。」と書き記しています。このことは、主イエスに似たものとなりなさい、ということですが、常に主イエスと交わりを保っているならば、その人は、主イエスによって満たされます。パウロは私たちに対して、自分を主イエスの内側に隠しなさいとすすめています。このことは、こうして主イエスの愛が私た

ちのうちに現れるためにほかなりません。

主イエス・キリストを着なさい。

人が何かを着たならまわりの人々はその着物をよく見ることができるよう。主イエスを私たちが着るとは、私たち自身が隠されて主が外に現れてくださるということです。肝心ことは、主イエスが人々に見られ、主イエスが輝いてくださることです。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(Ⅱコリント 3・18)

もつとも大切なことは、私たちの言葉を通して、また行いや生活態度を通して、主イエスが現されるようになるということです。これこそが真の証しです。

主イエスを着なさい。

このことは、主との絶えざる交わり、聖霊との一致、主に対する完全な信頼を意味しています。主イエスと交わる人は、主イエスの思いを持つようになり、主イエスを着た人は、肉の欲のために自分をを用いることなどできなくなります。私たちの肉体は、いろいろと健康に留意したりする必要がありますが、それだけでは不十分です。甘やかさないで訓練を重ねることも必要なことです。

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておき

ながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。

（Ⅰコリント 9・27）

私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。

（ガラテヤ 5・16）

自分の肉体に対して、中途半端で曖昧な態度を取った結果、だめになってしまったキリスト者は多くいます。ですから、自分自身を完全に主に捧げるといことがどうしても大切になります。次の御言葉を思いだしてください。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

（ローマ 12・1）

私たちの肉体は、主の聖なる道具となるか、あるいは際限のない欲望を追い求め続けて行くものとなるかのどちらかなのです。ですから、パウロは、自らを訓練して肉の欲のために心を用いてはならないと語っているのです。

主の来られる時は非常に近づいています。

あなたはあなたの神に会う備えをせよ。

（アモス 4・12）

私たちには、やがて来られる主を心から喜んで迎えることができる備えがあるでしょうか。私たちが目を覚まして、闇のわざを捨て、光の武具を着けているならば本当に幸いなことです。

私たちが信じたころよりも、
今は救いが私たちにもっと
近づいているからです。
(ローマ13・11)

黒沢環さん(旧姓・水沢)。吉祥寺集会以結婚式の日に。



右から望月恵子さん・元一さんご夫妻と江藤恵子さん。



29 信者と主にある兄弟姉妹（１）

ローマ人への手紙

14章1節から12節まで

多様な意見と御霊による一致

- I 信仰の弱い人を侮ってはならない
- II 信仰の強い人をさばいてはならない
- III 互いに寛容と尊敬を示しあいなさい

えびの高原洗礼式にて、洗礼を受けた方々。「生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。（ローマ14:8）」



14章の学びに入りましょう。

12章の主題は、信者と集会についてでした。13章の主題は、信者と公的生活についてでした。

14章の主題は、信者と主にある兄弟姉妹です。私たちが兄弟姉妹に対して取るべき態度についてです。14章の内容を要約すれば、信仰的に強い人と弱い人が、それぞれどのような行動を取るべきか、ということについての勧めであると言うことができます。ここでパウロの語っている信仰の強い人とは、福音によって自由にされた異邦人のキリスト者を指しており、信仰の弱い人とは、臆病な心で信じていたユダヤ人のキリスト者を指しています。

さらに、この14章は二つの部分に分けて考えることができます。

初めの部分は1～12節です。ここでは、たとえ一人一人が異なった賜物を持っていたとしても、互いに尊敬と寛容の心を持つことによって一致することができる、という恵みについて述べられています。このことを成就するための秘訣は、一人一人が自分の奉仕を主のために、また、主のみからなる教会のために行うことです。主のみからなる教会とは兄弟姉妹のことですから、私たちの行いは兄弟姉妹に対して奉仕するものでなければなりません。

後半の部分は13～23節までで、そこには、私たちが兄弟姉妹に対してつまずきを与えることがないように、常に思いやりを持つべきであり、またどのようなことがあっても、自分に与えられている信仰の確信の上しっかりと立ち続けることが大切であるということが書かれています。

それでは、前半の部分について学んでみることにしましょう。

あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。何で

も食べてよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜よりほかには食べません。食べる人は食べない人を侮ってはいけなく、食べない人も食べる人をさばいてはいけません。神がその人を受け入れてくださったからです。あなたはいつたいたれなので、他人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。このしもべは立つのです。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。ある日を、他の日に比べて、大事だと考える人もいますが、どの日も同じだと考える人もいます。それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。日を守る人は、主のために守っています。食べる人は、主のために食べています。なぜなら、神に感謝しているからです。食べない人も、主のために食べないのであって、神に感謝しているのです。私たちの中でだれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。もし生きるなら、主のために生き、もし死ぬなら、主のために死ぬのです。ですから、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。キリストは、死んだ人にとっても、生きている人にとっても、その主となるために、死んで、また生きられたのです。それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。次のように書かれているからです。

「主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神をほめたたえる。」

¹² こういうわけですから、私たちは、おのの自分のことを神の御前に申し開きすること

になります。

(ローマ 14・1～12)

この当時のローマの信者たちは、外面的なことがらに対していろいろな意見のくいちがいをみせていました。それで、彼らは思いやりをもって振るまい、愛と謙遜とに根ざした態度を取るようという勧めを受けたのです。パウロは彼らに対して、お互いにさばきあうことがないように、また、一人一人が主に対して責任を負っているのだから、お互いに穏和な態度を取るべきであると語っています。

私たちは12章と13章を通して、新しい義、つまりイエス・キリストご自身が、信者の交わりを通して現わされなければならない、ということ学びました。集会の肢体がそれぞれに多様な賜物を持ちながらも、一致を実現するならば、多くの困難を克服することができます。一人一人の個性が一つに結び合わされ、さまざまな意見が一つにまとまるためには、忍耐が必要です。2、5節を見ますと、集会の中にさまざまな異なった意見を持った人々がいたことがわかります。また、13、14節を見ますと、彼らが互いに意見の対立から争ったこともあったことがわかります。ローマの集会には、ユダヤ人も異邦人もいました。それで、彼らの間にはいろいろな意見の対立がみられたのでしょうか。たとえば、それは食べ物に関することであり、あるいは、どの祭日をまもるべきか、ということに関してでした。

ここでパウロは、信仰の弱い人、また、信仰の強い人という表現を使っていますが、これは何を意味しているのでしょうか。

信仰の弱い人とは、信仰の上であまり重要ではないこと、たとえば、食べ物や飲み物のことなどについて心を煩わせて、「このようなことをしたら恵みから落ちてしまうのではないだろうか。」などと常に不安にかられているような人たちのことを指しています。このようなキリスト者は、10章4節に書かれていたこと、つまり、キリストが律法を終らせられた、ということをもまだ知らないのです。

コリントの集会にも、また同じような弱い信者がいました。

そういうわけで、偶像にささげた肉を食べることにしていますが、私たちは、世の偶像の神は実際にはないものであること、また、唯一の神以外には神は存在しないことを知っています。

しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんで来たため偶像にささげた肉として食べ、それで彼らのそのように弱い良心が汚れるのです。しかし、私たちを神に近づけるのは食物ではありません。食べなくても損にはならないし、食べても益にはなりません。

（Ⅰコリント8・4、7～8）

コロサイの集会の信者たちも、また同じような問題をかかえていました。

もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、「すぐるな。味わうな。さわるな。」というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば滅びる

ものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。

(コロサイ 2・20-22)

初代教会には偽教師がいて、パウロが正しい福音を伝えて歩いた後についてまわって、「すぎるな。味わるな。さわるな。」というような定めを説いてまわっていたようです。しかし、このような定めにこだわっている信者といえども、主によって新しく生まれることを体験した信者たちであり、主イエスが心から愛を注がれた信者たちであることにかわりありません。これらの信者の特徴は、「こんなことをすれば、主と私との間に何か隔たりが入り込むのではないか」と考え、恐れることでした。当時、彼らは全然肉を食べようとはしませんでした。というのも、もしかしたらその肉は偶像に捧げられたものだったかもしれないからです。

旧約聖書にでてくるダニエルとその友達は、王様のご馳走を食べずに、野菜だけを食べたいと思いました。しかし、このことは、ダニエルたちが、弱い信者であったということを示すのではなく、彼らの信仰と献身の証でした。

ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

「どうか十日間、しもべたちをためしてください。私たちに野菜を与えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。そのようにして、私たちの顔色と、王さまの食べるごちそうを食べている少年たちの顔色とを見比べて、あなたの見るところに従ってこのしもべたちを扱ってください。」

世話役は彼らのこの申し出を聞き入れて、十日間、彼らをためしてみた。十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。そこで世話役は、彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることにした。（ダニエル 1・8、12・16）

ダニエルたちとは異なり、この14章に出てくる信仰の弱い人は、いつも食べ物のことなどで不安におびやかされていました。

生きて動いているものはみな、あなたがたの食物である。緑の草と同じように、すべて（創世記 9・3）
のものをあなたがたに与えた。

聖書にはこう書かれていますが、ユダヤ人は民族的な慣習から、食べ物に関して特別な取り決めを持っていました。ペテロのような人であっても、この取り決めと律法から解放されることは、なかなか困難なことでした。使徒の働き10章をみると、ペテロが食べ物のことを心にかけていたために、即座に主の命令に従うことができなかったと記されています。

さて、それに対して強い人は、次のような確信を持っています。つまり、人は何を食べようともかまわない、食べ物人は人をけがさない、という確信です。レビ記11章1～8節には食べても良い生き物について記されていますが、これらは、もはや過去のものとなってしまった取り決めです。というのは、聖書に、キリストは律法の終りとなった、と書かれているからです。ローマ人

への手紙のメッセージは、律法はもうすでに廃棄され、私たちは主イエスにつくものとされたのだ、と私たちに述べています。

14章3節によれば、人間が陥りやすい二つの危険な状態があります。一つは弱い人についてのものであり、もう一つは強い人についてです。強い人は、弱い人が意味もないことにおびえているのを見て、彼らを軽蔑したり見下したりしてしまう危険性があります。また、弱い人は、強い人が何でも食べるのを見て、彼らをさばいたり、彼らの内面はけがれている、などと言ったりしてしまう危険性があります。強い人に対しても弱い人に対しても、一つの勧めが与えられています。それは、神はこの弱い人も強い人も同時に受け入れてくださっているのだから、お互いに信頼しあいなさいという勧めです。私たちは、同じ一つの恵みをいただいた者ですから、一つにすることができるのです。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんといいあわせ、なんと楽しいさである。

主がそこにとこしえのいのちの祝福を命じられたからである。

(詩篇133・1、3)

お互いの意見の相違は、主が一人一人を受け入れてくださったことを考えれば、取るに足りないことです。大切なことは、主に受け入れられているかどうかということです。兄弟が共に住むことはすばらしいことですが、それはまた、互いにさばきあうという危険性をはらんでいます。主の導きは個人的なものです。したがって、一人一人の意見にも当然相違があるでしょう。しか

し、この意見の相違は互いの一致を妨げるものではありません。もし、ある人が自分の信仰の基準をほかの人々にも当てはめようとするなら、自由な霊は失われ、他の人の良心が強制的に従わせられる、という結果になってしまいます。

生まれつき弱い体質を持った人、あるいは芯の弱い人に対しては、主はある制限を与えて彼らが墮落しないように守られます。一方信仰の強い人は、主から独特の個性を与えられており、そのような人はより大きな自由を享受することが許されているのです。たとえ、ほかの信者がいろいろな禁止条項を自分自身に課して生活していても、あるいは、全く自由な解放された生活を送っているとしても、それらに左右されることがないように、ただ自分自身の確信に従って歩むようにとパウロは語っています。

もし、ある信者が人間的な教えや取り決めに縛られて、ほかの人々の行いをさばくようなことがあれば、これはとんでもないことです。ところが、このローマの集会では、そのようなことは日常茶飯事だったようです。さらに、これはローマ以外のいろいろな集会でも見られた傾向であったようです。信者は、単に外面的なことがらで互いに争ったり、さばきあったりすることがあつてはなりません。

4～6節には、個人的な自由と責任が強調されています。信仰の本質とは関係ない枝葉のことがらに関して、主は一人一人の判断に任せてふさわしい自由を与えてくださいます。主は、一人一人の信者に対して、彼らが力強く、また守られた信仰生活を送ることができるようにしてくださるのです。

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

(ユダ 24・25)

誠実を尽くしている私を強くささえ、いつまでも、あなたの御顔の前に立たせてください。
い。

(詩篇 41・12)

主イエスは、私たちの生涯をあますところなく御自身の支配下にお治めになり、私たちを導き、歩ませてくださろうと思っておられるのです。

すべてのことからは、主のためになされるべきです。このローマ人への手紙14章で、パウロは何度となく「主のために」という表現を用いています。日をまもる人は主のためにそれをまもるべきであり、食べる人は主のためにそれを食べるべきです。しかし、ある特別な日だけでなく、毎日が主のためであるならば、このようなことは全く問題ではなくなります。こうして、人はほかの人々を軽蔑する危険性からまぬがれ、互いに尊敬しあうことができるようになります。たとえば、私たちがそれぞれに違った意見を持っているとしても、互いに交わりを持ち、一致を保ち続けることは可能なのです。

5節で使われている「確信」という言葉は、原文のギリシャ語によれば最上級の強い表現です。

つまり、徹底的に確信を持ちなさい、ということですよ。

彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。（コロサイ 4・12）

一人一人の信者は、自分自身の確信をしっかりと保ち、求めに応じてほかの人々にその確信を語ることができるように備えをしていなければなりません。互いに愛しあうこと、また、互いに高めあうことは、何よりも大切なことです。私たちが、すべてのことがらを主のために、そして主を愛するがゆえに行うこと、これが何よりも大切な点です。一人一人は、自分の行いを強制されてではなく、自発的になすべきです。ちょうどこれと反対のことがガラテヤ人への手紙に書いてあります。

律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。

ただこれだけをあなたがたから聞いておきたい。あなたがたが御霊を受けたのは、律法を行なったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるといいますか。

（ガラテヤ 5・4、3・21-3）

こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは、祭りや新月や安息日のこ

とについて、だれにもあなたがたを批評させてはなりません。これらは、次に来るものの影であって、本体はキリストにあるのです。

そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のききめもないのです。

(コロサイ 2・16～17、23)

ローマの信者たちは、たとえそれが粗末な食物であつても、例外なくすべてを感謝して食べたでしょう。彼らがこのようにしたのは主を愛するがゆえでしたから、このような信者たちを輕蔑したりしてはならないのです。また、自由に食べる信者たちもいました。彼らも感謝をもって主のためにそのようにしたので、彼らをさばくことも許されないので、全てを主のために、また、主を愛するがゆえに行うこと、これが全ての行いの根本です。

もし、あなたが主に仕え、主を愛そうとしているなら、ほかの人々の考えはそんなに大切なものではありません。私たちがあまり強くほかの人々の意見に左右されているならば、私たちは主のみこころを第一とする生活を行うことができません。私たちがいつでも、主はどのようなことを望んでおられるか、と考えて歩むならば、私たちの信仰生活はほかの人々の意見によつてたやすくぐらつくようなことにはなりません。私たちは、人生の旅路において道を見失うようなことはありません。それは、私たちには主の道が知らされているからです。主を見上げるることによつて、私たちに人生の目標が明らかにされます。一人一人の信者が主を見上げるならば、お互いに

意見のくいちがいがあつたとしても、互いの交わりと一致を保つことができます。

一致を保つための秘訣は、主イエスが中心にいてくださることです。主が私たちを引き離さないかぎり、私たちは互いに離されることがあつてはなりません。ある兄弟が、ある姉妹が、主によつて受け入れられているならば、私たちも彼や彼女を受け入れなければなりません。また、主が捨てられた信者とは、もはや交わりを持つことができません。みながすべてのことを主を愛するがゆえに行うなら、そこにはまことの一致が見いだされます。

私たちには、ほかの信者を侮つたりさばいたりする権利はありません。その権利は、主だけがお持ちになつています。ここで問題にされているのは、個々の罪の問題ではなく、信仰に立つた一人一人の律法についての認識です。今日もなお、律法を文字どおり行わなければならないかどうか、ということについてはつきりとした解決が必要です。

もし、私たちのうちに罪があるならば、その罪に対して下されている判断は明瞭です。その罪は即座に捨てられなければなりません。また、私たちは悔い改めない信者から離れなければなりません。しかし、信者一人一人がただ主の栄光だけを望んでいるならば、一人一人の意見のくいちがいは大きな問題とはなりません。確かに、ローマの集会でもこのようなことはそんなに大きな問題とはなりませんでした。パウロは７節で、「私たちの中でだれ一人として、自分のために生きている者はなく、」と言っています。これは、パウロの勧めではなく、事実です。

このように、あなたがたも、自分は罪に対しては死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあつて生きた者だと、思いなさい。

（ローマ 6・11）

信者はキリストの血潮によって贖われ、買い取られたのです。彼らは神の子とされました。主イエスのものとされたのです。主イエスは彼らを解放し、新しいいのちに歩むための力をお与えになりました。

また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

(Ⅱコリント 5・15)

あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現わしなさい。

(Ⅰコリント 6・19-20)

主が信者のすべてを支配しておられるなら、そのことは必然的に外に現れてきます。また8節には、もし死ぬのなら主のために死ぬのです、とさえ書かれています。死は例外なく訪れてくるものですが、信者はそれに対してもはや恐れをいさぐ必要はありません。死は信者にとってはむしろ益である、と聖書は語っています。死によって、信者は主のみとに行くことができるからです。主のみとに行くことは、主によって完全に満たされ、主の栄光を自分のものとするこ

とができるということです。

私たちの主は、主イエスですから、主の肢体である私たちが互いをさばきあうことがあつてはならないと、パウロは言っているのです。しかし、現実には信者の心の中には冷たい思いが潜んでいることがあります。だからこそ、主による完全な支配が必要です。もし、私たちが主の御光に照らされて、自分自身の心の状態をはつきりと見つめるなら、私たちはほかの信者をさばくようなことはできないということを知ります。主イエスはほかの人をさばいたり、軽蔑したりする信者を偽善者と呼んでおられます。

さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られるからです。

偽善者たち。まず自分の目から梁を取りのけなさい。そうすれば、はつきり見えて、兄弟の目からも、ちりを取り除くことができます。

（マタイ 7・11、2、5）

信仰によって主イエスを受け入れた人には、もはや未信者のようにさばきにあつたり、滅びたりすることがありません。しかし信者は、時が至れば主の栄光を現わしたかどうか、また、主によって実を結んだかどうかについて、主の前で弁明しなければなりません。パウロは信者に対して次のように祈りました。最後に、それを読んで終りにしたいと思います。

私は祈っています。あなたがたの愛が真の知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり、あなたがたが、真にすぐれたものを見分けることができるようになりますよう

に。またあなたがたが、キリストの日には純真で非難されるところがなく、キリスト・イエスによって与えられる義の実に満たされている者となり、神の御栄えと誉れが現わされますように。

(ピリピ 1・9～11)

「ハレルヤ。私は心を尽くして主に感謝しよう。(詩篇111・1)」大石美枝子さんとお父様の小松雄吉さん。



30 信者と主にある兄弟姉妹（2）

ローマ人への手紙

14章13節から23節まで

つまずきを与えない配慮と、確信の上に立ち続けること

I 生まれながらの性質

1 悔ること

2 さばくこと

3 つまずきを与えること

II 新しい性質

1 兄弟姉妹に対する愛

2 互いの平和と霊的成長を追い求めること

3 他人の良心を尊重すること

III 愛は自由よりも貴い

小ノ沢さん宅の家庭集会（磐田）にて。左から小ノ沢美根子さん、大石泰子さん、大嵐妙子さん、大石美枝子さん、古田康子さん。



前章では、集会の中で弱い信者と強い信者との間にどのような問題が起こりうるか、また、その問題の解決策はどうであるかということについて学びました。

この章では、引き続き信者と主にある兄弟姉妹との関係、特につまずきを与えない配慮と、確信の上に立ち続けることについて14章の後半から学んでみましょう。

¹³ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上¹⁴に、兄弟にとつて妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。主イエスにあつて、私が知り、また確信していることは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。¹⁵ただ、これは汚れていると認める人にとつては、それは汚れたものなのです。もし、食べ物¹⁶のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によつて行動しているではありません。キリスト¹⁷が代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物¹⁸のことで、滅ぼさないでください。ですから、あなたが良いとしている事がらによつて、そしられないようにしなさい。¹⁹なぜなら、神の国は飲み食いのことではなく、義と平和と聖霊による喜びだからです。このようにキリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々にも認められるのです。

²⁰そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。食べ物²¹のことで神のみわざを破壊してはいけません。すべての物はきよいのです。しかし、それを食べて人につまずきを与えるような人のばあいは、悪いのです。肉²²を食べず、ぶどう酒を飲まず、そのほか兄弟のつまずきになることをしない

のは良いことなのです。あなたの持っている信仰は、神の御前でそれを自分の信仰として保ちなさい。自分が、良いと認めていることによって、さばかれない人は幸福です。しかし、疑いを感じる人が食べるなら、罪に定められます。なぜなら、それが信仰から出ていないからです。信仰から出ていないことは、みな罪です。²²

（ローマ 14・13～23）

まず、この13～23節の内容を簡単に要約してみましょう。ローマの集会には、二種類の信者がいました。ある信者は昔から伝えられた宗教的な慣習に心を煩わされており、別の信者はそのような取り決めには支配されずに自由にふるまっていました。だれが模範的な行いをしているかということはそんなに大切なことではありません。私たちが、主を恐れる気持ちをもって主の前を歩み、自分自身を捨てて愛をもって生活することは、主によって与えられた自由を奔放に活用するよりもはるかにすぐれたことです。大切なのは、自分自身の良心の声に耳を傾けること、また同時に相手の良心も尊重することです。

ある青年が、どうしても映画に行きたいと思いましたが、そのことを知った母親はあまり嬉しく思いませんでした。そこで、その青年は映画に行くことを断念しました。お母さんがその理由を彼に尋ねますと、彼はローマ人への手紙の14章15節を示して答えました。

もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。

（ローマ 14・15）

この御言葉の「食べ物」のところにいろいろな言葉をあてはめて考えてみる事ができます。この青年は、映画という言葉を入れて考えたのでした。

確かに私たちが主に従うなら、もう以前のようにほかの人々の意見によって煩わされることがなくなります。もし、私たちがほかの人々の意見によっていちいち動揺するなら、私たちのうちにキリストの形が現わされることはありません。私たちは、主ご自身をこそ見つめるべきであり、他人の意見に左右されるべきではありません。このことは前回学んだとおりです。

これから学ぶ箇所は、一見すると前回の学びと正反対のことを語っているように思われるかもしれませんが。それは、これから学ぶ聖書の箇所に書かれているのは、私たちが他人につまづきを与えないためには、細やかな配慮が必要であり、他人を尊重する気持ちが大切だ、ということだからです。このことは前の章で学んだことと矛盾しているように思えるかもしれませんが。しかし、他人につまづきを与えないように配慮することは霊的な生活態度であり、ほかの人を導くためにはどうしても必要なことなのです。聖霊は、御言葉によって敏感になった私たちの心に語りかけて、神のみこころのとおりに導きたいと思っておられます。今までも繰り返し述べて来ましたが、私たちが互いの交わりの中には主がいてくださり、主の現れがみられなければなりません。私たちは生まれながらの性質をもっていますから、そのことに気を付けながらどのように振舞ったらいのかをいつもこころがけていなければなりません。そこで、まず、この生まれながらの性質から考えてみましょう。

I 生まれながらの性質

私たちのうちには生まれながらの性質があつて、それは3節によれば互いに侮りあう原因となり、10節によれば互いにさばきあう原因となつています。さらに、13節によれば互いにつまずきを与えあう原因ともなつています。このことは、多くの問題の出発点です。だれにでも自己中心の思いや、自分自身を判断の基準としてほかの人々を批判する傾向があります。聖霊は私たちが生まれつきのままで歩むことを望んでおられるのではなく、御霊の実を結ぶことを望んでおられるのです。8、10節には、そのための秘訣が記されています。キリストは一人一人の信者の主であり、キリストのみがさばく権利をもつておられます。

II 新しい性質

聖霊は、ここで三つのことを勧めています。

15節によれば、私たちは自分の兄弟姉妹に対して、全き愛を示さなければなりません。

19節によれば、私たちは平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めなさいと言われています。

さらに、22節によれば、ほかの人の良心に対する尊重の思いを持たなければならぬと書かれています。種々の困難や対立を克服するためのもっとも望ましい方法は、その困難に直面している当事者たちが共に主の采配のもとにおかれることです。主イエスの導きは個人的なものであり、一人一人異なっているでしょう。しかし、私たちは集会で一致を現わすべく努力しなければなら

ません。

パウロは14節でけがれている食べ物などない、と語っています。パウロはかつてはパリサイ人で、食べ物についてこれとはまったく違った考えを持っていました。ところが、主イエスに出会ったことによって、実に多くのことを新たに学んだのです。多くの困難や苦難を通してこれらのことを学ぶように導かれたのでした。新しく生まれた私たちも、みことばに示されるままに新たな思いを持たなければなりません。それ自体が汚れている食べ物など何一つありませんが、もしある兄弟が特定の食べ物についてけがれていると思っているなら、彼のためにそれを食べないことはふさわしいことです。言うまでもなく、それを食べると罪になると思っている人は、食べてはいけません。もし、人がその兄弟を愛しているなら、食べ物のような些細なことでその兄弟をつまずかせるようなことがあつてはいけません。当時のローマの集会では、このように食べ物のことについて問題がありました。パウロはそれについて、愛という一つの原則を示すことによって解答を与えています。次に、この愛の原則についてその意味を考えてみましょう。

Ⅲ 愛は自由よりも貴い

ギリシャ哲学によれば、物質には悪いもの、悪い性質があるという考えがあります。ところが、聖書には物質それ自体には悪いところも良いところもなく、問題なのはその用い方であり、それによつて良くも悪くもなるという考えが示されています。ですから、物質のことなどでほかの兄弟に対する思いやりや愛を失うようなことがあつてはならないのです。神を忘れ、兄弟姉妹を忘

れることによって、いわゆる唯物主義の萌芽が生まれました。この唯物主義、あるいは物質主義が、ときには資本主義によって利用され、また、社会主義によって利用されたりしますが、いずれも物質に目を奪われ、神を忘れてしまっている点で間違った出発点であると言えましょう。他人をさばこうとする態度は、本当に深刻な罪です。私たちがさばくことを許されているのは、自分自身だけです。

しかし、もし私たちが自分をさばくなら、さばかれることはありません。

（Ⅰコリント 11・31）

もちろん、愛のない態度、また自分中心の態度はさばかれざるを得ません。もし、私たちが自分で自分の欠点や罪に気付いてそれを捨てるなら、そのことによって彼は兄弟たちの喜びとなることができるでしょう。「あなたの目の中の梁をまず取り除きなさい。」と書いてあります。パウロ自身は強い信者の側に立っていました。

キリストが律法を終わらせられたので、信じる人はみな義と認められるのです。

（ローマ 10・4）

神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。神のことばと祈りによって、聖められるからです。

（Ⅰテモテ 4・4・5）

しかし、パウロは同時に、愛のゆえにあなたがたの自由を弱い信者をつまずかせるような場合には用いてはならないと語りました。たばこを吸うことや、酒を飲むことなどについても同じことが言えます。だれも自分の考えを他人に押しつけることは許されません。一人一人の信者は、ほかの兄弟姉妹が持っている確信について配慮することが必要なのです。

ですから、もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。

(Ⅰコリント 8・13)

パウロはどんな肉でも食べてもかまわない、ということを知ていましたが、肉を食べることがほかの兄弟のつまずきになるならその自由を用いない、と言っています。

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

(Ⅰヨハネ 3・16)

愛のゆえに自分の持っている自由を用いないということは、まさにこの御言葉の意味しているところです。主が私たちに対して赦しを与えてくださっているから、私たちには自由がある、ということだけではなく、私たちに、兄弟姉妹に対する愛があるかどうかということも問題です。というのは、主はその兄弟姉妹のためにもいのちを捨てられたほど愛を注いでおられるからです。私たちの行ないが兄弟をつまずかせることになるのなら、それはたいへんなざわいです。

17節には、神の国について書かれています。「神の国」とは、私たちの人生そのものを神が支配してくださることです。神の国は、外から与えられる法律や命令などによって造られるものではなく、私たちの徹底的な献身によってもたらされるものです。主イエスの愛が私たちを促して、私たちを神の国としてくださるのです。主が私たちの人生の支配者であることの証しは、私たちの平安と喜びです。アルコールを飲まない、肉を食べない、また流行を追わないなどということは、それ自体は徳でも善でもありません。けれども、私たちが神に対する愛、兄弟姉妹に対する愛からそれらを遠ざけるなら、それはよいことなのです。神が求めておられるのは、このように神に対する従順と隣人に対する自分を顧みない愛と、信者一人一人が主イエスに似たものとされることです。主イエスが、私たちを通して現わされることは、神が喜ばれることであり、また、主イエスを知らない人々が導かれる早道です。ここに書かれているような、食べるか食べないかというような枝葉の問題よりも、私たちが神に対する、また兄弟姉妹に対する愛をもって行動しているかどうかというの方がはるかに大切な問題です。意見の相違による対立が表沙汰にされるということは、信者がまだ靈的に未熟であるということの証しにほかなりません。これは私たちの平和と一致を妨げるものです。

主の囚人である私はあなたがたに勧めます。召されたあなたがたは、その召しにふさわしく歩みなさい。謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。

（エペソ 4・1―3）

自分を顧みない愛と、互いに祈りあうことを通して、私たちは兄弟姉妹の信仰を支えることができます、その兄弟姉妹の助けとなることができます。

兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことはありません。(Iヨハネ2・10)

キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のごことで、減ぼさないでください。
(ローマ14・15)

神は信者の内側に働きかけられます。神はその御言葉を通して私たちが自由なものであることを示してください。しかし、私たちがその自由を活用することによって、兄弟たちがつまずくなら、私たちはその兄弟のうちにある神のわざを減ぼしてしまうことになってしまいます。

信仰の強い人は、もろもろの宗教的な取り決めや慣習から解放されています。しかし、兄弟姉妹に愛を示すために自分の自由を差し控えなければならぬことは頻繁にあることでしょう。強い人は弱い人に対して心を配り、彼らがつまずかないように、また彼らの信仰を守り育てるように心がけなければなりません。

こういうわけで、あなたがたは、食べるにも、飲むにも、何をするにも、ただ神の栄光を現わすためにしなさい。ユダヤ人にも、ギリシヤ人にも、神の教会にも、つまずきを与えないようにしなさい。私も、人々が救われるために、自分の利益を求めず、多くの人の利益を求め、どんなことでも、みなの人を喜ばせているのですから。

これは、自分を顧みない神の愛にならった態度です。私たちには、大きな自由が与えられています。私たちが兄弟に対する愛のゆえにその自由に制約を加えるのはよいことです。神の愛は、私たちに王のようにだれにも束縛されない自由を与えています。しかし、この愛は同時にいつでも互いの間に平和と一致を保ちたいという望みをいだかせるものでもあります。私たちが互いに平和を保つことは、きわめて大切なことですが、そのためには私たちは自らが自分の持つ自由を制約を加えることが必要になります。それは、兄弟姉妹に対する愛のゆえのことであり、こうして互いに靈的に高めあうことが可能になります。

このことについての証しとして、具体的な例をお話ししましょう。最近私たちの集会の交わりに、一人のアルコール依存症の兄弟が加えられました。この兄弟が悔い改めの祈りをした次の日曜日から、集会では聖餐に用いるぶどう酒が、アルコールを含まないぶどう液に変えられましたが、これは、彼に対する主イエスの愛の現われでした。普通の人と異なり、この兄弟にとっては一口のぶどう酒は死を意味するからです。私たちにとつては、主の食卓にぶどう酒を用いるという習慣よりも、この兄弟が交わりに加えられるということの方が、はるかに大きな喜びでした。このことの後、この兄弟を通して、同じ病に悩む魂が何人も導かれ、主の救いの力を体験するようになったのです。私たちは、主からアルコールを禁じられたこの兄弟たちを受け入れることによって、私たちに与えられている主にある一致の大きな祝福に感謝することができました。

私たちが、愛のゆえに自分の持っている権利を断念するとき、神は大きな祝福を与えてくださいます。反対に、私たちが自分の自由のみを主張して、そこに愛が見られないときには、争い、さばき、軽蔑、分裂などがおこります。また、私たちの自由が信仰を伴わないとき、それは危険なものとなります。信仰とは、自分を主に捧げることによって、神との正しい関係に立つことを意味しています。私たちにとって大切なのは、あれやこれやのことがらが罪であるかどうかではなくて、私たちが本当に主に自らを捧げて仕えているかどうかなのです。

それぞれ自分の心の中で確信を持ちなさい。

(ローマ 14・5)

それでは、どのようにしたらこの確信を自分のものとすることができるのでしょうか。22、23節によると、私たちの行いが信仰から出ていなければそれは罪となる、と記されています。ですから、私たちのいろいろなことがらに対する判断は、主イエスとの結びつきのうちにくだされなければなりません。信仰の弱い人について、パウロは次のように言っています。信仰の弱い人は、もし自分の良心に何かとがめるものが感じられ、聖霊の導きによって完全な確信に達することができないなら、そういった良心の声に従わなければなりません。

私たちは、主に全く頼りきること、主に對して自分を徹底的に捧げることによって、このような確信を自分のものとすることができますようになります。このように、主との関係から出てこないものは罪です。そのようなものは自分の罪の結んだ実であると言えましょう。私たちは、十分に自分自身を吟味して、自分の思いによって行動するのではなく、主の思いによって行動するよ

うに注意しなければなりません。
神の御霊に導かれる人は、
だれでも神の子どもです。
(ローマ8・14)

「私たちは、平和に役立つこと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。(ローマ14・19)」
和田さん宅で。和田芳明さんと、共に働いている日本航空スチュワーデスのみなさん。



31 信者と主にある兄弟姉妹（3）

ローマ人への手紙

15章1節から13節まで

信者が主にある兄弟姉妹に対して取るべき態度

- 1 兄弟姉妹の弱さを担いなさい（1節）
- 2 兄弟姉妹の益をはかりなさい（2節）
- 3 兄弟姉妹に対する忍耐と励ましを持ちなさい（4節）
- 4 兄弟姉妹と共に心を一つにして神をほめたたえなさい（6節）
- 5 兄弟姉妹を受け入れなさい（7節）
- 6 兄弟姉妹のしもべとなりなさい（8節）
- 7 兄弟姉妹と共に喜び、平和、望みに満たされなさい（13節）

15章の前半である11-13節では、14章に続いて、信者と主にある兄弟姉妹の關係が書かれています。この部分の主題は、信者と兄弟姉妹、特に信者がその兄弟姉妹に対してとるべき態度、つまり、信者の間の關係についてです。この部分では、信者がその兄弟姉妹に対して、どのように具体的な愛の実践をなすべきなのか、そして、その愛の行為のもたらす結果は何であるかということについて書かれています。

私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。むしろ、「あなたをそしめる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。」と書いてあるとおりです。昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。どうか、忍耐とはげましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。

こういうわけですから、キリストが神の栄光のために、私たちを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れなさい。私は言います。キリストは、神の真理を現わすために、割礼のある者のしもべとなりました。それは先祖たちに与えられた約束を保証するためであり、また異邦人も、あわれみのゆえに、神をあがめるようになるため

す。こう書かれているとおりです。

¹⁰「それゆえ、私は異邦人のなかで、あなたをほめたたえ、あなたの御名をほめ歌おう。」
また、こうも言われています。

¹¹「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」
さらにまた、

¹²「すべての異邦人よ。主をほめよ。もろもろの国民よ。主をたたえよ。」
さらにまた、イザヤがこう言っています。

「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方である。異邦人はこの方に望みをかける。」

¹³どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもつて満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。
(ローマ15・1―13)

今日の学びの主題を要約しますと、「兄弟姉妹に対して忍耐を持ち、その弱さをにないなさい。主イエスはその模範を示された。」ということ です。私たちはこの15章を通して主イエスの思いが何であるか、また、聖霊に満たされた人の歩みがどのようなものであるか、ということについて学びます。この部分の御言葉から、その特徴を七つに分類してみることができま す。

1 節には、力のない人の弱さを担いなさい、とあります。

2 節には、兄弟姉妹のために生きることが書かれています。

4 節には、神から忍耐と励ましを頂いて生きると勧められています。

6 節には、兄弟姉妹が互いに心を一つにして神をほめたたえることが記されています。

7 節には、互いに受け入れなさいと書かれています。

8 節には、私たちが互いに仕えあうために主は私たちのしもべとなられた、とあります。

最後に13 節には、喜びと平和と望みに満たされるように、と勧められています。

私たちはすでに14 章で、信者の中には二種類の人々がいる、ということ学びました。つまり、それは信仰の弱い人と強い人のことでした。14 章19 節は、この両方にともにあてはまる御言葉です。

そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つこととを追い求めましょう。

（ローマ14・19）

この「私たち」とは、信仰の弱い人と強い人の両方について言われていることです。また、これに続いて、20～22 節の前半までは信仰の強い人のために記された御言葉であり、22 節の後半から23 節までは信仰の弱い人のために記された御言葉です。そして、私たちが学びたいと思っている15 章の1～7 節までは、特に信仰の強い人のための勧めとして書かれています。信仰の強い人は、神の前にその強さに応じた責任があります。パウロは、ここでただ単に信仰の弱い人と強い人が存在している、という事実を明らかにしているだけで、別に信仰の弱い人を非難したりさばいたりしているわけではありません。パウロは、その両者に対して同じように勧めをし、どのよ

うな態度をもって信仰生活を送ったらよいのかを教えてください。

あなたがたは信仰の弱い人を受け入れなさい。その意見をさばいてはいけません。

(ローマ14・1)

この世の中には、はっきりとイエスカノーかで答えられない問題があり、それらについては兄弟姉妹に対して深い思慮と愛をもって答えなければなりません。実際問題として、信仰の弱い人々はつまずきやすく、私たちは深い配慮をもってその人々に接することが要求されています。ここで言うイエスカノーかで簡単に答えることのできない問題とは、私たちの具体的な日常生活における態度に関するものです。多くの場合、これらは本質的な問題ではなく、枝葉のことであって、聖書が語っているような絶対に動かすことのできない真理そのものではありません。もし、そのような真理そのものに属するような大切なことがらが問題となっているのなら、私たちは愛にもとづいて兄弟姉妹たちにもはっきりとした態度で勧めをしなければなりません。そして、決して御言葉に反する態度を取ることは許されないので。

14・15章は、聖書の中の真理そのもの、つまり、罪と救い、私たちの希望と永遠のいのちなどについて焦点を当てて書かれているのではなく、信仰生活の実践的態度、つまり、食べること、飲むこと、聖日を守べきことなどについての細かい勧めです。しかし、特に15章には、私たちがこれらのことによって互いに傷つけあうことがあってはならない、というだけではなく、互いに同じ思いを持つことによって、主の栄光が現わされるようにとの勧めが書かれています。

注意しなければならないのは、パウロがここで信仰の弱い人々に対して教えさとしているのは、彼らがより高い霊的水準に引き上げられなければならないということではないということです。そうではなく、信仰の強い人が弱い人に対して忍耐と寛容とをしめすこと、そして、さらにそれだけではなく、実際にその弱さを担う者となりなさいと語っているのです。

主に対する正しい知識は、人間がほかの人に注ぎ込むことのできるようなものではありません。その人自身が自分で成長しなければならないのです。強い人の強さとは、その人が何を知っているかではなく、何を担うかという点にあります。強い人は、ちょうど羊飼いがその羊に対してするように、愛と知恵とをもって導かなければなりません。弱い人、また迷っている人を忍耐をもって正しい道へと立ち帰らせることができない信者は、決して強い信者ではありません。信仰の強い人とは、成長した信者、霊的な信者のことです。

兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。だれでも、りっぱでもない自分を何かりっぱでもあるかのように思うなら、自分を欺いているのです。おのおの自分の行いをよく調べてみなさい。そうすれば、誇れると思ったことも、ただ自分だけの誇りで、ほかの人に対して誇れることではないでしょう。人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷があるのです。

（ガラテヤ 6・1-5）

兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行うよう務めなさい。

(Ⅰテサロニケ5・12-15)

その人が本当に霊的な力をもっているかどうかは、その人がほかの信者の弱さを担うことができるかどうかに現われてきます。私たちが、同じ信仰に立つ兄弟姉妹の欠点に気づかされるとき、どのような態度をとるでしょうか。私たちはそれらの欠点をさばいたり、批判したりするでしょうか。あるいは、それらの欠点が正されることをあきらめて、どうしようもないとただ傍観するだけなのでしょうか。それとも、信仰の弱い人の欠点を覆い、その弱さを担うことによって、その人を立ち帰らせるでしょうか。

ペテロは、自分自身を強い信者だと思っていました。ですから、彼は、「みながつまずいても、私はつまずきません。」と自信をもって言ったのでした。しかし、早くもその晩に彼は、「主を知らない。」と三度も否んだのです。ペテロは、主イエスに私の羊を養うように、との命を受ける前に、まず彼自身が碎かれて謙遜なものとされなければならなかったのです。

私たち力のある者は、力のない人たちの弱さになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。
(ローマ 15・1)

しかし、多くの信者の場合には、このような態度が残念ながらあまり見られません。そのかわりに、高慢やうぬぼれなどのほうがはるかに見られやすいのです。聖書の真理について、ほかの兄弟よりも深い知識を持っていると自認している信者には、うぬぼれたり、ほかの信者を見下したりする危険性があります。

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知っていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思うことがないようにするためです。
(ローマ 11・25)

だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおののに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。

互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思つてはいけません。
(ローマ 12・3、16)

みこころにかなった信者は、自分自身を喜ばせるべきではありません。自分自身の欲望を追求め、名誉や名声を求めることがあつてはなりません。また、兄弟姉妹との交わりを持たずに、自分の考えだけで歩んで行こうとすることも、みこころにかなった歩みとは言えないでしょう。

私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。

(ローマ15・2)

私たちの持っているもの、つまり知識とか力とかは、兄弟姉妹の徳を高めるために神から与えられたものです。そのような知識や力がありながら、ほかの兄弟姉妹たちを不当に甘やかしたり、あえて対立を避けるために妥協して引き下がったりすることは、愛のゆえの行動というよりはむしろ、責任逃れであるといえましょう。私たちは、自分を通して兄弟姉妹に祝福をもたらしように召されているのです。私たちを通して兄弟姉妹が主とさらに深い交わりを持つようになり、兄弟姉妹と主とがさらに近づき、兄弟姉妹が妥協したりすることなく、喜びに満たされて信仰生活を歩むことができるようにと、主は私たちを用いられるのです。

それでは、一体私たちはどのようにして兄弟姉妹に奉仕することができましょうか。3節によれば、その模範は主イエスにあります。主イエスは「仕える者」となられ、ご自身のためにはなにもお求めにはならず、ただ神のみがあがめられ、神のみに栄光が帰されることを願い求められたのです。ですから「そしる人々のそしりは、わたしの上にふりかかった。」のです。主イエスが目指されたただ一つの目的は、信者が成長して神に栄光が帰されることでした。主イエスは自分の喜びや、名譽、富などとはまったく無関係なお方でした。その切なる願いは「父よ。あなたの御名があがめられますように。」ということでした。ですから「私は、自分の意志ではなく、私を遣わされた方の意志によって歩むのです。」と言われ、父なる神を喜ばせるためだけに生活

なさいました。

神のために生きること、また、神の栄光を求めることは、決してなまやさしいことではありません。神はご自分の民である私たち信者について、特別な関心を持っておられます。神が私たち信者一人一人をどれほど大切に思っていてくださるか、また、その一人一人を贖うためにどれほどの犠牲を払ってくださったかということを考えてみるなら、私たちが強い信者であるかそれとも弱い信者であるかということは、それほど決定的な問題ではありません。神は、私たち信者に対して最大の関心を持っておられます。ですから私たちが、兄弟姉妹を強いかに弱いに関係なく受け入れなければなりません。

主イエスは、すべての人々の弱さと罪と恥辱を担ってくださいました。これは、完全に自身を無にして、自分を犠牲にされた態度でした。私たちの歩むべき道もまた、この主が歩まれたと同じ態度です。私たちは、喜びをもって兄弟姉妹の弱さを担い、信仰の弱い人が成長するために益をはかるべきです。

オーケストラの演奏会が始まる前には、それぞれの演奏者は楽器の音の高さ（ピッチ）を一つに合わせます。私たちもまた、心一つにして同じ思いを持たなければ、神の栄光を現わすことはできません。4〜7節は、その同じ心を持つための標準として書かれました。4節で「昔書かれたもの」とありますが、これは旧約聖書を指しています。私たちにとって、旧約聖書はどのような意味を持つものでしょうか。旧約聖書は私たちを日々教え導き、忍耐と励ましと希望を与えてくれます。ここには、信者一人一人が成長して完全な者になってほしいという希望が記されて

います。私たちがこの希望に満たされるならば、私たちは同時に兄弟姉妹に対しても同じ希望を持つようになります。こうして私たちは、枝葉末節の問題よりもっと大切に本質的な問題があるのだということを知ります。

どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。

(ローマ 15・5)

神ご自身が、忍耐と励ましの神であります。ですから私たちは、神に絶対的な信頼を置くことが出来るのです。

主は岩。主のみわざは完全。まことに、主の道はみな正しい。主は真実の神で、偽りがなく、正しい方、直ぐな方である。

(申命記 32・4)

神はまた、励ましの神です。神は、私たちを強くし、力を与えることを望んでおられます。

また、神の栄光ある権能に従い、あらゆる力をもって強くされて、……

(コロサイ 1・11)

神の忍耐と励ましを体験することのできた信者は、兄弟姉妹に対しても忍耐と寛容をもって励ますことができるようになります。信者の集いは、霊による一致と愛に満たされなければなりません。

見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。
(詩篇 133・1)

もちろんここで言う兄弟姉妹の中には、強い人も、弱い人も含まれています。このような集いの中では、ねたみ心は追いやられ、互いに喜びを一つにし、重荷を担いあうことが見られます。主イエスのからだである教会には、分裂があつてはなりません。かえって、それぞれの器官はお互いに配慮しあうべきです。聖霊の一致と愛の一致があるところにのみ、心を一つに合わせた賛美によって、主の御名があがめられることが成就されます。

私とともに主をほめよ。共に、御名をあがめよう。

(詩篇 34・3)

ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。
(ヘブル 13・15)

意見の違いによって、信者は互いに分裂してはいけません。信者であれば、だれでも愛をもつて互いに受け入れあわなければなりません。枝葉の問題にとらわれるよりも大切な問題に目を向けましょう。信者の交わりの目的は、枝葉の問題に関して議論することではなく、共に心を一つにして、神を賛美することです。これはまた、救いの目的でもありました。私たちの救われた目的はここにあるのです。しかし、このことは、ただ自分自身を無にして、主の栄光を追い求める

ということによってのみ実現することが可能なのです。ですから、私たちは主イエスの模範を見て、主にふさわしく歩まなければなりません。

主イエスお一人が中心であり、いろいろな個性、多様性を持った信者の集会を一つに結び合わせることでできるお方です。主イエスはペテロに、「あなたはヨハネのようになりなさい。」とおっしゃいませんでした。同様に、主イエスはマリヤにむかつて「あなたはマルタのようになりなさい。」ともおっしゃらなかったのです。主イエスは、いつも変わりない愛をもって、だれに対しても同じ愛の心をもって心配してくださいました。また、信者の弟子たちの欠点を示さずにかえって、その欠点を覆ってくださいました。このことによって、弟子たちはお互いの意見の違いにもかかわらず、一致を保ち続けて行くことができたのです。兄弟姉妹が、心を一つにして声を合わせ、父なる神をはめたたえることが私たちの目的です。コーラスのなかには、いろいろのパートがあります。主なる神は、賛美が一本調子ではなく、互いに調和を保ちながら美しいハーモニーを奏でることを望んでおられます。信仰の弱い人も、強い人も、能力のある人も、ない人も、主への賛美のために一つ心になるべきです。主イエスは、正しい認識に欠ける信者たち、また疑惑の中にある人たちに、思いやりを示してくださいました。彼らを愛して、ご自分のいのちを捧げてくださいました。この心構えを私たちも持つべきです。

兄弟たちよ。もしだれかがあやまちに陥ったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。

（ガラテヤ 6・1-2）

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。世の富を持ちながら、兄弟が困っているのを見ても、あわれみの心を閉ざすような者に、どうして神の愛がとどまっているでしょう。

（Ⅰヨハネ 3・16-17）

お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。

（エペソ 4・32）

兄弟姉妹、一人一人は一致して神の御名をあがめるように努めなければなりません。7節に、「互いに受け入れあいなさい。」とありますが、これは私たちの交わりのなかで、互いに心を配りあいなさいということです。大切なのは、自分自身の満足を満たすことではなく、神ご自身が私たちの思いと行いとを支配してくださることです。このことによつてのみ、神が栄光をお受けになることができます。枝葉の問題は、問題ではありません。また、信仰の強い弱いもないしたことではありません。さらに、その兄弟が好感を持てるような兄弟かどうかに関係ありません。互いに受け入れあうこと、このことが一番大切なことです。互いに受け入れあうことは、私たちが主イエスの思いを自分のものとすることから始まらなければなりません。

8-13節には、信者がそれぞれ多様な賜物を持っているにもかかわらず、主イエスによって一致を保つことができる、と書かれています。主イエスは、ユダヤ人のためだけではなく、異邦人のためにも仕えるものとしてご自身を捧げてくださいました。そのことによって、ユダヤ人も異邦人もともに神の栄光をたたえるものとなりました。主イエスを受け入れた人は、ユダヤ人も異邦人も共に一つのものとされたのです。主イエスはまことのしもべでした。このしもべの強さは、神の前に謙遜に立つこと、また自分を無にして、兄弟を愛することによってあらわされました。まずはじめにキリストは、8節に書かれているように割礼のあるものしもべ、つまりユダヤ人のしもべとなりました。旧約時代に、神はイスラエル民族にメシヤを与えると約束されています。この約束がキリストでした。かつて神は、アブラハムにあなたの子孫を諸々の民族よりも祝福しようと言われましたが、この「子孫」とは主イエスのことでした。そしてアブラハムは、主イエスの救いを遙かに望み見て喜んだと聖書に書いてあります。

まことに、主のことは正しく、そのわざはことごとく真実である。

(詩篇33・4)

しかし、主イエスはただユダヤ民族だけに遣わされたのではなく、神から離れた全人類のためにも遣わされたのです。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ3・16)

主イエスが成し遂げられた救いにあずかったものは、この恵みをほめたたえるようになります。この恵みこそ、私たちの感謝が湧き出る泉です。旧約聖書の中でも、異邦人も神をほめたたえるようにと勧められています。パウロは、ここで旧約聖書から四カ所を引用しています。

第一の引用および第三の引用は、ダビデの詩篇からです。第二の引用は、モーセの言葉であり、最後の引用はイザヤの言葉です。この四つの引用はいずれも異邦人がユダヤ人と一緒に主をほめるように、ということが記されていますが、このことは、約束された平和の王国、すなわち来るべき千年王国で成就されます。そのときには、救い主イエスをイスラエル民族だけではなく、全世界がほめたたえるようになります。あなたは主イエスの救いを喜ぶ者とされているでしょうか。

この章を通して私たちは、あまり本質的でないもの、つまり枝葉の問題が私たちの間に対立を生み出し、互いに受け入れあうことを妨げていることを学んできました。本当に大切なのは、信者一人一人が互いに同じ心をもつようになり、共に主の栄光をほめたたえるようになることです。最後の13節は、私たちのために書かれています。もし私たちがほかの兄弟姉妹を主のゆえに心から受け入れるなら、私たち自身もここで書かれているように、喜びと平和と望みに満ち溢れるものとなるでしょう。ときとして私たちは、ある信者を見て、その兄弟姉妹が絶望的な状態に陥ってしまっていると思いがちですが、そのような兄弟姉妹のためにも主が約束されている恵みがある、ということをお忘れしまいがちではないでしょうか。神は、望みの神ですから、絶望することは決してないのです。この望みの神は、私たちをも、決して崩れさることのない恵みと望みに満たしてください。この喜びと平和と望みの源になるのは、聖霊ご自身です。聖霊が、

私たちを支配するなら、私たちは主イエスと同じ思いを持つようになります。そして、この主イエスの思いを持つ人は、決して自分の力で歩もうとしなくなります。聖霊によって支配されること、つまり、聖霊に満たされることは、この一致のための秘訣です。聖霊の力によって、私たちは互いに愛しあい、互いの弱さを担いあい、共に同じ心をもって神を賛美することができるようになります。人間の思い、自分自身の自我は、互いの交わりを断ち切り、分裂を引き起こします。人間は、ちょうどコップのようなものにたとえることができます。そのコップに何が満たされているかが大切だからです。ある人々は、その中に喜び、平和、寛容、謙遜、兄弟に仕えようとする態度を満たしています。また、ある人々は、高ぶり、不信仰、愛のない態度、絶望などを満たしています。聖霊の力は、今日もなお私たちに与えるに十分なものを持っています。聖霊は、主イエスに栄光を与えるものであり、その聖霊によって与えられる力により、私たちは主イエスのうちに隠されている神の富を見いだすのです。聖霊が私たちの目をはっきりと開いてくださって、私たちが神のうちに隠されている無尽蔵な富を見いだすことができるなら、本当に幸いです。

32 イエス・キリストのしもべ パウロ

ローマ人への手紙

15章14節から33節まで

I 真のしもべとは

1 道具

2 管

3 祭司

II しもべの務めとは

1 主のために生きることによって道具となる

2 従順に従うことによって管となる

3 神の平和に満たされて祭司となる

「キリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。(ローマ15・16)」上野亘さんご一家。



前回、私たちは15章13節までを学びましたが、ここまででローマ人への手紙の本文が終ったことになります。これから私たちが学ぶ15章14節から16章の終わりまでは、ローマ人への手紙の結びの部分にあたります。そして今回、私たちが学ぼうとしている箇所を表題は、「イエス・キリストのしもべパウロ」とすることができるよう。パウロはここで、彼の伝道の土台とその方法について語っています。パウロは、福音の真理を力強く語った後に、自分の個人的な意見を述べています。ですから私たちは、この箇所を通してパウロの個性についてよりよく知ることができます。もともこのことはそれほど重要なことではありませんが、それでも私たちはキリストの真のしもべがどのような人であったか、ということをよく知ることができ、聖霊がパウロの中にあつて、働いているのを目の当たりにすることができます。

¹⁴ 私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。¹⁵ ただ私が所々、かなり大胆に書いたのは、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうためでした。¹⁶ それも私が、異邦人のためにキリスト・イエスの仕え人となるために、神から恵みをいただいているからです。

私は神の福音をもって、祭司の務めを果しています。それは異邦人を、聖霊によって聖なるものとされた、神に受け入れられる供え物とするためです。¹⁷ それで、神に仕えることに關して、私はキリスト・イエスにあつて誇りを持つているのです。

¹⁸ 私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださった

こと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行ないにより、また、¹⁹しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によつて、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回つてイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。このように、私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。

²¹それは、こう書いてあるとおりです。

「彼のことを伝えられなかった人々が見るようになり、聞いたことのなかった人々が悟るようになる。」

²²そういうわけで、私は、あなたがたのところに行くのを幾度も妨げられましたが、今は、もうこの地方には私の働くべき所がなくなりましたし、また、イスパニヤに行くばあいは、あなたがたのところ²⁴に立ち寄ることを多年希望していましたので、——というのは、途中あなたがたに会い、まず、しばらくの間あなたがたとともにいて心を満たされてから、あなたがたに送られ、そこへ行きたいと望んでいるからです。——²⁵ですが、今は、聖徒たちに奉仕するためにエルサレムへ行こうとしています。

²⁶それは、マケドニヤとアカヤでは、喜んでエルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために献金することにしたからです。彼らは確かに喜んでそれをしたのですが、同時にまた、その人々に対してはその義務があるのです。異邦人は霊的なことでは、その人々から

もらいものをしたのですから、物質的な物をもって彼らに奉仕すべきです。それで、私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通つてイスパニヤに行くことにします。あなたがたのところに行くときは、キリストの満ちあふれる祝福をもつて行くことと信じています。

³⁰兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによつて、また、御霊の愛によつて切に願ひします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈つてください。私がユダヤにいる不信仰な人々から救ひ出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。³²その結果として、神のみこころにより、喜びをもつてあなたがたのところへ行き、あなたがたの中で、ともにいこいを得ることができすように。³³どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。

(ローマ 15・14-33)

パウロは、多くの苦難を経てキリストのしもべとなりました。そこで私たちは、二つの問いについて考えてみることにしましょう。

- I 真のしもべとはどのような人のことか
- II そのしもべの務めは何か

I 真のしもべとは

この問いに対してこの箇所から三つの答えを見つけることができます。つまり真のしもべとは、
1 神の道具であり、

2 管であり、

3 祭司であることです。

パウロは16節で、キリストのしもべとなる恵みについて語っています。恵みとは、人が努力によつて自分のものとすることができるものではなく、神からの贈物です。本来なら受ける資格と権利を持たないはずの者がそれを受けるということ、これこそが恵みです。パウロに与えられた恵みは、単に「救われる」だけではなく、キリストの「しもべ」となるためのものでした。私たちは、ここで自分自身に対して問いかけてみなければなりません。私たちはただ主キリストを信じるだけの者なのでしょうか。それとも、キリストのしもべなののでしょうか。もし、私たちが単にキリストを信じているだけなら、私たちに与えられた恵みは半分にすぎません。神ご自身が私たちの心の目を開いてくださり、私たちが悔い改めて主を信じるに至ったことは、確かに恵みによることでした。しかし、信者はやがて主イエスのしもべへと成長させられます。これこそ、恵みにほかなりません。これは重荷ではなく、特権です。

パウロは、神のしもべであり、また道具でした。道具は、それ自体に意味があるのではなく、その道具が誰の手に握られているかが大変重要です。パウロは神の道具でしたから、主イエスの手に握られ、主イエスの支配下におかれ、すべてを主イエスにゆだねたのでした。パウロの特徴は、主がおられなければ何一つ自分からはすることができないということでした。神の道具とな

ったパウロは、もはや自分自身に対してあまり関心を持たないようになりました。彼は、日々主に自分自身を全焼のいけにえとして捧げていたのです。

管の特徴は、主のために苦難を身に受ける備えをしているということです。また、彼は神に仕える祭司でしたから、主に仕えるとともに、人々にも仕えるものでした。祭司の第一の務めは祈ることです。パウロは30節に、祈ることは戦うことであると述べています。

これらのことについて、後でさらに詳しく考えてみたいと思いますが、ここで、第二の質問について簡単に考えてみましょう。

Ⅱ しもべの務めとは

パウロが信者たちに願ったことは、彼らが主のために生きることによって、パウロ自身と同じように主のしもべ、道具になることでした。パウロが主張しているのは、信者が罪を赦されるだけではなく、神の道具とならなければならないということです。人間は、単に神を信じるようになるだけではなく、神に対して従順になることが必要です。18節に「キリストが異邦人を従順にならせるために、この私を用いて成し遂げてくださった、…」と書いてあるとおりです。信仰の従順に至ることによって、信者は神の恵みをとつぐ管となり、神の証し人となり、世の光となることができるのです。パウロの願いは、人間が神と和解し、神との平和を持つだけではなく、人間が神の平和そのものとなることでした。神の平和が私たちの内側を完全に満たすとき、私たちは神によって立てられた祭司となります。かつて神を知らなかった異邦人は、福音に接するこ

とによって救われた信者となりました。その信者たちをパウロは祭司として神に捧げたのです。パウロは、彼らを神に受け入れられる供え物とすることを願いました。主を信じるということは、神に受け入れられ、みこころにかなうものになるための第一歩にすぎません。確かにパウロは、このように人々に勧め、願いましたが、この勧めは、まずパウロ自身が人々の前に模範となり、自分がすべてを捨てて神の御腕の中に自分自身をゆだねているのでなければ意味がありません。18節によれば、パウロは自分自身をまったく主にゆだねて、自分の思いではなく、ただ主の御力に寄り頼んで、伝道のわざを行ったことがわかります。

私は、キリストが異邦人を従順にならせるため、この私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かを話そうなどとはしません。キリストは、ことばと行いにより、また、しるしと不思議をなす力により、さらにまた、御霊の力によって、それを成し遂げてくださいました。その結果、私はエルサレムから始めて、ずっと回ってイルリコに至るまで、キリストの福音をくまなく伝えました。

(ローマ15・18-19)

神のしもべの力は、決して自分自身から出てくるものではありません。キリストがその人のなかで働かれて初めて現われるものです。パウロは、主イエスのしもべでしたから、自分自身を主イエスによって支配されるようにしました。彼が主によって多くの実を結んだ秘訣は、彼が主のしもべとして働いたということにあります。ぶどうのつるは、幹につながっていないければ実を結ぶことはできません。信者は主イエスによって支配されることによって初めて、主の前に価値のあ

るものとなるのです。

16、19節には、聖霊について書かれています。パウロが主に対して心から願っていたのは、神ご自身が彼のうちにあつて働かれることであり、聖霊が彼の心に語りかけることだけを語りたいということでした。彼は自分を無にしたからこそ、兄弟姉妹たちに、あなたがたも自分を神に受け入れられる供え物として捧げなさいと言うことができたのです。たとえ、どんなに大きな代償が要ることで、パウロは主が命ぜられることなら何でもその通りにしました。その結果、主のために多くの苦難を受け、困難を忍び、危険な事態に遭遇することになったのです。自分の安逸をむさぼることにたいして、きつぱりと背を向けることがパウロの人生態度でした。もちろん彼は主に従うことによつて多くの苦難に直面しなければならぬことをあらかじめ知っていました、それでもあえて主に従うことを選んだのです。ローマに行くことは、パウロの多年にわたる願いでしたが、これは彼の想像もしていなかったようなかたちで実現することになったのです。実際に彼がローマに行ったのはこの手紙を書いた後しばらくしてからで、しかも彼はローマに囚人として送られたのです。私たちが自分で立てる計画と、神の御計画とは何と違いがあることでしょう。

わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異なるからだ。——主の御告げ。——天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。

(イザヤ55・8―9)

聖書を見ると、パウロは自分のことをいつでも主の囚人であると言っています。ローマ帝国のネロの囚人だと言ったことは一度もありません。彼は、目に見える現実を見ないで目を遠くに向け、ただ主のみに目を留めていたのです。それは、ネロでさえも主イエスの許しなしにはパウロに何一つできないことをよく知っていたからでした。パウロは、囚人としての立場でありながら、主のために大きな働きをし、実に多くの実を結びました。彼は牢獄のなかで多くの手紙を執筆しました。ピリピ人への手紙によれば、彼は捕われの身でありながら多くの人を主に導き、ローマ皇帝の臣下にも主を信じる人々が生まれたと記されています。29節では、彼はローマの兄弟たちのもとへ行くときには、ありあまるほどのキリストの祝福を携えて行くと記しています。どうして彼はこのような確信を持っていたのでしょうか。それは、主イエスがパウロのうちにあり、また彼が主イエスのうちにあったからです。パウロは、自分自身はただ主が自由に働いてくださるための道具であり、管であり、祭司であるとわきまえていました。主イエスがご自身のしもべを通して自由に働かれ、そのしもべが主の中に隠されるようになれば、そこにはキリストにある満ち溢れるばかりの祝福が与えられます。

ローマの兄弟姉妹たちに対するパウロの願いは、彼らの持っている忠実さが成長し、いつそう熱心に主に仕えるように高められることでした。パウロの伝道はいつでも都市で行われました。そして、その都市で救われた信者たちの中から近隣の地方で伝道する兄弟姉妹が出るようにと望んでいました。そのようにして救われた信者に、彼らの身近にいる人々に対して負っている責任を示したのです。パウロは、救われた信者が一人一人個人的な主との交わりのうちに入り、自分

の身近にいる人々に対してどのようにふるまうべきかを聖霊によって示され、その責任を果たすようにと願っています。これこそ、まことの伝道のありかたです。

30節を見ると、パウロは、自分とともに神に祈るようにと兄弟姉妹に切に願っています。これを見てもパウロが自分自身に誇りをもっておらず、まことに謙遜に主に仕えていたということがわかります。彼は、ほかの兄弟姉妹の祈りの支えがなければ、何もできないということをよく知っていました。このようにして、キリストにある一つ一つの肢体が一つに結び合わされることになるのです。パウロは、ローマにいる信者たちとはそれまで一度も会ったことがありませんでしたが、この節を見ると彼には疑いの影もなく、確信に満ちています。主にあって彼らと一つであるということ、これを徹頭徹尾確信していたのです。ですから、近いうちに彼らと顔と顔を合わせて語りあうことは心からの喜びでした。

パウロにとってローマに行くことは長年の願いでした。しかしいつでもパウロは「もし主のみ心であれば」という態度をとっていました。私たちも、パウロと同じように、主の面前に静まり、主との交わりのうちに、御心について思いめぐらし、主の望んでおられることを知ることが許されています。パウロのように、ただ主の御心のみがなるように、そしてもし御心であれば、たとえ自分が望んでいないことであっても、主の示されるところに従うという態度をはっきりと持ち続けていたのです。

パウロの切なる願いは、ローマの信者たちが自分の命を捨てて主に仕える決意をし、人間に頼るような信者ではなく、ただ主により頼み、すべてを明け渡して、しっかりと歩むことのできる

信者となることでした。しかし、パウロにできたのは、彼ら一人一人が主とより深い交わりを持つようにと助けることができただけでした。主との深い交わりは、自分自身を神に仕える祭司として主に捧げることによって得られます。祭司の特徴は、神に対する責任をわきまえており、清い愛の心を持っているということです。パウロは皆が、毎日毎日自分自身を神に対する供え物として明け渡す生活をするをお願い、祈り求めていたのです。信者一人一人が生き生きとした証人として立てられることによって、福音のともし火を掲げて世を照らすようになるのです。

パウロは大変忙しく働いていましたし、彼の心はローマに行くことではいいましたが、それにも関わらず、彼はエルサレムにいる貧しい主にある兄弟姉妹たちのことを忘れてはいませんでした。彼はローマにいる信者に対して、エルサレムの困っている聖徒たちに物質的な援助をするようにと頼んでいます。これは単に金銭を送るというだけではなく、ローマの信者たちとエルサレムの信者たちが霊的な一致を持っていることの証しとして援助が行われることを求めているのです。喜んで捧げることが、真実の愛を証します。

私たち信者の人生の目的は、私たちを通して主イエスに栄光が捧げられ、世の人々に対して、とりわけ主にある兄弟姉妹に対して真実の愛を示すことです。信者は自分のためではなく、お互いのために生活すべきであり、同じ主にある一つの体の一部分として、互いに仕えあって生きるように、とパウロは勧めています。

30-31節からは、パウロが主にあって戦っていること、また主にある兄弟姉妹のことを心配していたことがわかります。この戦いの中で、彼は自分では何もすることができず、兄弟姉妹の祈

りを必要としていること、そして、彼と共に戦ってくれることを願っています。彼は、使徒として他人のために祈る立場にあっただけではなく、むしろへりくだってパウロ自身のためにも祈ってくれるように願い求めました。パウロはこのように祈りを必要としていた理由を二つ書いていますが、それは第一に、ユダヤにいる不信仰な人々の憎しみを免れるためでした。パウロは彼らに何度も殺されそうになったからです。第二に、エルサレムにいる聖徒たちのために彼は祈りを必要としていました。エルサレムのユダヤ人聖徒たちの中には律法に堅く縛られている人々がいました。彼らはもしかすると異邦人つまりユダヤ人以外からの供え物を受け取りたくない、という態度にでるかも知れなかったからです。これでは兄弟たちが、主にあって一つではないという証しになってしまいます。そして兄弟たちが一つになっていなければ、主イエスに栄光を帰することができません。ですからパウロはこれを心配し、祈るようにと求めたのでした。パウロは兄弟姉妹が単に言葉で祈るだけではなく、彼と共に戦うことを願っていますが、戦いとは一体何でしょうか。信仰の戦いは、暖かい部屋で静かに祈っているだけではなく、厳しいものです。あなたにとって祈りによって戦うとはいったい何を意味しているのでしょうか。私たちは、この戦いを自分の生活のうちに体験しているのでしょうか。

最後に、パウロは、「平和の神が、あなたがたすべてと共にいてくださいますように。」と書いています。この「平和の神」という表現は、新約聖書の中で何回も使われています。

平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。

(ローマ 16・20)

それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです。

(Ⅰコリント 14・33)

終わりに、兄弟たち。喜びなさい。完全な者になりなさい。慰めを受けなさい。一つ心になりなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。

(Ⅱコリント 13・11)

あなたがたが私から学び、受け、聞き、また見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神があなたがたとともにいてくださいます。

(ピリピ 4・9)

平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだ^がが完全に守られますように。

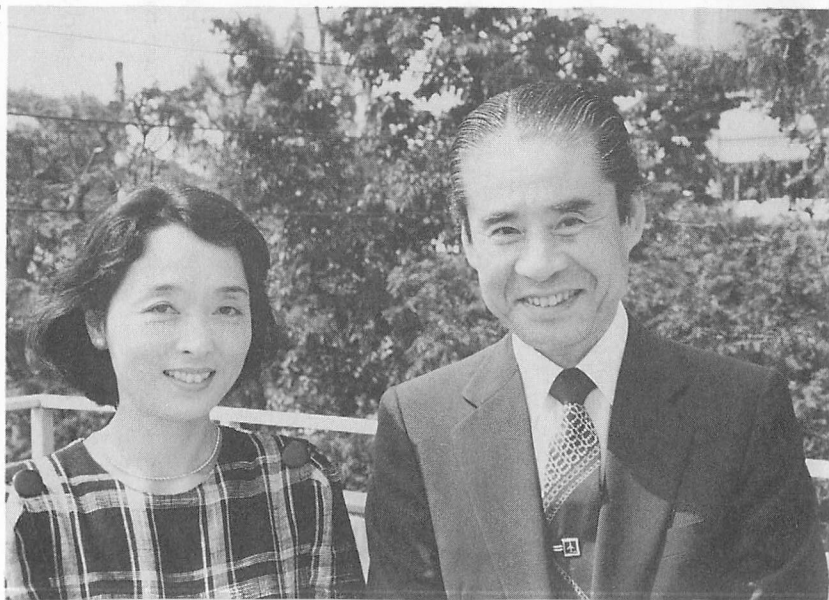
(Ⅰテサロニケ 5・23)

永遠の契約の血による羊の大牧者、私たちの主イエスを死者の中から導き出された平和の神^が…

(ヘブル 13・20)

私たちは今や神との平和を持っています。しかし、この平和の神ご自身が私たちと共にいてく

ださることも必要です。神との平和を得ているだけではなく、この闇の世にあつて、神の平和を自分の中に持つものとならなければなりません。そのようにして、私たちはお互いに喜びあい、また憩いをえることができます。信者たちが互いに真実の愛をもつて仕えあうなら、そこには平和の神が共にいてくださいます。



「私はキリスト・イエスにあつて誇りを持つてゐるのです。(ローマ15・17)」
大場光跡さん・絃子さんご夫妻。

33 パウロの個人的なあいさつ

ローマ人への手紙

16章1節から16節まで

ローマの集会における聖霊の働き

I 命を捧げた、兄弟姉妹のための生活

II 忠実・誠実・練達の生活

III 自分を虚しくした、主の証しのための生活

「愛する者たち。私たちは、互いに愛し合いましょう。愛は神から出ているのです。

愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。(1ヨハネ4・7)」豊里光子さんをお見舞いする方々。



この章の主題は、ローマにある集会に対するパウロの個人的なあいさつです。私たちは16章を通して、パウロがどのような境遇におかれていたかを思い浮かべることができます。23節によれば、パウロは友人のガイオのもとで生活していたことがわかりますし、またその前の22節によれば、パウロ自身がこのローマ人への手紙を筆記したのではなく、テルテオに口述したこともわかります。おそらく彼らは朝早くから夜までかかってこの手紙を書き上げたのでしょう。

このときの状況を想像してみますと、ガイオはパウロの様子を見に部屋に入ってきたのかも知れません。あるいは、パウロの同労者テモテが、家庭訪問から帰ってきたところで、また、ちょうどそこへ、市の収入役エラストとクワルトが訪問してきたのかも知れません。そこでパウロは、彼の手紙の結びのことはを手短かに付け加えたのでしょう。けれども、このローマ人への手紙の結びの言葉は決して単なる付録ではなく、非常に重要な意味を持っています。

この結びの言葉は、聖霊の導きのもとで書かれました。それ故、1-16節に書かれた一人一人へのあいさつは、決してパウロの個人的な判断によるものではなく、聖霊の判断によるものです。これらあいさつの箇所を通して、主は、私たちにみこころを告げようとされているのです。したがって、ここに記されていることは、神、また、聖霊ご自身が、それぞれの信者に対して判断されたことなのです。この言葉は、私たちに勧めと励ましを与えてくれます。

ケンクレヤにある教会の執事で、私たちの姉妹であるフィベを、あなたがたに推薦します。どうぞ、聖徒にふさわしいしかたで、主にあってこの人を歓迎し、あなたがたの助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。この人は、多くの人を助け、

また私自身をも助けてくれた人です。

キリスト・イエスにあつて私の同労者であるプリスカとアクラによりしく伝えてください。この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。またその家の教会によりしく伝えてください。

私の愛するエパネトによりしく。この人はアジヤでキリストを信じた最初の人です。

あなたがたのために非常に労苦したマリヤによりしく。

私の同国人で私といっしょに投獄されたことのある、アンドロニコとユニアスにもよろしく。この人々は使徒たちの間によく知られている人々で、また私より先にキリストにある者となったのです。

主にあつて私の愛するアムブリアトによりしく。

キリストにあつて私たちの同労者であるウルバノと、私の愛するスタキスとによりしく。キリストにあつて練達したアペレによりしく。

アリストプロの家の人たちによりしく。

私の同国人ヘロデオンによりしく。

ナルキノの家の主にある人たちによりしく。

主にあつて労している、ツルパナとツルボサによりしく。

主にあつて非常に労苦した愛するペルシスによりしく。

¹³ 主にあって選ばれた人ルポスによろしく。また彼と私との母によろしく。

¹⁴ アスンクリト、フレゴン、ヘルメス、パトロバ、ヘルマスおよびその人たちといっしょにいる兄弟たちによろしく。

¹⁵ フィロゴとユリヤ、ネレオとその姉妹、オルンパおよびその人たちといっしょにいるすべての聖徒たちによろしく。

¹⁶ あなたがたは聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。キリストの教会はみな、あなたがたによろしくと言っています。

(ローマ 16・1-16)

前の章で私たちは、ローマ人への手紙15章14-33節を通して、聖霊がパウロにどのように働いてくださったかについて学びましたが、この章では、聖霊が当時の集会の一人一人の信者にどのように働かれたかを学んでみたいと思います。パウロの生涯を通して、私たちはパウロの内において働かれた主イエスのみこころを知ることができですが、その同じ聖霊が、当時のローマの教会に属する兄弟姉妹一人一人に、与えられていたのです。聖霊は、ローマの信者たちに三種類の形で働かれました。

第一は、他の人々のために生きることであり、そのためには、自分自身の命をも捧げる用意があったということです。

第二は、真実な生き方です。それは、心を尽くして主の御業に励み、主の御業に練達した者となることを意味しています。

第三に、聖霊は、彼らに証しの生涯を与えました。それは自分を無にして主に仕えることを意味しています。

16章のこれらのあいさつの言葉を通して、パウロが一人一人の信者といかに強い心の結び付きを持っていたかがわかります。それでは、ここに記されている一人一人の兄弟姉妹に対して簡単に学んでみましょう。

1・2節には、フィベという姉妹について書かれています。彼女の特徴は、他人のために生きるということでした。この姉妹はギリシャ語で「ディアコノス」という立場にありました。このギリシャ語から「ディアコニッセ」というドイツ語が生まれました。「ディアコニッセ」とは、埃まみれになって働く、という意味です。このフィベはコリント市の港町である、ケンクレヤ教会の僕でした。彼女が一体どのようにして主に仕えていたかはわかりません。姉妹たちの奉仕の主なもの、人々をもてなすとか、病人を看護するとか、貧しい人々をいたわることなどの愛をもとにした奉仕でした。初代教会において、導いたり教えたりする奉仕は普通兄弟の勤めでした。ところが、神御自身が、例外をお作りになりました。主ご自身が、しばしば、姉妹のくちびるによる奉仕を必要とされたので、いつの時代にも、女預言者というものがあつたのです。

アロンの姉、女預言者ミリヤムはタンバリンを手に取り、女たちもみなタンバリンを持つて、踊りながら彼女について出て来た。ミリヤムは人々に答えて歌った。「主に向かつて歌え。主は輝かしくも勝利を収められ、馬と乗り手とを海の中に投げ込まれた。」

(出エジプト15・20・21)

そのころ、ラピドテの妻で女預言者デボラがイスラエルをさばいていた。彼女はエフラ
イムの山地のラマとベテルとの間にあるデボラのなつめやしの木の下にいつもすわってい
たので、イスラエル人は彼女のところに登って来て、さばきを受けた。(士師 4・4-5)

農民は絶えた。イスラエルに絶えた。私、デボラが立ち、イスラエルに母として立つま
では。
(士師 5・7)

また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年
をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四
歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもつて神に仕えていた。ち
ょうどこのとき、彼女もそこにいて、神に感謝をささげ、そして、エルサレムの贖いを待
ち望んでいるすべての人々に、この幼子のことを語った。
(ルカ 2・36-38)

聖霊は、このフィベについて素晴らしい推薦状を書きました。残念ながら、このように信者に
ついて推薦状を書くことは、今日一般にキリスト教会の間ではすたれてしまっています。今でも
この習慣を守っているのは集会の間だけです。いわゆる教会には、会員制度と教会籍の制度があ
るだけで、信者が移転するとその教会籍を抜いたり入れたりするだけです。この教会籍を持つた
めの条件として、人々は洗礼を受けます。このため、多くの人々が悔い改めなしに洗礼を受けた

り、信仰を持たずに教会の会員となります。そして、いつ、だれによって受洗したか、ということが必要以上に重要視されるのです。

聖書に書かれている推薦状には、洗礼の問題は、決して重要視されていません。そのかわりに、彼らが信仰に入ったあとと真実を持って主に仕え、主との生き生きとした交わりをその行いによって証ししてきたかどうかの問題とされているのです。フィベは単に洗礼を受けた信者であるというだけではなく、その生活を通して主イエスとの親しい交わりを証ししていました。

このあいさつの箇所には、フィベの他にも多くの姉妹の名前が書かれています。プリスカ（3節）、マリヤ（6節）、ユニアス（7節）、ツルパナ、ツルポサ、ペルシス（12節）、ルポスの母（13節）などです。このことは重要です。それは、この女性たちが福音の勝利を証ししているからです。

当時の女性が置かれていた社会的立場は、今日とは比較にならないほど低いものでした。当時の律法学者とパリサイ人たちは、自分たちの尊厳を守るために決して女性と話そうとはしませんでした。しかし、この16章に書かれていることはそれとは全く対照的です。パウロは、ローマの集会にこのフィベを心からの愛をもって歓迎し、どのような助力をも惜しまないようにと書き送っています。ここで大切なことは、人間的な魅力ではなく、その人が主にある兄弟姉妹であることです。多分、このフィベがパウロの書いたローマ人への手紙を携えてローマにいったのでしょう。当時は、もちろん新幹線などという便利なものではなく、ローマへの旅行は大変な困難と危険を伴いました。女性の場合にはなおさらそうだったでしょう。パウロはこのフィベについて、

「助けを必要とすることは、どんなことでも助けてあげてください。(2節)」と書いたのです。人が新しく生まれ変わったことの証拠は、兄弟姉妹に対するいつも変わらない愛です。パウロはフィベについて、「この人は、多くの人を助け、また私自身をも助けてくれた人です。(2節)」と書きました。つまり、フィベは愛を持ってパウロを助け、守り、また心配したのです。フィベの生活は、他の人々のために心を配り、他の兄弟姉妹に対して益を計るものでした。フィベが兄弟姉妹のことを心配し、彼らのために働いたのは、キリストによって新しくされた性質が現れたためです。主は、私たちに対してフィベのような生き方、すなわち、他の人々を助け、他の人々のために心を砕く生き方を望んでおられます。

3節から5節には、プリスカとアクラについて書かれています。この夫婦は自分自身を捧げて主に仕えており、主のためには自分自身の命をも捨てる用意がありました。ここで注意すべきことは、妻の名前が先に書かれていることです。このことは、プリスカのほうが夫よりも熱心で、重要な働きをしていたことを表しています。パウロは、別にレディー・ファーストのつもりでプリスカの名前を先に書いたのではなく、プリスカが、主によって大切な働きをしていたから先に書いたのです。これは聖霊の価値判断でした。すなわち、聖霊がそれを適当と判断されたのです。使徒の働き18章1〜3節には、彼らがユダヤ人であるがゆえに、ローマ皇帝クラウドによってローマから追放されたと書かれています。

その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスカに出会った。クラウド帝が、すべてのユダヤ人

をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリヤから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、自分も同業者であつたので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであつた。

(使徒18・1-3)

彼らはローマからコリントに行き、そこで第2回目の伝道旅行でコリントに來たパウロに出会つたのです。彼らはパウロと同じ天幕作りでしたから、パウロを家に迎え入れ、ともに働いたのです。パウロは行く先々で福音を語りました。そのようにしてプリスカとアクラは福音を聞き、コリントの集会の最初の信者となつたのです。パウロは、この夫婦を伴つてコリントを去り、エペソに行きました。ここで彼らがパウロの伝道のための準備をしたことがうかがえます。ある日には神の言葉を宣べ伝えていたアポロという人に出会いました。彼らはたちまち、このアポロには最も大切なものが欠けていることに気づきました。そこでプリスカとアクラはアポロに救いの道を説き、十字架の意味や主の復活について教えました。こうしてアポロは主の救いを自分のものとすることができ、聖霊の宮となることができました。

さて、アレキサンドリヤの生まれで、雄弁なアポロというユダヤ人がエペソに來た。彼は聖書に通じていた。この人は、主の道の教えを受け、靈に燃えて、イエスのことを正確に語り、また教えていたが、ただヨハネのバプテスマしか知らなかつた。彼は会堂で大胆に話し始めた。それを聞いていたプリスカとアクラは、彼を招き入れて、神の道をもつと正確に彼に説明した。そして、アポロがアカヤへ渡りたいと思つていたので、兄弟たち

は彼を励まし、その弟子たちに、彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。彼はそこに着くと、すでに恵みによって信者になっていた人たちを大いに助けた。彼は聖書によって、イエスがキリストであることを証明して、力強く、公然とユダヤ人たちを論破したからである。

(使徒 18・24-28)

エペソにはプリスキラとアクラの家があり、そこで彼らは集会を持っていたことがわかります。アジアの諸教会がよろしくと言っています。アクラとプリスカ、また彼らの家の教会が主にあつて心から、あなたがたによろしくと言っています。

(Ⅰコリント 16・19)

エペソにおいてパウロは、銀細工人たちによって、生命の危険にさらされました。

もし、私が人間的な動機から、エペソで獣と戦ったのなら、何の益があるでしょう。

(Ⅰコリント 15・32)

兄弟たちよ。私たちがアジアで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。(Ⅱコリント 1・8-9)

このことでパウロは、銀細工人たちを獣という言葉で表現したのでしよう。このように、パウロが命の危険にさらされているとき、プリスカとアクラは自分たちの命をもかえりみないで、パウロを危険から救いだしたのです。このあと、プリスカとアクラは再びローマに移り住みました。そこでも同じように彼らは一軒の家を買い、集会を持ちました。そこには、いろいろな人々が入りし、多くの人が福音を聞いたのです。

やがてパウロが囚人としてローマに到着した時には、プリスカとアクラはもはやローマにおらず、再びエペソに移っていました。その時プリスカとアクラは、テモテとともに集会の責任者でした。パウロは彼らを、「私の同労者」(3節)と呼んでいます。主イエスに対する愛のゆえに、彼らは住む場所を何度も移りました。それは、兄弟姉妹の益のためになされたことでした。彼らの基本的な態度は、兄弟姉妹のために命を捧げて仕えることでした。

彼らは、他の人々を助けるために用いられていただけではなく、その命をも捧げる用意がありました。「私たちは、死ななければならないのでしたら死にます。」というのが彼らの決意でした。パウロは彼らについて4節で、「この人たちには、私だけではなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。」と書いています。ここでは、ユダヤ人と異邦人の区別はもはやなくなっています。兄弟姉妹のために命を捨てる用意のある信者を、主は今日でも必要とされています。

次に、エパネトについて学んでみましょう。この人については5節に、「アジアでキリストを信じた最初の人」と書かれています。彼の信仰は一時的なものではありませんでした。何十年という長い間、主に忠実に従ったのです。おそらく彼は、彼の集会にあって、大黒柱のような存在

であつたと思われます。パウロは、彼のことを、「私の愛するエパネト」と呼びかけています。おそらく彼は、プリスカとアクラのもとで仕事をしていた、彼らとともにローマにやって来たのでしょう。マリヤについては、エパネトと同様プリスカとアクラのもとで働いていたか、あるいは乳母のような者であつたと考えられています。パウロは、彼女についてすばらしい一節を書き記しました。6節で彼女は、主にあつて「あなたがたのために非常に労苦した」と書かれています。彼女は本当に一生懸命、主に仕えました。

アンドロニコとユニアスは、ともに使徒でした。新改訳聖書によると、彼らは使徒ではなかつたと誤読されてしまう危険があるのですが、実際には、彼らは使徒として人々の間によく知られていました。彼らは使徒でしたから、特別な召しを受け、主によって遣わされ、福音を証したのです。彼らは、パウロとともに投獄された経験を持っていました。それがいつどこであつたかは記されていません。使徒の働きには、パウロが体験したすべてが書かれているわけではありません。後の時代にローマの教父であつたクレメンスは、パウロは七回投獄されたと書いています。アンドロニコとユニアスは、イエス・キリストの名のゆえに投獄される用意がありました。彼らの心は主のために燃えていましたから、心から主に仕え、未信者のために努力したのです。アムプリアトも、聖霊によってパウロの愛するものとなつたことが証されています。(8節)これは、彼が心から信頼するに足る人物であつたことを示しています。主イエスによって、パウロとアムプリアトの心は深く結び付けられていました。

ウルバノは、パウロの同労者であると書かれています。このことから、パウロは主にあつて、

この兄弟と心をつにしていたことがわかります。

スタキスもまた、パウロの愛するものであると書かれています。パウロは、この兄弟についてどんなにか大きな愛と喜びをもつて思い浮かべていたことでしょう。

アペレは、「練達した者」と呼ばれています。キリストにあつて練達した者であるということはずばらしい証しです。「練達した」とは、試験済みの、という意味であり、アペレは様々の試練を経て「練達した」者と呼ばれるようになりました。彼はいろいろな誘惑の中にあつて、はつきりとした態度を取り続けて来たのです。その当時、信仰のゆえに死の危険にさらされるといふことは、決して珍しいことではありませんでした。にもかかわらず、アペレは主に対する信仰を堅く守り続けてきたのです。アペレは、迫害に対する態度の点でも、自己を捨てて人を愛する点でも、謙遜さでも、真実さでも、主に対する熱心の点でも、そして、忠実さにおいても練達した者でした。

また、10節には、「アリストブロの家の人たちよろしく」と書かれています。このアリストブロとは、おそらくヘロデ王の孫で詩人としてローマで私的生活を営んでいた人であろうと言われています。パウロが直接アリストブロにあいさつを送っていないのは、彼が未信者であったか、あるいは既に亡くなっていたかのいずれかであったためと思われる。しかし彼の家に仕えていた人たちの何人かは主を信じる人たちであったため、パウロは喜んであいさつを送ったのです。

11節には、ヘロデオンの名前があげられています。パウロは、祈りの中に彼を覚え、彼にあいさつを送りました。また、ナルキソの家の人たちの中にも主を信じる人たちが生まれました。こ

こでも、ナルキソ自身には、直接にあいさつが送られていません。これは、アリストプロの場合と同様に、彼が未信者であったか、あるいは既に亡くなっていたかのどちらかであったことを示しています。ここで、「家の人たち」と書かれている人々は、おそらくその家に仕える奴隷だったのでしょう。彼らは、その立場にもかかわらず、福音を聞いて自分から主を受け入れ、信者となったのでした。

次に、二人の姉妹、ツルパナとツルボサの名前があげられています。彼女らは、自分自身を擡げて、主のみに仕えようという決意を持った人々でした。また、ペルシスも愛されている姉妹であると書かれています。彼女もまた「主にあつて非常に労苦した」というすばらしい証しを受けています。

以上に述べましたように、ここには本当に多くの兄弟とともに多くの姉妹の名前があげられています。今日多くの姉妹方は、家庭の仕事以外の仕事をすることは難しいと考えておられるのではないのでしょうか。また、救われていない身近な人々に対する責任を真剣に考えず、自分をも主が用いようとされていることに気がついていない方が少なからずいらっしゃるのではないのでしょうか。自分のことだけを考え、自己中心的に生きることを主はだれにも許しておられません。ペルシスは、家事だけに埋没してしまうことはありませんでした。また、彼女は自分の属する集会の事柄だけに目を向けるのでもありませんでした。彼女の主によって働く愛の心は、他の地方に住んでいる信者に対しても向けられていました。

次のルボスについてはマルコによる福音書に次のように書かれています。

そこへ、アレキサンデルとルボスとの父で、シモンというクレネ人が、いなかから出て来て通りかかったので、彼らはイエスの十字架を、むりやりに彼に背負わせた。

(マルコ 15・21)

このようにして、ルボスの父は十字架を担うものとなったのです。ルボスの父が十字架を担うことによって、その子のルボスもまた、主の祝福にあずかる者となりました。彼の母もまた模範的な信者でした。その母についてパウロは13節に、「彼と私との母」と書いています。彼女は実の母のようにパウロのことを心配し、面倒をみたのに違いありません。パウロは、このことについて心から喜び、こうして彼女を實の母とまで思うようになったのでしょうか。

16章14―15節には、人々の名前が二つのグループに分けて書かれています。この人たちは、おそらく別々の家庭集會に集っていた人たちであろうと思われます。当時のローマでは、いろいろな場所で集會が持たれていました。これらのすべての信者たちは、ともにローマの集會に属する人々でしたが、彼らは同時にいろいろな場所で家庭集會を持っていました。主に対する忠実な思いが、彼らに自分の近くにいる人々に対する責任を感じさせたのです。16節には、「聖なる口づけをもって互いのあいさつをかわしなさい。」と書かれています。新約聖書の中には、この「聖なる口づけ」という言葉が、五度書かれています。

すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをなさい。(1テサロニケ 5・26)

すべての兄弟たちが、あなたがたによりしくと言っています。聖なる口づけをもって、互いにあいさつをかわしなさい。

(Ⅰコリント 16・20)

聖なる口づけをもって、互いにあいさつをかわしなさい。すべての聖徒たちが、あなたがたによりしくと言っています。

(Ⅱコリント 13・12)

愛の口づけをもって互いにあいさつをかわしなさい。キリストにあるあなたがたすべての者に、平安がありますように。

(Ⅰペテロ 5・14)

「互いに口づけをかわす」ことは、その当時一般に行なわれていたあいさつでした。パウロは民族の習慣を一概に無益なものとして捨て去ろうとはしませんでした。彼はそれらの習慣に対してより深い霊的な意味付けを与えました。それゆえ、パウロは単なる「口づけ」ではなく「聖なる口づけ」という表現を用いたのです。「聖なる」ということは「主に属する」、また「主のゆえに行なう」という意味です。それは、単なる儀礼的な態度ではなく、真心からの兄弟愛の表われでした。この節を通して、私たちは信者が互いに持っていたつながりを知ることができます。これは決して人間的なつながりではなく、聖霊によって一つにされた人々のつながりでした。

最後にパウロは、「キリストの教会はみな、あなたがたによりしくと言っています。」と書き記しました。彼らは、まだお互いに面識はありませんでしたが、「主によって一つの体である」と

いうことをよく知っていたからです。

ここまで私たちは、当時の集会とその集会に属する信者たちがどのような状態にあったかを学んできました。私たちは彼らについて学んだ後で、自分自身について考えると恥ずかしい気持ちにならざるをえません。私たちもまた、彼らに習って自分自身の命を捧げて、兄弟姉妹のために生きる者になりたいものです。

「幸いなことよ。あなたが選び、近寄せられた人、あなたの大庭に住むその人は。《詩篇65・4》」
主イエスによる救いを体験し「最も幸いな子になった」と証しする小川幸子さん。



34 警告・奨励・賛美

ローマ人への手紙

16章17節から27節まで

I 警告

- 1 分裂を引き起こす人たちについて
- 2 自分の欲に仕えている人たちについて
- 3 信者を惑わす人たちについて

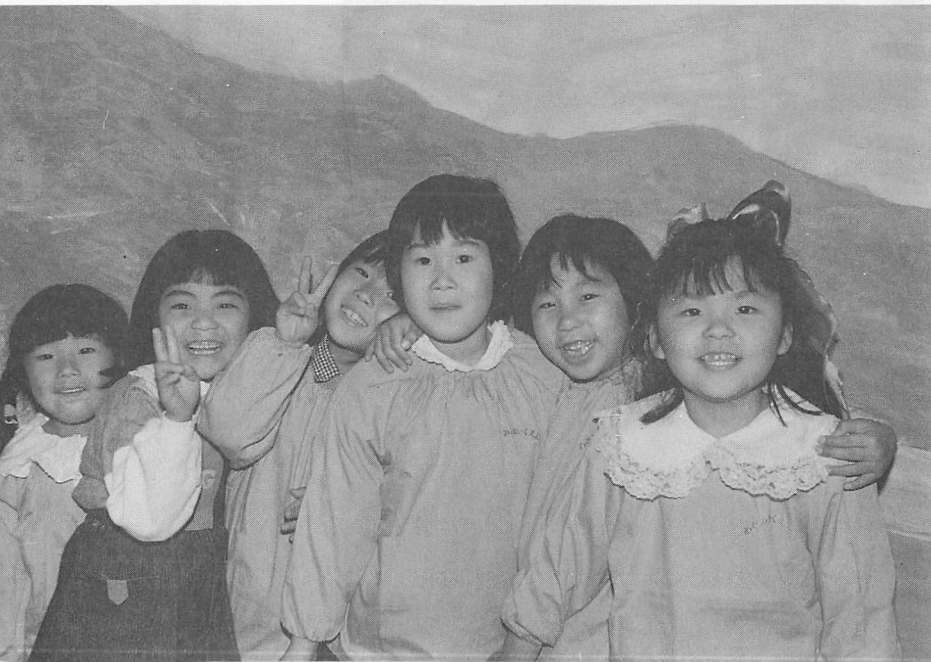
II 奨励

- 1 善にはさとくあれ
- 2 悪にはうとくあれ

III 賛美

- 1 主のみが堅く立たせ、信仰の従順に導く
- 2 主のみが知恵に富む
- 3 主のみに栄光あれ

「イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。(ローマ16・27)」土浦めぐみ保育園の園児たち。



いよいよ私たちは、ローマ人への手紙の最後の部分を学ぶことになりました。前項で私たちは、ローマの集会の兄弟姉妹について学びました。彼らは模範的な信者であり、聖霊に満たされて主に仕え、互いに主にあつて完全に一つにされた心を持つていました。また、彼らにはすべてを主のためにだけ行いたいという心からの願いがありました。私たちは、彼らについて学ぶことによって多くの勧めと励ましを与えられました。ローマの集会の兄弟姉妹たちは、主のために生きるということは兄弟姉妹のために生きることだ、という確信を持つていました。神の霊がローマの信者たちを支配し、その結果彼らはイエス・キリストの支配の下におかれるようになりました。こうして神のみこころが実現されたのです。

16章全体を通して最も頻繁に用いられ、また最も重要な表現は「主にあつて」また「キリストにあつて」です。「主にあつて」という言葉は、「主にあつて互いに同じ思いを持つようにされている」、また「主自身と一つの思いになっている」ことを表わしています。当時の信者たちは、いわゆる教義の内容に賛同したから信者になったものではありません。彼らの内にキリストが住まれ、彼らもまたキリストの内に住むことによって、彼らが信者であることを証ししたのです。主に自分自身を捧げずに主を信じている、ということではできません。私たちは、自分の自我を主に明け渡すことによって、初めて互いに一つとなることができますのです。

信者になるとは、単に聖書が真理であると認めるだけでは十分ではありません。また、御言葉に信頼することだけでも十分ではありません。信者になるということは、自分を無にして、自分を主に明け渡すことを意味しています。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。

(ガラテヤ2・20)

ですから、私たちにつきつけられた最も重要な問いは、自分の自我によって生きるか、自我を主に明け渡して主のみこころに生きるかのどちらであるか、という問いです。主が私たちの中で自由にお働きになることができるかどうかということです。従って信仰とは、神の意志を理解し、それを受け入れることではなく、主に対する従順です。自分自身を完全に主に捧げることによってのみ、信者は主によって用いられる道具となりえます。それゆえ、パウロは16章で何度も「従順」あるいは「信仰の従順」について語っているのです。信仰の従順は、真実の礼拝をもたらし、ます。このことを心に留めながら、ローマ人への手紙の最後の部分である聖句を読んでみましょう。

¹⁷兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。¹⁹あなたがたの従順はすべての人に知られているので、私はあなたがたのことを喜んでいます。し

かし、私は、あなたがたが善にはさとく、悪にはうとくあつてほしい、と望んでいます。平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み碎いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。

私の同労者テモテが、あなたがたによろしくと言っています。また私の同国人ルキオとヤソンとソシパテロがよろしくと言っています。この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあつてあなたがたにごあいさつ申し上げます。私と全教会との家主であるガイオも、あなたがたによろしくと言っています。市の収入役であるエラストと兄弟クワルトもよろしくと言っています。

私の福音とイエス・キリストの宣教によつて、すなわち、世々にわたつて長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によつて、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人人に知らされた奥義の啓示によつて、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによつて、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

(ローマ 16・17-27)

これから私たちが学ぶ、16章後半のテーマは、「勧め・警告・賛美」とすることが出来ます。

「勧め」は、信仰の従順に到達した信者に対して書かれています。この信者たちは、自分の命を捨てて、兄弟のために生きるといふ決意があり、忠実な心、誠意、練達した業をもつて熱心に主に仕え、自分自身を空しくして主に仕えることによつて、彼ら自身の生涯を主に對する証しと

しました。

続いてパウロは彼らに二つの勧めを与えました。それは19節に書かれているように、まず第一に「善についてはさとくあり」、第二に「悪についてはうとくあれ」ということです。そしてこれらのパウロの警告は、分裂を引き起こす人々、自分の欲に仕える人々、信者たちを惑わそうとしている人々に向けられています。これらの人々の背後にサタンが働いていたことは疑いの余地がありません。

平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。

(ローマ 16・20)

また、パウロは、この手紙の一番最後を、主に対する賛美の言葉でしめくくっています。この賛美は、三つの内容を含んでいます。

第一に、主のみが信者を堅く立たせ、信仰の従順に導くことができること。第二に、主のみが知恵に富む唯一の神であること。そして第三に、主のみに栄光があるようにということです。

I 警告

まず始めにパウロは、ローマの集会に対して警告をしています。パウロは、サタンの攻撃は恵まれている集会に対して特別に強く働くものであるということをよく知っていました。主のみこころが大切にされるときに、悪魔はいつでも攻撃を加えてきます。パウロは集会に対する悪魔の

攻撃を次のような言葉で表現しています。

しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。

(Ⅱコリント 11・14)

私が出発したあと、狂暴な狼があなたが入り込んだ中に入り込んで来て、群れを荒し回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。(使徒 20・29-30)

当時のローマの集会は霊に燃えていて、神の御光と力とを輝かせていました。これは、この世を支配するサタンの支配の中に神の力が入り込んだことを意味しています。悪魔は集会を外面から攻撃することに成功しないとき、集会を内側から駄目にしようと試みます。今日の日本において、悪魔は教会を外面的な力で破壊することはできません。なぜなら、今日の日本では宗教の自由が憲法によって保証されており、教会は法律で守られているからです。パウロは、悪魔の攻撃がどのようなものであるかを一人一人の信者が見分けることができるように、この警告を書き記しました。

ローマの集会は、ユダヤ人や異邦人の信者たちで構成されており、決して単純ではありませんでした。旧約聖書の影響を強く受けていたユダヤ人の信者の一部の人には、ユダヤ人が神から退けられた民族であり、かえって異邦人が救いの恵みにあずかるということを信ずることは難しい

ことでした。また、異邦人の信者たちは、救いは恵みによる、ということをよく知っていました。が、主イエスを十字架につけたのはユダヤ人であつたとして、彼らを偏見の目で見ることがありました。パウロは集会内で、ユダヤ人と異邦人の対立が起らないように常に心を配り、彼らが主にあつて完全になることをいつも祈り求めていました。

キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁をうちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立つてゐる戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人により上げて、平和を実現するためであり、また、両者を一つのからだとして、十字架によつて神と和解させるためなのです。敵意は十字架によつて葬り去られました。それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。私たちは、このキリストによつて、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができるのです。

(エペソ 2・14-18)

信者たちは、教義の上では、ユダヤ人と異邦人との間になんの区別もないことをよく知っていました。しかし現実にはそれらを守ることは難しいことでした。あるユダヤ人は、使徒を装つてパウロの建てた教会をつぎつぎと訪問してはその教会を分裂させ、信者たちをつまずかせようとしていました。ガラテヤ地方の都市である、デルベ、ルステラ、イコニウム、アンテオケでは、こうした偽使徒たちが成功をおさめました。パウロは、これらの集会のために祈りによつて戦い、ま

た、生みの苦しみを体験しました。その結果として、彼らがはじめの愛を持ち、愛と喜びと献身の思いで、主に仕えるように勧めることができました。そのほか、コリント、コロサイ、ピリピの集会にも、これらの偽教師たちは現われました。パウロは、彼らがすぐにでもローマの集会を訪問するであろうことをよく知っていました。パウロは信者たちに、彼ら偽使徒たちは悪魔の道具であるから、彼らとの交わりを避け、彼らから離れるようにと注意を促しました。偽使徒たちの一部は律法学者であり、信者たちを再びモーセの律法の縄目へ引き戻そうと試みましたし、また他の人たちは哲学者であり、天使崇拜をさせようとしてしました。

あなたがたは、ことさらに自己卑下をしようとしたり、御使いの礼拝をしようとする者に、ほうびをだまし取られてはなりません。彼らは幻を見たことに安住して、肉の思いによっていたずらに誇り、かしらに堅く結び付くことをしません。このかしらがもたになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。もしあなたがたが、キリストとともに死んで、この世の幼稚な教えから離れたのなら、どうして、まだこの世の生き方をしているかのように、『すぎるな。味わうな。さわるな。』というような定めに縛られるのですか。そのようなものはすべて、用いれば減じるものについてであって、人間の戒めと教えによるものです。そのようなものは、人間の好き勝手な礼拝とか、謙遜とか、または、肉体の苦行などのゆえに賢いもののように見えますが、肉のほしいままな欲望に対しては、何のきき目もないのです。

これら偽使徒たちがめざしていたのは、主イエスの栄光ではなく、自分自身の欲を満たすことでした。

また、知性が腐ってしまつて真理を失つた人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。
(Ⅰテモテ 6・5)

事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれても、こらえているではありませんか。(Ⅱコリント 11・20)

これがパウロの心の痛みでした。主イエスによって自由にされた信者たちが、これらの人々によつて気がつかない内に奴隷にされていたからです。

彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。
(ピリピ 3・19)

どうか犬に気をつけてください。悪い働き人に気をつけてください。肉体だけの割礼の者に気をつけてください。
(ピリピ 3・2)

パウロはいつでも誠の愛に満たされて、信者たちが常に和合するようにとすすめていましたが、

ここでは手厳しい言葉で彼らを呪ったのです。パウロは、信者一人一人が主の光の内を歩んでいくかどうか気をつけるだけでなく、集会の中に分裂を引き起こそうとする悪魔の働きにも注意しなければならぬと教えています。彼らを見分ける試金石は、ただ神の御言葉だけです。神の御言葉に従わない者を集会は拒絶しなければなりません。

Ⅱ 勧め

パウロは次にローマの集会の従順な信者に対して勧めの言葉を述べています。ローマの信者たちの特徴はその従順にありました。彼らは妥協せずに御言葉だけに従ったのです。彼らは神の言葉を単に頭で理解したのみでなく、実際に神の言葉に従って歩む者となりました。彼らはその従順のゆえに、他の集会の間でも評判になりました。ローマの集会の信者たちにとって、主イエスは救い主であるだけではなく、現実には日々の生活を支配する主であつたのです。彼らは、主に救われただけでなく、真心から主に仕えるものとなりました。その従順は、主イエスご自身が彼らを支配されていたことを示しています。先の偽使徒たちについて、パウロは彼らは主イエス・キリストに仕えないものであると語っています。彼らは主イエスの栄光ではなく、自分自身の富と名誉を追い求めたのです。この偽使徒たちの態度は、表面的あるいは人間的には、愛と思ひやりと忍耐と寛容に満ちているかのようでした。しかし実際、彼らの態度の背後に働いていたのは悪魔でした。当時、パウロが彼らに對してとつた態度は愛も寛容もないように見えたかも知れませんが、主イエスがご自分の十字架について預言して語られたときに、多くの人々は「だれがこのよ

うな教えに耐えられよう」といつて、イエスから離れて行きました。当時の彼らは、主イエスをかたくなで厳しく、また愛のない方と言ったのです。

18節には「純朴な人たち」という言葉がでてきます。これは純粹で眞実な信仰を持っているが經驗に乏しい信者のことをさしています。彼らは主イエスの血潮によつて罪を許された者でしたが、惡を見分ける能力をまだ持っていないませんでした。パウロは、彼らがいつでも主に従う決意を持っていることをよく知っていました。そこにはまた惡魔の落し穴があり、彼らがそれにかかつてしまうのではないかと心配していました。ですからパウロは彼らに對して「善にはさとく、惡にはうとくあつてほしい」と書き送ったのです。これは興味深い表現です。上からの知恵によつてはじめて、私たちは本當によいもの、正しいもの、また、主のみこころにかなうものを見分けることができます。

主を恐れることは、知恵の初め。これを行なう人はみな、よい明察をえる。主の譽れは永遠に堅くたつ。

(詩篇Ⅲ・10)

天から与えられる知恵とは、第一に神を恐れることです。私たちは主の臨在を知り、内に住みたまう主に従ふことによつて上からの知恵をいただきます。私たちは、何が正しいことであるかを見分けるためには、神から与えられた知恵が必要なことを学びました。しかし惡に對しては、私たちはこのような上からの知恵を必要としません。私たちは、ただ素直で、眞実であり、正直であればよいのです。惡を見分けるためには、知恵は必要ではなく、素直な心があればそれで足

りるのです。主の前で正直であることは、無邪気な心と混じりけのない心とを意味します。そして悪を見分けるには、これがあれば十分です。正直な心を持っているなら、いつでも悪を拒絶するからです。

兄弟たち。物の考え方において子どもであつてはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。 (Ⅰコリント 14・20)

異性関係において誘惑はつきものですが、誘惑は異性関係ばかりではなく、宗教にもあります。純粹で真実な信仰を持った信者たちでさえ、このような偽信徒たちの宗教面の誘惑に対しては、あぶない面をもっています。なぜなら、これらの偽預言者たちは言葉巧みに話し、すべてを主に従おうと決心している若い信者たちを惑わすからです。悪魔は、常に純粹な信者たちを主の道から引き離そうとすきを狙っています。主イエスご自身に信仰の土台を置き、神のみ言葉に確信の土台を置いている信者は、偽信徒たちの巧みな言葉の中に隠れている毒を見分けることができます。偽信徒たちの働きは、集会の中に毒をまき散らすことでした。それゆえパウロは、このような手厳しい言葉で彼らをののしったのです。

あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。そういう人にあいさつすれば、その悪い行ないをとにもすることになります。

(Ⅱヨハネ 10・11)

間違つたことを教える人は、その生活そのものが主の御言葉から外れています。彼らは、ただ自分が興味を持つことだけを追い求めるのです。純粹な混じりけのない信者を、このような間違つた教えの罫から守るのは一体なんでしょうか。それは、無条件に主に従うこと、また、無条件に主の御言葉に従うことです。羊飼である主の御言葉に聞き従い、その御声を聞き分ける者は、まことの羊飼いでない人々の声をも聞き分けます。

彼は、自分の羊をみな引き出すと、その先頭に立つて行きます。すると羊は、彼の声を知っているので、彼について行きます。しかし、ほかの人には決してついて行きません。かえって、その人から逃げだします。その人たちの声を知らないからです。

(ヨハネ 10・4-5)

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

(ヨハネ 10・27-28)

それでは、どのようにすれば主の御声を聞き分けることができるのでしょうか。そのためには、私たちが毎日仕事につく前に主の御言葉を聞き、またそれを自分のものにしなければなりません。主の御言葉を味わわないで一日を始めるなら、決して勝利を得ることはできません。

ローマ人への手紙16章の24節は、聖書の版によっては注釈としてのみ記されていますが、その内容は次の通りです。

私たちの主イエス・キリストの恵みがあなたがた全てとともにありますように。アーメン
ン
(ローマ16・24)

この節が、パウロの切なる願いを表現していることは疑いの余地がありません。パウロ自身体験したのが、ここに書かれている主の恵み、つまり人々に助けを与え、贖いを与える恵みでした。この主の恵みこそが、パウロが主のみ業にはげむ喜びであり、力の源であったのです。パウロはローマの信者たちに対して、彼らが幼子のような心でこの恵みを喜び、この恵みの内に安らうことを勧めました。さてパウロは、そのあとコリントのいろいろな信者たちのあいさつを取り次いでいます。テルテオが、特別にあいさつを述べています。

この手紙を筆記した私、テルテオも、主にあってあなたがたにごあいさつ申し上げます。
(ローマ16・22)

これは短いあいさつですが、深い意味を持っています。「主にあって」という言葉からもわかりますように、テルテオは信者でした。またこのことから、彼がすべてのことを主のみこころを満たし主に喜ばれるために行ったということがわかります。テルテオが主にあるものであると証しをすることができたのは、本当にすばらしいことです。このように証しをすることはテルテオ

にとつて大きな喜びでした。

Ⅲ 賛美

最後の部分はパウロの祈りであり、賛美です。パウロは、今や明らかにされた福音の奥義について語っています。この奥義とは、ユダヤ人であっても、異邦人であっても、主イエスのみ体なる教会に属することが許されており、彼らは皆、信仰の従順に導かれるということです。

ここにいる私たちのすべてが、すでにこの主イエスの恵みを受けたでしょうか。私たちは、信仰の従順に到達しているのでしょうか。私たちはすべてを成し遂げることのできるお方である主を新たな目でみているでしょうか。私たちには自分の時間、自分の力をすべて主に捧げ、主の必要に備える用意ができていますでしょうか。主が私たちにとって、他のなにものにもまして大切なものとなっているでしょうか。

私たちは、この最後のパウロの賛美を通して、主が私たちとまったく異った方である、ということを知ることができます。すなわち、私たちには何もする力がありませんが、主はすべてを成し遂げることがおできになります。私たちには知恵はありませんが、主は知恵に富む唯一のお方です。また、私たちは動揺しやすいものですが、主は決して揺り動かされることのないお方です。私たちは、ローマ人への手紙が大きく三つの部分に分けられることを学びました。そして、これらの各部分はみな、賛美の言葉で終わっています。1―8章の主題は、人間は神に対して罪を犯したために罪人であり、神の怒りのもとにおかれている、ということでした。しかし、神の御

子の犠牲の死によって、神は救いの道を開いてくださいました。誰でも自分の罪を悔い改め主イエスを受け入れた者は、神によって義とされる、と書かれています。主イエスとともに十字架につけられ、自分自身に対して死に、墓に葬られ、復活を体験し、高く引き上げられることは、救いと解放と勝利の秘訣です。信者の心の中に住まわれる聖霊の御力によって、信者は勝つて余りがある、すなわち、圧倒的な勝利者となるのです。この事実をおぼえて、パウロは賛美をせざるをえなかったのです。この賛美を私たちは、ローマ書8章31-39節に読むことができます。

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていただくのです。私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、

高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。

(ローマ 8・31～39)

9～11章には、イスラエルの民の歴史が書かれていました。私たちはイスラエル民族を通して、神の恵みと裁きを知ることができます。イスラエルの歴史を通して、世界の歴史が一面では神の裁きを表わしており、また一方、神は人間が悔い改めてご自身のもとにたちかえることを喜んでおられることが証しされています。イスラエルの民族は偉大な過去を持ち、悲劇的な現在を持ち、また、栄光に満ちた未来を持っています。この神の知恵を知り、イスラエルの民の上に神が下された導きと恵みを見るなら、私たちもパウロとともに神を賛美せざるをえなくなります。その賛美は11章33～36節に書かれています。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によってなり、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。

(ローマ 11・33～36)

第三の部分、12～16章では、私たちは、主の体である教会の奥義について学びました。私たち

は、信者の内に働かれる聖霊の力を見てきました。ある特定の信者が集会の中心になるのではなく、主ご自身が集会を支配してくださり、すべての信者が一致して主の栄光を現わすようになった実例を、私たちはローマの集会に学ぶことができました。ですから、パウロは喜びに満たされて賛美の祈りを捧げざるをえなかったのです。そしてこの賛美が16章25〜27節です。

私の福音とイエス・キリストの宣教によって、すなわち、世々にわたって長い間隠されていたが、今や現わされて、永遠の神の命令に従い、預言者たちの書によって、信仰の従順に導くためにあらゆる国の人人に知らされた奥義の啓示によって、あなたがたを堅く立たせることができる方、知恵に富む唯一の神に、イエス・キリストによって、御栄えがとこしえまでありますように。アーメン。

(ローマ16・25〜27)

(下巻終り)

あとがき

私はよく、「吉祥寺キリスト集会では、いったい何が他の教会と違っているのですか」と尋ねられることがあります。これに答えることは容易ではありませんが、簡単にまとめみると、次の五つの点をあげることができます。

第一に、私たちの集会には「一人の牧師」はいませんが、多くの牧師、すなわち大勢の集会の面倒をみる兄弟たちがいます。この人たちはだれひとり、大学教授であっても、医者であっても、「先生」とは呼ばれません。すべての人が、「兄弟」「姉妹」と呼ばれます。羽鳥明さんは、ベルリンでの最初の伝道者大会で「日本の伝道にとつての主な妨げは牧師制度である」と言いました。もちろん彼は、牧師たちが正しくないと言おうとしたのではなく、「万人祭司制」と対立するワンマン体制、すなわち「単独牧師制」が日本では非常に強く、牧師と一般の信者との間の差が大きすぎるところに問題があるという意味でこのように言ったのです。

吉祥寺キリスト集会には、日曜日のご奉仕を行ったり、実際に信者たちの世話をしたりする兄弟が二十人以上もいます。その兄弟たちは公に定められた長老ではありませんが、だれでも悩みや問題がある時にはだれのところに行けばいいかを知っています。また、聖書の学びをする兄弟の数はだいたい五十人です。

第二に、私たちは「会員制度」を持っていません。洗礼を受けた人たちも集会の会員ではありません。「会員制度」は、しばしばおかしなものになってしまっています。霊的な交わりよりも

組織的な関係のほうが強くなりがちなのです。私たちは人々に対して、決して「あなたは礼拝に来るべきです」とは言いません。だからこそ、みんな喜んで集会に来るのです。毎日曜日、約五百人の人が集ります。もし全員が来たならば、七百人を越えるでしょう。しかし日曜日に事情があつて来られないご婦人たちがいます。そういうご婦人たちは毎週火曜日に集りますが、その数は二百五十人から二百六十人の間です。

第三に、私たちは「月定献金制度」をとっていません。新しく集会所を建てるために、多額のお金が必要とした時ですら、献金した人の名前を意識して書かないように注意しました。主に捧げられるものは、会計担当者も他の人も知る必要がありません。

第四に、私たちは毎週日曜日に聖餐式を行っています。それが礼拝の中心です。私たちは特別なプログラムを持たず、だれでも自由に祈ることができますし、みことばを読むことも、それについて何か語ることも自由です。中心はイエス様であり、十字架の救いの御業であり、そのために感謝と賛美が捧げられます。毎日曜日ごとの聖餐式に先だつて、「救いの確信を持っていない者は、礼拝の中心である聖餐式にあずかることができないこと、また、未信者は献金することが許されていないこと」が、繰り返し集っている人々に対して述べられます。礼拝とは福音ではなく、説教でもなく、救い主に向かつての祈りと賛美であり、福音のための集会は聖餐式のあとで持たれます。

第五に、あらゆる信者が福音を宣べ伝えています。

ここで、この点について特に詳しく説明したいと思います。それというのも、多くの兄弟姉妹

が、その点で問題を持っているからです。

まず、黙示録5章から一箇所見てみることにしましょう。

また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拜んだ。

(黙示録5・11～14)

私たちもきつと、この大いなる群衆の中に一緒にいることでしょう。この将来の希望は、いずれ現実となります。そして、数えきれないほどの群衆が、主なるイエス・キリストを礼拝し、賛美するようになるでしょう。現在は、「小さな群れよ。恐れることはありません。あなたがたの父である神は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです」(ルカ12・32)という御言葉が当てはまるかも知れませんが、それは決して小さな群れのままで終ることはありません。

主なる神の目標は、小さな群れではなく、数えきれないほどの真の礼拝者の群れです。今世紀における最大の出来事の一つに、ウォッチマン・ニーと彼の同労者たちによって中国でなされた仕事をあげることができます。最初それは、部外者から「小さな群れ」と呼ばれました。しかし

その後いたるところで、光を与えいのちを運ぶものとして、光輝く教会が発生し、いわゆる「小さな群れ」は非常に大きなものとなったのです。悪魔は総攻撃を開始しました。一万人の宣教師が国外退去させられ、わずか一日で四十九万人の信者が殺されました。その当時信者の数は、中国全体でだいたい百万人ぐらいでした。しかし現在では、二千五百万人の信者が、家庭集会に集っています。

成長は主なる神の心からの願いであり、目標です。そのために、私たちの主は一粒の麦として死んでくださったのです。たくさんの方が発生するべきです。大いなる獲物がもたらされるべきです。少ないもので満足する者はわざわざいす。

実を結ばない理由として、未信者の無関心さやその地方の偶像崇拜のひどさがあげられたり、数ではなく質が問題であると言われたりするのをよく耳にします。しかし、主が絶えず新しい人を導かないようであれば、質もまた大したことはない、はつきり言うことができます。神のこゝとばである聖書は、私たちに具体的な数を示しています。主は、決して十二弟子だけで満足はなさいませんでした。それから少して、七十人の人をお遣わしになり、五旬節には百二十人の人を通して、同じ日に三千人の人が自分は主イエスのものであると告白して洗礼を受けました。そのすぐ後に、五千人の人が主イエス様を信じ、受け入れました。このように、初代教会は絶えず成長し、増え続ける教会でした。「あなたがたは地の果てまでわたしの証人となる」。これは主のご命令であり約束です。しかも主の目標は、三十倍、六十倍、百倍の実がもたらされることです。私たちも、もっと大いなることをなさりたいと願っておられる主と同じヴィジョンを持つ必

要があります。もし私たちが、今の状態で満足してしまうならば、主は深く悲しまれることでしょう。

一億二千万人の日本人のすべてが、主のために福音を聞くことが、私たちの心からの願いであり、また祈りでもあります。そのための最も大切な要素は、全国各地の小教会の健全な成長であり、そのことに比べれば、いろいろな個別活動の働き——例えばラジオ伝道、学生伝道、文書伝道など——は、そんなに大切であるとは思われません。しかし、誤解のないようにつけ加えておきますが、私がこのように考えるのは、先にあげたような様々な個別活動がそれ自体無意味だからではなく、そのような活動を通して福音に接したいという心を起こされた人が近くの教会に行き、そこでつまづいてしまって、福音から離れてしまうという例が、数えきれないほど多いからです。つまり、両方とも必要なのですが、教会の健全な成長の方がより重要だということです。実際、初代教会はラジオ伝道、テレビ伝道、学生伝道などをしなくても、非常に早く、しかも大きく成長しました。どうしても必要で大切なことは、主を信じる者同士の心からの一致です。現代のような、混乱したバラバラの状態が一般的になっている時代に、心から一致協力することは、何とすばらしいことでしょうか。

現代は孤独、独りぼっち、単独の時代です。以前私は、西ドイツのガイスワイドという町の一人の兄弟と一緒に一組の老夫婦を訪問しました。このご夫婦は、健康上の理由でもはや集会に行くことができなくなっていました。私たちが訪問すると、その老夫婦は「私たちはまったく無視されて、忘れさられてしまったのではないかと思っていました」と言いました。三十八年もの間、

ベテスタの湖のほとりで病を患っていた病人は、主イエス様に言いました。「私を助けてくれる人は一人もいません。私のことを気遣って、心配してくれる人、私を助けてくれる人は、本当にだれもいないのです」と。

三千年前に、詩篇の作者は書き記しました。「私のたましいに気を配る者もいません」（詩篇142・4）と。

孤独は現代の大きな病です。人間は自分のことばかり考えます。人間が人間を独りぼっちにさせてしまします。「私は弟の番人なのですか」と言ったカインのような態度が、今日では当たり前なことになってしまっています。

I 伝道活動における家庭集会の重要性

キリスト者にとって最も大切なことは、一人一人が強い責任感を持って、伝道の業に励むことです。中でも家庭を通しての伝道が、特に重要な意味を持っていることに注意すべきです。そこでこれから「伝道活動における家庭集会の重要性」についてご一緒に考えてみたいと思います。言うまでもなく、家庭集会は人に福音を宣べ伝えるという目的のための手段にすぎません。ですから、伝道活動の方が家庭集会自体よりも大切なことは明らかです。主イエスのためにたましいを獲得すること、これがその目的であり、ただ一つの目標です。

ここで二つの問題について考えてみましょう。この二つの問いに対しては、あらゆる時代のあらゆる信者が同じ答えを出しています。第一の問いは「あなたの人生の最も大切な経験は何か」

というもので、その答えは、「主イエス様との出会い以外の何ものでもありません」です。二番目は「人が人に提供することができる、最も大切な助けは何か」という問いで、答えは「主イエス様を知ることができるように、その人を助けることです」というものです。

ここでさらに、三つの点について考えてみましょう。この三つの点というのは、ある程度まで家庭集会の前提条件ともなるものです。

- 1 召しにふさわしく歩もうとする意欲
- 2 証し人として生きようとする意欲
- 3 幾人かでも獲得しようという意欲

1 召しにふさわしく歩もうという意欲

それではまず、第一の点から見てもみましょう。ここでは、「召しにふさわしい価値ある歩み」が大切です。イエス様のためにたましいを獲得することは、あらゆる信者に課せられた神の使命です。すべてのキリスト者は、この最も大切なご奉仕のために召し出されています。にもかかわらず、小羊であるイエス・キリストのためにたましいを獲得したいという情熱を、本当の意味で知っている人は極めて少ないということは、驚くべきことです。多くの信者たちは、自分の仲間や近所の人のたましいの救いに関して、全然責任を感じていません。エゼキエル書3章18節にある「わたしは彼の血の責任をあなたに問う」ということばは、私たちに大変な責任を、驚くほど冷静にまた挑戦的に示しています。

では、多くの信者たちの無関心の原因はいったい何でしょうか。第一は認識不足、第二は配慮不足、第三は想像力不足です。「人間は失われたものであり、悔い改めたくないたましいはすべて滅びに至る」という認識が不足しているということは、多くのキリスト者の特徴ではないでしょうか。また、失われた者の運命に対する配慮不足もあげられます。主イエス・キリストは、涙を流さないではいられないほど深く、一人一人のことを心配してくださいました。なぜなら主は、救われていない人の危険と滅びがどんなにひどいものであるかをご覧になったからです。救世軍のブース將軍は、ある時、救世軍の一人から、仕事があまりにも大変で全然成長ができないという知らせを受けました。將軍の答えはこうでした。「涙をもってやってみてください」。その人は、言われた通り、涙をもって仕事に励みました。その結果は素晴らしいものでした。主は祝福することがおできになり、多くのたましいを獲得することがおできになったのです。最後に、一つのたましいの価値に対する想像力の不足があげられます。主イエス様は、人間のたましいを非常に価値のあるものとして尊重なさいました。それゆえ主は、すべての人を滅びから救うために、喜んで天での栄光を捨ててください、この地上で、貧しさ、悩み、恥、死の苦しみを受けてくださいました。一つのたましいの価値がそれほど高価なものであるならば、その救いのためには、どれほどの距離も遠すぎることはなく、どんな重荷も煩わしくはなく、いかなる配慮も面倒ではなく、いかなる仕事も難しすぎることはありません。デビッド・ブレynaードは次のように告白しています。「主の栄光のためであれば、私はだめになってもかまいません。どこに住もうと、どのような生活状態であろうと、どんな困難な体験をしようと、それが、キリストのためにたまし

いを獲得するためならば苦になりません」。こうした態度の結果は、インドにおけるすばらしいリバイバルでした。

私たちが必要としているのは、失われたたましいのための燃える心です。スポルジョンは、次のように証しています。「私は、生まれて初めて一人の人間のたましいを主のもとに導くことを体験した日ほど、言葉で言い表わせない幸福感を経験したことはありません。母親にとつて、最初の子供が生まれた時ほど嬉しい時はないでしょう。また兵隊は、激しい戦いによつて勝ちとつた勝利を喜ぶでしょう。しかし、主イエスのために一つの失われたたましいを獲得することは、それらすべてにまさる喜びがあるのです。ですから私は、一人の人の失われたたましいを獲得することこそ、最もすばらしいことであると確信するのです」と。

前にもご紹介した救世軍のブース將軍は、訓練におけるもっとも大切なことの一つとして、「できることなら信者一人一人を、一日二十四時間地獄へ行かせたい」と言いました。なぜなら信者が、悔い改めたくないたましいの結末に待ち構えている恐ろしい現実の姿を見れば、まだその状態を知らない人々に真剣になつて警告し、福音を宣べ伝えるからです。主が私たちをあらゆる眠気や無関心から引き離してくださいように。

召しにふさわしく歩みたいという切なる願いがなければ、家庭集会をやりたいと願つても無意味なことです。結局はうまく行きません。祝福がないからです。

2 証し人として生きようという意欲

次に二番目の、証し人として生きようという意欲について考えてみましょう。これもまた、主

が家庭集会を祝福なさることのできる条件です。証し人として生きようという意欲とはいったいどういうことでしょうか。これについては四つの事柄、すなわち愛すること、苦しむこと、走ること、重荷を負うことをあげることができます。

第一は愛することです。

人から愛されたくない人間は一人もいないでしょう。他の人から除け者にされ、孤立し、絶望的になった人は、決して幸せとは言えません。この世でも隣人を愛することについていろいろなことが言われていますが、結局はみな自分自身のことだけしか考えていません。本当の悩みは見過ごされ、過小評価されています。人間はみな、静けさと愛とを切に求め、憧れています。人間は憩いのないものです。人間は、財産を持ちたい、人から認められたいと思っています。しかしそれらの願いの背後には、永遠なるもの、真の満足を与えてくれるお方、すなわち主イエスに対する渴望が隠されています。もし私たちが主イエス・キリストを第一にし、心から愛し、その動機が純粹であるなら、私たちの周囲の人たちは自発的に主イエスを信じ、主に従う決心をするようになります。実は、今日一番必要とされているのはこのことなのです。

私たちの回りにいる人たちは、私たちがその人たちを本当に愛していること、助けてあげたいと思っていること、私たちはその人たちのために存在していること、その人たちのために喜んで犠牲を払い、時間を割こうとしていることに気がついていないでしょうか。

第二に、苦しむことです。

苦しむとは、主イエスの苦しみにあずかるという意味です。主イエスは群衆をご覧になった時

可哀そうに思われました。それは彼らが羊飼いのいない羊のように、弱り果てて倒れていたからです。証し人として生きて行こうとする時、まず自分の周囲を正しく見る、つまり主イエスの目で見るのが大切です。それは、人々の本当の悩みを見ることでもあります。ある合唱曲の中に次のような一節があります。「今日世界が必要としているのは主イエスです。主お一人だけが世界を解放できます」。

主イエスの目でもって何百万人という人々の現実の姿を見る者は、主イエスの嘆きと同じ気持ちを持ちます。そしてその人はこの世が「欲するもの」ではなく、「必要としているもの」を与えるでしょう。使徒の働き3章に出てくる乞食は、お金や施し物を欲しがりました。確かにこの貧乏人はそのようなものさえあれば満足だったでしょう。しかし、幸運にも乞食の期待は裏切られました。そのかわり彼はもっとすばらしいものを貰いました。この乞食は自分の「欲しいもの」ではなく、「必要としているもの」を貰ったのです。

回りの人々に対して目を向けるようになると、その人は苦しみ始めます。エルサレムを思っ泣いた主イエス様の苦しみを理解するようになります。エルサレムの町、そして人々が、真の平和のために必要なものを欲しいと思わず、かえってそれを受け取ることを拒んだゆえに、主イエスは苦しみました。悔い改めて救いに至る機会を提供されているにもかかわらず、意識的に、あるいは無意識的に、人々が再三にわたって拒み続けたので、主は苦しまれたのです。

みこころにかなう教会とは、どのような教会なのでしょう。それは、正しい教えを教えたり、この世の不信仰を裁いたりすることによってではなく、それらの下に身を屈め、本当に苦しんで

いることによって見分けられます。主なる神の霊は深い同情の霊です。共に苦しまなければ、決して傷は癒されません。共に苦しむことのできない者は、主の愛を伝える者とはなりません。主が救ってくださる血潮の証し人でありたいと願うなら、私たち自身が苦しまなければなりません。第三は走ることです。まず主のみもとに走ること、それから苦しんでいる人のところに走ることが必要です。悔い改めない人間は永遠に滅びるという知識は、私たちを、たましいの救いのための目覚ましい運動へと駆り立てます。私たちがその人たちのために祈っていること、また苦しんでいることに気づく時、彼らはもはや無関心ではいられなくなります。彼らの足元の土台は取り除けられてしまいます。その結果、彼らはイエス様の御手の中に落ち着くまで、長い間精神的に動揺し続けなければなりません。

人々のところに走っていく前に、そしてまた、家庭集会を始めようとする前に、まずイエス様のところに走ってください。なぜなら、たましいを獲得することは人間の行いの結果ではなく、主なる神お一人の御業だからです。私たちが主のみもとに駆け寄って祈るなら、主は大いなる力を現してください。

恐れず、大胆に主イエスの証しをすることができるよう祈ってください。主イエスを十字架につけたこの世で主を証しすることは、決して簡単ではありません。初代教会の信者たちにとっても簡単なことではありませんでした。だからこそ彼らは祈ったのです。

主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。

(使徒 4・29)

この祈りは応えられました。

一同は聖霊に満たされ、みことばを大胆に語りだした。

(使徒 4・31)

備えられた人々のところに導いてくださるように主に祈ってください。だれにでも福音を宣べ伝えることよりも、常にそのために備えをしていることが大切です。「主よ。私は何をするべきでしょうか。あなたが望んでおられることを、私は行いたいと思います」という態度が必要です。ピリポはこの心構えができていました。それで主は導くことができ、用いることがおできになったのです。適切な時に適切な言葉で語ることができるように祈るべきです。主お一人だけが、どんな場合にも何が必要であるかご存じです。たましいの救いのために祈ることは、悪魔に対する宣戦布告、すなわち戦いを宣言することであるということをよく覚えておくべきです。

私たちははっきりと特定のたましいのために、すなわち一人一人の名前と結びつけて祈らなければなりません。つまり一つ一つの祈りの対象を主に示さなければならぬということです。時と場所を決めた祈りも大切です。答えが与えられるまで祈り続けましょう。「少しも疑わずに、信じて願いなさい」(ヤコブ 1・6)とヤコブの手紙には書かれています。

主に大きく期待しないものは主を侮るものです。主はご自分のことばを必ず守られます。とても望みはないと思われることでも主に期待しなさい。祈りは、人々を救う場合の最も力強い神の道具です。

第四は重荷を負うことです。失われている人を愛し、共に苦しみ、走る者は、周囲のまだ信仰

を持つていない人々に対して重荷を負うことになります。この重荷は最も重い重荷です。男の方よりもご婦人のほうが、このことについてたくさんのかんじを感じていらつしやるでしょう。主イエスを信じている多くの奥様たちは、まだイエス様を信じていないご主人を持ち、共に生活する時、まったく孤独な状態におられますが、それに対して教会はどれだけの重荷を負っているのでしょうか。真の交わりは、いつでも共に苦しみ、共に重荷を負いあう備えができているところにあります。

互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。

(ガラテヤ 6・2)

実際の状態はどうでしょうか。集会のある兄弟は、以前統一教会に関係していました。しかしその後集会に導かれるようになり、主イエスを知ることによって救われました。彼は何年もの間集会で忠実なご奉仕をし、会社でも聖書の集いを始めました。けれども彼はその後横道にそれてしまいました。ある哲学者によつて惑わされてしまったのです。その時集会はこの一人の兄弟の変化に無関心ではありませんでした。毎朝六時から七時までの間、五人の兄弟が私の住まいに来て、集会に来なくなつてしまった兄弟のために共に祈りあいました。一年半の間毎日、兄弟たちは奥様方と共にこの重荷を担いました。私たちのすばらしい主は、祈りに応えてこの横道にそれていた兄弟を回復してくださいました。彼は再び用いられるようになり、四国に転勤した時、自分の家庭を開放して家庭集会を始めました。集会をするようになって最初の四カ月の間に七人の

方が導かれ、イエス様を信じるようになりました。主イエス様のために人の重荷を負うものは、必ず報いられます。

私たちはここまでで、「ふさわしい歩み」と「共なる生活」という二つの点を見てきました。私たちが召しにふさわしく歩むところ、また信者の一致が明らかになるところでは、未信者たちもそれを見て驚き、やがて導かれるようになります。「見よ。彼らは何とお互いに愛しあっていることか。何とお互いの重荷を負いあっていることか」。これこそ私たちの目標であり、この世に対しての何より大きな証しです。

3 幾人かでも獲得しようという意欲

私たちは、幾人かでも多く、主のために獲得しようとする意欲を持つべきです。聖書のどこにも、すべての人が救われるとは約束されていません。しかし、主がすべての人が救われることを望んでおられることは、動かすことのできない事実です。ある人は、一人の人をイエス様のために獲得するためには、千人以上の「平信徒」と六人の「牧師」が必要であるという計算をしました。しかしこれはおかしいことです。私たちの集会では、一カ月間一人の人も主に導かれなければ、「いったいどうしたのでしょうか。主はなぜ祝福してくださらないのでしょうか。何が主の御手を妨げているのでしょうか」と、お互いに話しあうようになります。

しかし今日多くの教会は、「夜通し働いても何もとれなかった」という状態におかれているのではないのでしょうか。失われたたましいが主イエスを通していのちを、それも豊かないのちを見出すこと、これが主の目標であり、また信者の持つべき目標です。主イエスは救いの御業をなし

ておられるのです。今私たちに与えられている使命は、主の犠牲による贖いを宣べ伝えることです。

今日、多くの教会の特徴は次のようなものです。すなわち人々は討論し、組織作りをし、委員会を結成し、新しい宣伝方法を考えたり、マスメディアに入り込もうと努力したり、大会を開いたり、セミナーを計画したりして、それらの活動を祝福してくださるように主に祈ったりしています。けれども、多くの場合には、そのようなことより、ただ主の前に静まり、主にみことばを語っていただくことのほうがはるかに勝っているのではないのでしょうか。人間は本質的に、大きなことをして人々をあつと言わせたいという気持ちを持っています。人は大勢の群衆を見ることがはしますが、一人一人を忘れがちです。しかし今最も大切なことは、一人一人に対する集中力です。なぜなら一人一人を集中的に導かなければだれも救われなし、一人一人の救いのために集中することを通して信仰が成長しなければ、他の人を助けることもできなくなるからです。その目的を達成するために、家庭集会は大いに役立ちます。

この大きな働きをする家庭集会について、もう少し詳しくごいっしょに考えてみましょう。

一 家庭集会の前提

家庭集会は、福音を宣べ伝える手段であるべきです。ですから家庭集会の目標は、常に人々が主のみもとに来ることです。人々を主のみもとに導くことが目標であるなら、家庭集会にはまだ主を知らない人たちがいなければおかしいということになります。ですから私たちの家庭集会の前提は、必ず未信者がいるということです。未信者が一人も来なければその家庭集会はやめるよ

うになります。というのは、信者だけが集まっても一種の分派作りになってしまい、他の信者の悪口を言うようになりがちだからです。未信者がいればそのような子供っぽいことに使う時間は全然なくなります。なぜならば、私たち一人一人の心からの願いは、まだ救われていない人々が、悪魔の支配下からすばらしい主の光の中に移されることだからです。

二 家庭集会の基本

吉祥寺キリスト集会はじめ私たちの全国にある集会では、年間数百人の方が洗礼を受けています。これは主に家庭集会の成果です。けれども私はここで家庭集会というものはこうあるべきだ、などということを言うつもりはありません。というのは、真似ごとには何の価値もないからです。家庭集会で大切なのは処方箋の通りに真似することではなく、「基本」を大事にすることです。その違いはどこにあるのでしょうか。

料理の本にはいろいろな料理の調理法、すなわち処方箋が載っています。例えばミートボールを作ろうとして本を見ると、まず挽き肉に塩小さじ三分の一杯、小麦粉大さじ一杯、胡椒少々を入れてよく混ぜ合わせ、十五個位に分けて団子状にまとめる云々と書かれています。これは一定の規則で、こういう手順でやればうまく出来上がります。しかし、残念ながら私たちが今ここで考えているテーマには、このようにすればうまくいくという一定の規則はありません。ただ、主が次のようなことばで弟子たちにお与えになった「基本」こそが、大切であるということができます。

あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖霊の御

名によってバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。
(マタイ 28・19、20)

ここで主は、ただ単に救いを得るだけではなく、主の弟子として用いられ、主に従う者となるようにとおっしゃっています。同じ草案を、パウロはテモテに与えました。

私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

(Ⅱ テモテ 2・2)

この時代における主の基本構想がここに記されていますが、この基本は今日にも当てはめることができます。その基本とは、すなわち一人一人のために労するということです。

三 家庭集会を支えるルデアたちの存在

家庭集会は、教会を建てるための一つ一つの細胞のようなものです。ただ家族ぐるみの信者だけが家庭を提供するのではなく、多くの信者のご婦人たちもまた、主に用いていただくために家庭を提供しています。いうまでもなく、時間と労力とお金とを犠牲にすることも要求されます。一言で言えば、犠牲なしには成り立たないということです。

吉祥寺集会は、なぜ絶えず増大しているのでしょうか。それは、大勢のルデアがいるからです。彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」と言って頼み、強いてそうさせ

た。

(使徒 16・15)

ある時私たちは、それまでの集会所が狭くなつてしまい、新しく建てるために古い建物を壊さなければなりませんでした。日曜日には公の場所を借りて集会を行うことができましたが、平日の集まりについてはどうすることもできませんでした。その時、私たちのルデア、すなわち救われた姉妹たちが、住まいを提供することを申し出てくださいました。それで、いろいろな方の家庭で集会を持ちました。

この時家庭を提供してくださったある姉妹のご主人にとって、このことは人生の決定的な転機となりました。それまで彼は、浴びるほど酒を飲み、遊興にふけり、たびたび外国に雲隠れする、というような生活を続けていました。しかし、主が働きかけてくださった結果、今では彼は集会の中で責任を持つ兄弟の一人となっています。自分の家で開かれた主にある自由な交わりが、三人のお子さんをも主イエスに導きました。今、この家庭は家族全員が主を愛するようになり、日曜日の午前中には、中学生高校生五十―六十人の集いの場として、両親の寝室から、子供部屋、居間、台所まで、すべて各クラスのために提供されています。

四 初代教会当時から存続してきた家庭集会

使徒たちは：毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。

(使徒 5・42)

このみことばからもわかるように、初代教会の人たちは、宮、すなわち会堂だけでなく、家々でも集会をしていました。これこそ信者たちの万人祭司制です。主は小さな集いのことを、次のようなことばで言い表しておられます。

ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。
(マタイ 18・20)

信者たちを迫害したすべての時代の施政者、権力者たちは、信者たちが家々で集まることを非常に嫌がりました。なぜならば、国家の統制力をもつてしても、主の御名によって二人、三人集まっている信者たちの集まりの実態を調べることができないからです。あらゆる偽りの宣伝や迫害にもかかわらず、家々で集まる人々の集いは、使徒たちの時代から今日まで存続しています。

五 家庭集会が提供すべきもの

集まりの中心になりたいから、というような、自分勝手な不純な動機で家庭集会を始めることは許されません。集会が祝福され、接触を保つため、そして新しく信仰に導かれた人、信仰の歩みを始めたばかりの人に、霊の糧を与え、真心のこもった温かさを伝えるために、奉仕しなければなりません。多くの場合、家庭集会を通して信仰に導かれ、またそこで求めている人は、主イエスの救いの力のすばらしさを経験します。また、家庭集会は信者たちにとっての霊的成長の場でもあります。家庭集会は、温かい、個人的な雰囲気であるべきです。また多くの未信者を個人的に住まいに招待し、お茶やお菓子を囲んでの交わりの中で自由な会話の機会を持つことも非常

に大切です。重要なのは一人一人を大切にすることであつて、ショックを与えるようなことは慎まなければなりません。

このことについて、一つの例をあげてご説明しましょう。だいぶ前のことになりますが、家庭の中がめちゃくちゃになつてしまつたご家族がありました。そのご家族のお宅を訪問した時、私たちは聖歌を賛美したり、祈つたり、また聖書を聞くことはしないで、最初に短い映画をお見せし、その後で自由な話し合いをしました。その結果その家のお嫁さんが主を受け入れ、主に仕える生活をなさるようになりました。

家庭集会で大切なのは、私たちが知っている知識を人々に知らせることではなく、私たちがしつかりした土台の上に立つていて、精神的な支えと眞の平安とを持つているという印象を与えることです。大抵の人々は集会所、あるいは教会に来る心の準備ができていません。私たちはそういう人のところに行かなければなりません。個人的な伝道、個人的な話し合いが最も有効な伝道方法なのです。

それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合ひなさい。

(I ペテロ 4・10)

住まいもまた一つの賜物であり、それを通して有益な奉仕がなされます。聖書にでてくる言葉や言いまわしの多くは、未信者にとつてなじみの薄いものです。そのため正しく理解されなかったり、まったく誤解されたりすることが少なくありません。その点小さなサークルなら個人個人

に親しみやすい言葉で聖書の真理を説き明かすことができます。

真の愛はさまざまな方法を生み出します。主イエスの愛をもって、失われたたましいのために苦勞することが大切です。個人の住まいの気持ちの良い雰囲気は緊張感を和らげ、個人的な接触の機会を作り出すことができます。まず最初に家庭集会を通して主に結びつけられ、それから信者の群れである集会、あるいは教会につながります。家庭集会は極めて聖書的です。

そして毎日、心一つにして宮に集まり、家でパンを裂き、喜びと真心をもって食事とともにし、神を賛美し、すべての民に好意を持たれた。

(使徒 2・46、47)

そして、毎日、宮や家々で教え、イエスがキリストであることを宣べ伝え続けた。

(使徒 5・42)

こうとわかったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリヤの家へ行つた。そこには大ぜいの人が集まって、祈っていた。

(使徒 12・12)

私たちが集まっていた屋上の間には、ともしびがたくさんともしてあった。

(使徒 20・8)

こうしてパウロは満二年の間、自費で借りた家に住み、たずねて来る人たちをみな迎え

て、大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。

(使徒 28・30、31)

キリスト・イエスにあつて私の同労者であるプリスカとアクラによりしく伝えてください。この人たちは、自分のいのちの危険を冒して私のいのちを守ってくれたのです。この人たちには、私だけでなく、異邦人のすべての教会も感謝しています。またその家の教会によりしく伝えてください。私の愛するエパネトによりしく。この人はアジアでキリストを信じた最初の人です。

(ローマ 16・3―5)

どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言うってください。

(コロサイ 4・15)

姉妹アピヤ、私たちの戦友アルキボ、ならびにあなたの家にある教会へ。(ピレモン 2)

コルネリオの家でも獄吏の家でも家庭集會があつたことは確實です。預言者たち、使徒たち、主イエスは、家々で主なる神と神の御業について語り、病人を見舞い、癒し、孤独な人を慰め、罪人に神に立ち返るように呼びかけ、お互いに慰めあい、喜びあいました。

一五二五年に、ドイツの宗教改革者マルチン・ルターは次のように書きました。「心からキリ

ストを愛し、キリストに仕えたいと思う人は、家々に集まり、そこで祈り、聖書を読み、洗礼を授け、聖餐式にあずかるべきです」。

家庭集会は生き生きとした教会の現れであるべきです。家庭集会を通して教会は発生し、成長しました。初代教会の頃は、家庭集会が普通の姿でした。そして迫害によって信者たちは再び家庭集会をやらざるをえなくなりました。いわゆる「経験主義」の父と呼ばれるフィリップ・ジェイコブ・スペイナーは家庭集会のために語りました。そしてジンセンドルフもまた、キリスト者の家庭では、どこでも家庭集会があるべきだと述べました。二十世紀になってからは、中国、インド、アフリカにおいて家庭集会を通して数え切れないほど多くの人が主に導かれました。これまでに述べてきた五つの点についてまとめると、次のようになります。

初代教会の起源と成長に家庭集会は非常に大きな意味を持っていました。いわゆるリバイバルは非常に小さな集団、あるいは個人個人から生まれ、しばしば家庭集会によって担われました。迫害の時代には、家庭集会は信者に生き残るただ一つのチャンスを提供しました。主の使命に忠実であろうとするならば、家庭集会はどうしても必要です。収穫は刈り入れられなければなりません。すなわち主によって備えられたたましいは、私たちによって見出され主に導かれなければなりません。それは小さな家庭集会の中の方がはるかに容易です。

聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

(使徒 1・8)

私たちは主イエスの証人となるべきです。まずエルサレム、すなわち「自分の家」で証人となるべきです。家庭集会は個人伝道のための最もすばらしい「可能性」です。ただし、言うまでもないことです。家庭集会は集会や兄弟姉妹の欠点を話しあう場所ではありません。

伝道のためだけではなく、信者の成長のためにも家庭集会はどうしても必要です。それによって人はよりよく知りあうようになり、一人一人の悩みを理解し、語りあうことができるようになります。家庭集会では人は「お客様」としてではなく、積極的に中に入って参加することができます。

Ⅱ キリスト者の使命

ここで家庭集会の目標でもある「私たちが主イエスから与えられている使命」について一緒に考えてみましょう。

あなたは、真に親しい人が救われて欲しい、と思っていられるでしょうか。もし思っているなら、祈りの名簿を作り、その人たちのために規則的に祈り始めてください。主のみ約束に信頼しなさい。機会をとらえて、あなたにとって主イエスがどのようなお方であるか、一番わかりやすい証しをしてみてください。そして主が働いてその人々をみもとに引き寄せてくださることを主に感謝してください。というのは、主は必ず約束を守ってくださるからです。主は嘘をつかれません。

成熟した実を見出しなさい。収穫は熟しています。それは神のみことです。悩みと神の霊によって備えられ、主を受け入れる用意のある人たちは、いたるところにいます。その人たちは真

の救いを待ち望んでいるのです。大学にも職場にも、主婦の間にも、喜んでイエス様のところに来る人たちはあらゆるところにいます。しかし、どのようにすればイエス様のところに行けるのか、だれもその人々に話してくれません。あらゆる時代を通しての最大の誤りは、多くの信者が「未信者は神について何一つ知りたいと思わない」と思い込んでしまっていることです。人間が福音についてまったく無関心になつてしまつていくという考えは、偽り以外の何ものでもありません。人間は永遠なるもの、変わらないもの、存続するものを求める気持ちを持っています。聖霊はこれについて知りたい思いを引き起こさせてくださいます。しかしこれらの人たちはどのようにして主のために獲得されるのでしょうか。

福音を宣べ伝える機会を狙いなさい。何百万人もの人口を抱える大都會では、とすると身近な隣人、例えばクリーニング屋さんとか魚屋さんの存在を見失いがちです。私たちは非常に多くの伝道の機会を与えられています。家庭で、友達や親戚や近所の人や会社の同僚の間で、また電車の中で、路上で、いたるところで福音を宣べ伝える機会があります。あなたの目標は、一つの失われたたましいのために全精力を傾けることです。信頼が得られるまでその人のために時間を作り続けなければなりません。そうでなければ、その人は最後まで心を開くことがないでしょう。

人を主に導こうと思う時には、忍耐をもつてその人の話を聞き、議論などは慎まなければなりません。その人が本当に救われたいと願うならば救われ、それを望まないならば救われません。すべてはその人次第であり、その人自身の責任であることを示してあげましょう。話しながら絶えず主により頼む理性を持ちましょう。いろいろ質問された場合、答えとして前面に出てくるの

は、あなたの経験よりむしろ神のことばであるべきです。ただ一つの武器は神のことばです。

信者はだれでもキリストの大使であり、まだイエス様を知らない人々に、主なる神との和解を受け入れ、滅びから救われるように教えてあげなければいけません。主なる神が主イエスを通して約束してくださった救い、また助けの御手を、真理を求めている人たちに提供してあげましょう。主の助けは人生のどのような場面でも、たとえどんなに絶望的であっても、死に直面しても、裁きの時にさえ、永遠に変わらなず助けであり続けます。

証しの中心はいつも主であるべきです。すなわち私たちはイエス様の死によって永遠のいのちを約束され、主の復活によって死は私たちに対して力を失ったということが中心となるべきです。私たちは決して裏切られることのない、生き生きとした望みを持っています。イエス様のみが唯一の証人です。

主は呼んでおられ、招いておられます。また主は決断を迫っておられます。主は明日のことよりも今日のことを思っておられます。主は人間を変えただけでなく、新しく作り替えることを望んでおられます。主が招いて解放してくださいさる人は、煩わしい人間関係から解放され、死の恐怖から解放されたことの証人となるのです。主によって解放された人は喜びと感謝に満ち、主のために進んで奉仕したいと願うようになります。主は絶えることのない喜び、いかなる悲しみも奪い去ることのできない喜びを与えてくださいます。

主の証し人として主の救いの御業を宣べ伝えるということは、人々を集会に、あるいは教会に招くことを意味するものではありません。多くの人は会員にされようとしていることに気がつく、

身を退けてしまいます。私たちは主の証し人として召し出されているのであり、結果はどうであつても主が責任をとってくださいますから、主に任せることができるのです。

人間は今日、いかなる宗教をも望んでいません。多くの人は教会と何の関わりも持ちたくないのです。彼らは宗教的な形式に関心を持っていません。しかし主イエスが証しされる時、多くの人は主の力、主の愛、主の赦しを経験したいと望むようになります。

救われるために何をなすべきかと真剣に問うことから、信仰は始まります。だれでも救われるにはどうすればよいか、教えらるる必要があります。私が知っているすべての人は、主が私のところに導いてくださったのですから、全員が私から救いについての正しい知識を聞くべきです。私には伝える責任と使命があります。主なる神の救いの訪れを隠してはなりません。このように主を証しする義務は、私を他の人と会話をするように導いてくれます。救われた人は、一人残らず、すばらしい救いという喜びの訪れを他の人々に伝え、他の人々もまた主と出会うことができますように努力すべきです。家庭集会の目的は、人々が主のみもとに行くように導くことです。あれもこれもいろいろなことがなされていますが、決定的に大切なこと、すなわち主イエスのみもとに人々を連れて行くことがしばしばおろそかにされがちです。

主イエスを証しする時私たちが経験することは、主のゆえに非難され、罵られ、責任を押しつけられることです。しかししたい場合、それは本当の気持ちを隠すために行っているうわべだけの反論にすぎないのです。例えば教会の欠点や信者とその弱さ、神とその挫折、聖書の矛盾、世界史における無意味な出来事の数々などが指摘され、非難されます。しかし多くの人たちは、

私たちが考えているよりも、はるかに救いを求めていることを忘れてはなりません。もちろん一人の人が救われるためには、しばしば長い道のりが必要です。まず挨拶から始めて、自己紹介を経て、最初の親しい会話、さらに最初のお茶への招待といった具合です。出会いと、交わりなどの接触はしっかりと結びつけられなければなりません。この接触こそ信頼の芽生えとなるものです。正しい時に正しいことを言うためには信用されていることが必要です。相手を無視するような態度をとったりすれば、その後で会話を続ける機会はどう二度と訪れないでしょう。何が許され何が許されないのかを見分ける分別がどうしても必要です。その瞬間を切に待つことと、強制しようとすることは別のことです。会話はあらかじめ備えられなければなりません。私たちが行うことが、その方の心の戸を開くか閉じるかの鍵を握っているということができます。

私たちの行動によって、他の人は信仰が人間を変ええるということを感じることができません。私たちは主に属する者として、主を証しする使命を持っています。私たちが主イエスに対する愛によって行動することは決してむだなことではありません。必ず実を結びます。主のみことばがむなしく戻ることはないことと知ること、また小さなことにも忠実であれば必ず報いられると知することは、新たな勇気を与えてくれます。

人が救われるのは、大きなことを通してよりも小さな愛の働きかけを通しての方が一般的であり、大きな跳躍より小さな歩みの方が自然な姿です。すなわち人は、聞いてすぐ救われるのではなく少しずつ導かれていくのです。

話を聞くことは話したいと思うことより大切です。多くの場合、人は話すチャンスを与えられ

ると、かたくなな堅い心を開きます。また、話し方、感情、話す速さは、その人が話を受け入れるか拒否するかを決める鍵となるものです。聖書講義はしばしば一方通行の独演となり、相互交流が不可能となりがちです。けれども大切なのは、お互いに聞きあい語りあうことです。まず語りあうこと、それからその人を主との交わり、すなわち祈りに導くことが大切です。

主イエスのみもとに導かれた人は新しい者に作り替えられます。話す相手の人が心を開けば開くほど主のみもとに導かれる可能性が大きくなります。ですから最大の戒めは忍耐です。ここで覚えていただきたいのは、主のこと、聖書のことを弁明することが大切なのではなく、幼子のように主を証しすることこそ大切だということです。かたくなな心も愛と誠実さを知ることによって開かれていきます。非常識なことをすればいかなる交わりも成立しません。相手を煩わせたり侮辱したりすれば、その人は心を閉ざしてしまいます。心の扉を無理にこじあけることはできませんし、そんなことをする必要ありません。

どのように語るかということも重要です。興奮してしまうと、いつべんにだめになってしまいます。自分のものにしてしまうとするのはなく助けたいという態度こそ大切です。雄弁な講演よりもたとえ拙くても真心から出てくる言葉の方がはるかに効果的です。たとえ私たちが完全に失敗したと思うようなことがあっても、それが真心から出ているのであれば主が必ず実を結んでくださいます。

あらゆる人間は主なる神が人間に何を求めているか、主の目標とご計画が何であるかを知る権利を持っています。主イエスのゆえに、生ける真の神がどれほど私たち一人一人を愛しておられ

るか、知らない人がいてはなりません。それを宣べ伝えることはキリスト者の使命であり責任なのです。

福音を宣べ伝えることは、「生きがいのある人生」を公に告げ知らせることに他なりません。今日、大部分の人は、家庭においても職場においても充実した生活を送ることができなくなっているというのが実情ではないでしょうか。そういう状態から解放されるためには、どうしても主イエスが必要なのです。回りの人たちが悩んでいるのを見過ごしにすることはできません。ですから福音は宣べ伝えられなければならないのです。

そのために、お互いが語りあい、聞きあうことが必要です。お互いの交流がなければ、相互理解も信頼も成り立ちません。話しあうことによってお互いに理解しあい、励ましあい、助けあい、慰めあうことができるのであり、それらのことが相手を決断にまで導くのです。相手の人が日常生活の中でどんなことを考え、何を望み、どんな悩みがあるのかということを知るための努力や苦勞を惜しんではなりません。

どうして人は救いに対する渴望を持つようになるのでしょうか。多くの場合それはいわゆるキリスト教の教えによるといよりは、主の恵みによって変えられた人が証しすることによってです。もし私たちが一人一人を自分の家に招待するなら、それに応じる人は少なくないでしょう。だれが招待されるべきでしょうか。悩んでいる人々、孤独な人々、彼らのために祈るようにと主に示された人々、すなわちすでに主によって備えられた人々たちです。ではどのように招待するべきでしょうか。最も大切な伝道方法の一つは、お客として心からもてなす精神です。一杯の

お茶に招待したり、福音的なカセットテープを聞かせたり映画を見せたりすることも一つの方法です。

人はだれでも交際を求め、必要としています。個人的に話をしたいと思っています。私たちが考えているよりはるかに多くの人たちが、当時のギリシャ人のように「私たちはキリストを見た！」という切なる願望を抱いています。「刈り入れの時は近づき、実は熟しています」と主なる神は言っておられます。こういう主なる神のビジョン、神の見方が私たちにも必要です。備えられたたましいは、主イエスのみもとに導かれなければなりません。それはあなたによって、また私によってなされなければなりません。

犠牲なしにはいかなる実も結ばれません。主イエスの愛が、私たちを駆り立てなければなりません。悩んでいる他の人たちと共に悩むことを、主は望んでおられます。主イエスの愛をもってこの世の悩みを見るなら、福音を宣べ伝え、証しをせざるをえません。

かたくなな一面性や、上辺だけの偽善的行為や、極端な禁欲生活は人をつまずかせます。毎日の行動に対する律法的な指図や努力が決定的に大切なのではなく、主なる神の霊によって導かれる生活が大切なのです。

まず聞くことができること、聞こうとすることが第一です。主のことばだけでなく、私たちが導こうと思っている人々のたくさんの言葉にも耳を傾ける必要があります。私たちだけがいつも語り手となる必要はありません。またそうであると決して用いられません。

効果的に主を証しするために大切な点をまとめると、次のようになります。まず聞くこと、そ

れから話すこと。説教するのではなく語りあうこと。強制するのではなく提供すること。愛は相手の心を柔らかくし、熱狂は相手の心を閉ざしてしまいます。弁明することよりも幼子のように証しすること、研究したことではなく経験したことを証しすることも大切です。例えば自分が経験した病氣、個人的な悲しみ、自分の不安や途方にくれた時のこと、家庭の悩み、個人的な負い目、信仰の試練、聖書や祈りについてのいろいろな経験などです。心の扉をむりにこじあけるのではなく、期待をもって叩き続けましょう。

何があっても、神のみことばを大切にすることを忘れてはなりません。また、真の信頼も必要です。このことについて例をあげてご説明しましょう。

あるとき、有名な伝道者ス波尔ジョンのところに一人の学生がやって来て言いました。「私は、もう何カ月も説教をしました。が、だれ一人救われません」。ス波尔ジョンは尋ねました。「あなたはみことばを宣べ伝えているときに、主がいとも祝福し、失われたたましいをみもとに引き寄せてくださると思っていますか」。学生は、「もちろんそんなことはありません」と答えました。「そこにこそ原因があるのです。あなたが信じたならば、主は祝福してくださったでしょう！」とス波尔ジョンは答えました。みことばに信頼すると奇跡を経験できます。主は私たちの期待に応じて応えてくださいます。

「主よ、私は何をしたらよいのでしょうか」という態度をとり続けることも大切です。ピリポはこのような態度をとったからこそ、主に導かれて普段はだれも住んでいないところ、すなわち荒野で、求めているたましいに宣べ伝えることができたのです。こういうふうになにに導かれた人

は他の人を導くことができます。

さらに、人に証しするためには常識、作法、敏感さも必要です。適切な時に適切な言葉で語ること、そのためには何が助けとなるかを正しく判断することが要求されます。次にあげる例も参考になるでしょう。

ある日の午後、ムーデーはずっと一人の若者とテニスをしていました。その若者は最初は心を堅く閉ざし、個人的な話をまったく拒否していました。しかしムーデーと一緒にテニスをすることによって彼の心を解きほぐした時、初めて若者は主のみもとに導かれ、キリストのものとなりました。これは常識的な判断力の結果です。

Ⅲ まとめ

ここまでで私たちは、「伝道活動における家庭集会の大切な意味」について一緒に考えてきました。家庭集会に関してよりも、はるかに多く伝道活動に関してのことにページを割いたのは、家庭集会そのものが目標のではなく、家庭集会はあくまでも人々が救われるための手段にすぎないからです。もちろん家庭集会は教会や集会の対立物になってはいけません。反対に、家庭集会を通して教会全体の統一が促進されるべきであり、そうでないならば家庭集会の存在理由はないといつていいでしょう。

私のことを考えてくれる人、私のために時間を割いてくれる人、私を愛してくれる人、何でも打ち明けることのできる人は一人もいない、という孤独な人たちのために、家庭集会はどうしても必要です。真の家庭集会は、求めている人たちに対する個人的な伝道に役立ちます。すなわち

家庭集会は、主のためにたましいを獲得するための戦いの場、また主イエスに対する献身の場なのです。

私は広島のある家庭集会のことを思い出します。そこには、四人の小さな子供の母親である絶望しきった婦人が出席していました。彼女は原子爆弾によって両親を失っていました。しかし、みことばを聞くことによって、彼女は主イエスの救いを経験しました。そこにいた人たちは、このまったく絶望しきった婦人が、わずか二時間の間に、自分の経験した救いの喜びのゆえに喜びに輝き出した時のようすを忘れることができないでしょう。その姉妹はそれ以来今日まで十年間、主なる神に対する夫の拒絶的な態度にもかかわらず、主に忠実に従っています。

いま、東京の近辺では、四十箇所以上のところで家庭集会が開かれています。それらの家庭集会の原動力となっているのは、前にも述べたルデアのような姉妹たちです。このルデアのような姉妹たちは、神から遠ざかっている人たちのために一生懸命苦勞し、その人たちが主に対して心を開くまで日々真剣に祈り続けます。そしてその人たちが聞いてみたいという気持ちになると、私や他の兄弟がその人にみことばを宣べ伝えるように頼まれます。ピリピのルデアがパウロと彼の同労者たちに頼み、強いてそうさせたように、またそのことを通して神の導きを知ることができたように、私たちもまた主がどのようなにして家庭集会を私たちに与えてくださるかを再三経験しています。しかしそれは家庭集会のためではなく、人々を主イエスに導くため、一人でも多くの人を主のために獲得するためなのです。

ルデアのような姉妹たちの存在は、言葉では言い表せないほど貴重なものです。恐らく多くの

ご婦人はご主人に次のようなことを言うことがあるでしょう。「また今晚も大勢のお客様を呼んだのですか？ 週に一度のお休みの日ぐらい家族だけでゆっくりしたかったのに」。しかしルデアのような姉妹は決してそうは言いません。喜んで犠牲を払うご婦人は幸いです。犠牲を払う備えがあるかどうかは祈りの生活の中に現れてきます。集会の多くの姉妹たちは祈りの人です。姉妹たちの多くは毎日二百人以上の未信者の夫たちのために祈ります。ある姉妹たちは、一人三十分ずつに分けて二十四時間絶え間なく祈り続けました。集会の姉妹の一人が言いあらわすことのできない大きな悩みを抱えていたので、すべての姉妹たちが自分のことのように共に悩み、この祈りの輪が始まりました。後でわかったことですが、ある人は三十分祈っただけでは足りず二時間祈り続けました。その時ほど幸せだったことはいないと彼女たちは証ししています。もちろんこれは真似するべきことだというわけではありませんし、またその必要もありません。しかし確実なのは、真剣に祈らなければ一人のルデアも生まれませんということです。そして集会が、あるいは教会が、一人のルデアも持たないならば「夜通し働いても何もとれなかった」という状態になりがちです。

信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれています。

御子に聞き従わない者は、いのちを見ることがなく、神の怒りがその上にとどまる。

(ヨハネ 3・18、36)

というみことばの正しさを、私たちはだれ一人として疑いません。一度十分間だけでも、静ま

ってあなたのお知りあいのことを考えてみてください。あなたの息子、あなたの娘、あなたの夫、あなたの妻、あなたの兄弟、あなたの姉妹、まだ主を知らない多くの知人、友人たちのこと……彼らはみなすでに裁かれており、その人の上に神の怒りがとどまるということを考えた時、心に何の重荷も感じない者は新しいのちを持っているかどうか疑わしいものです。しかし重荷を感じる者は真剣に祈り始め、そのために犠牲を払う覚悟ができています。

主によって非常に祝福され、用いられた説教者ビーチャー博士の臨終の時、一人の人が尋ねました。「ビーチャー博士、あなたはいろいろなことをご存じです。一番大切なのは何か教えてください。」答えは次のようなものでした。「神学でもなく、論争点に関する議論でもなく、たましいの救いです」。

次のように祈ることができる人は幸いです。「主よ。いろいろな障害や能力のなさにもかかわらず、私を人とする者にしてください」。主はペテロに語られたのと同じことを言われるでしょう。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」(マタイ4・19)と。「わたしがいでしょう。あなたはどうせできないからだ」と主は言っておられます。主なる神の御業は創造的な業です。主の御業によって、存在しないものも存在するようになります。人は自分の努力によって人をとる者になるものではありません。また研究や知識によってでもありません。神の創造的な業によって初めて、人をとる者となるのです。

主が弟子たちに、人をとる者として用いるために、従うように呼びかけられた時、弟子たちは自分たちの網を捨てて主に従いました。彼らは妨げとなるもの、引き止めようとするもの、副次

的なもの、すなわち第二、第三のもの、そのほか自分のものはすべて捨てました。パウロもまた自分のものを捨てました。彼は言っています。

私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりしました。
(ピリピ 3・7)

自分のものはすべて主の働きの妨げとなります。私たちの最大の敵は私たちの自我です。みことばは言っています。

「権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。」と万軍の主は仰せられる。

(ゼカリヤ 4・6)

家庭集会を通して最初の触れ合いと信頼関係ができ、一人一人に気を配ることがその人たちに主に導く手段となります。私たちは、私たちの高められた主が、さらに多くのことを行いたいと願っておられ、あらゆる信者を器として用いたいと願っておられることを自覚する必要があります。今の状態で満足してしまうと、成長は止まり、集会は宗教的なクラブになってしまいます。ほとんど毎週、挫折し、悩みを抱えた人たちが主の御名を呼び求め、信仰を持つようになっていきます。そのような成長の秘訣はなんでしょうか。集会の中には多くの、心から主に献身している兄弟姉妹がいます。この群れははっきりした目標を持っています。すなわち失われたたましいが主のために獲得されるという目標です。ですから、主を証しする機会をおろそかにはできません。

またあらゆる成長のための主な奉仕は、祈りのご奉仕です。主はみことばを守り、失望させない方ですから、大いなることを期待することができ、奇跡をも確信できます。

一人の人が主に献身すると、それは他の人にも広がっていくことを、私たちは何度も経験しています。三千年前にも同じようなことがありました。イスラエル全体はゴリアテという巨人に対してはどうすることもできないと思ひ込んでいました。しかしダビデは違うことを考えました。彼は、生ける主なる神を侮る大胆不敵な異邦人に対して憤りを禁じ得ませんでした。ダビデが主の威力によってゴリアテを倒した後、他の人々も多くの巨人たちを倒したと聖書に記されています。同じように一人の人が主のために失われたたましいを獲得しようとすると、その波紋が次々に広がり、他の人たちも同じ目標を持つようになります。大いなることを期待して主の前に立ち続ける者は、やがて他の兄弟姉妹が同じ霊によって捕らえられることを経験するようになります。だれもが影響を及ぼしあうのです。自分自身を大切にする者は、他の人にも自分自身を大切にさせる結果となり、それによって死が入り込んでしまう、ということを経験します。

家庭集会から始まって、今ではほとんどいたるところで祈りの集いも主によって起こされています。信仰に導かれたばかりの人はここで、共に祈ることを通して祈りを学びます。

また私たちは、原則として次のようなことを勧めています。すなわち家庭集会に一人の未信者も来ない時は、集会を開くことをやめ、求める人がいるようになったらまた始めること。また祈りの集いにおいては、信者同士が完全に一致しておらず、お互いに身を低くしてすべてを明るみに出す備えがない時はしばらくの間やめることなどです。

健全な成長、それは私たちの切なる願いです。私たちの主は言っておられます。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。

(ヨハネ 12・24、25)

健全な成長の結果は豊かな実です。私たちの主は死に赴いてくださいました。それはただ単に私たちの身代わりになって罰せられるため、私たちの代わりに呪いを受け、罪そのものとされるためではなく、私たちが主のいのちの所有者となるように、ご自身のいのちを与えてくださるためでした。そして主のいのちが明らかに、溢れるばかりに流れ出る時、もはや古い人にとどまることはできません。人間が、高められたイエス様と交わりを持つようになると、溢れ出る圧倒的な実を結ぶいのちが明らかになります。コリントの信者に対して、パウロは次のように書き送りました。

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

(Ⅰコリント 1・9)

ここにも書かれているように、最も大切なのは主の真実です。主と交わりを保ち、常に主と共に歩むために、私たちは召し出されました。主が私たちを導こうと思っておられる道は、十字架

まで続いています。自分のいのちを愛する者、自分のものに固執する者、自分自身を否定する備えのない者は、靈的なたわになってしまいます。主イエスが私たちの生活の中で第一になっているのでしょうか？ 自己否定なしにはいかなる復活のいのち、すなわち主のいのちの現れもありません。

今日大きな問題となっているのは、十字架のないいわゆる「キリスト教」が宣伝されていることです。私たちが十字架を、あるいはまた十字架にかけられることを恐れる時、あらゆる努力も熱心さも、またいかなる聖書の信仰も、すべて不十分となっています。キリストの苦しみにあずかることなしには、成長も実を結ぶこともありえません。日々打ち碎かれるのでなければ、私たちの自我は主の働きの妨げとなります。打ち砕いた後はじめて、主はお用いになります。ギデオンと共にいた三百人の兵士たちの持っていた土の器が砕かれたときはじめて、その中に入っていた松明が光を放ちました。主はご自分のところに持ってこられたパンを割くことによつてはじめて、何千人もの人たちを満腹させることがおできになりました。ナルドの壺は、高価な香りを家中に満たすために砕かれなければなりません。サウロが徹底的に砕かれる備えができた時、はじめて主は彼をお用いになることができました。ヤコブは腰の骨を外されてびっこを引いて歩くようになったと聖書に記されていますが、彼もまた砕かれた後ではじめて祝福を受けたのです。私たちの中にある主イエスのいのちは、私たちが日々、主に自分の意思を従わせることによつてのみ明らかになります。

主が私たちに与えてくださったみことばは、目に見える世界のあらゆる現実よりも、信ずるに

足るものです。私たちの主は、みことばを成就するためには、あらゆる自然の法則さえも打ち破ることができるといふことをよく覚えておきましょう。主は決してご自身の約束を破られません。主がすべての力を握っておられ、主のみことばは永遠に真理ですから、必ずみことばの通りになるのです。この信頼こそ私たちにとって必要なものです。間違った嫌遜さ、すなわち不信仰は主の御名を汚します。

主のために生きる備えのあるところでは、歓喜が私たちの心を満たし、それは革命的な働きをします。私たちの周囲の人々は、急にイエス様のことを聞きたいと思うようになり、主に対する飢え渴きを持つようになります。そして私たちは、備えられた心に福音を宣べ伝えるチャンスと可能性を持つようになるのです。

今こそ眠りから覚める時です。霊的な眠りは信者を堕落させる最も恐ろしい災いです。眠りは、夜あるいは暗黒と結びついています。眠りは人を無関心にし、また眠ると人は現実とはかけ離れた夢を見て、非現実的な世界に生きるようになります。すなわち闇を見なくなり、恐ろしい永遠の滅びに向かいつつある多くの失われたたましいをも見なくなります。立ち上がちなさい！眠りから覚める時が来しました。目を覚まして祈るべき時です。そしてまた、すべてを主のなさるままに委ねる時です。

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えながら読んでください。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝してください。そうすれば主はあなたを祝福してくださるでしょう。

一 みことばの大切さ

ヨハネ 17・17 エレミヤ 15・16 Iヨハネ 5・13 Iペテロ 1・23 詩篇 119・105、160、162

二 悔い改めと信仰

Iヨハネ 1・9 箴言 28・13 詩篇 32・1〜5 イザヤ 55・6〜7 ヨハネ 6・37

三 私たちの身代わりとなられたイエス

イザヤ 53・4〜6 Iペテロ 2・24 IIコリント 5・21

四 血潮の価値

イザヤ 1・18 ローマ 3・24～25 Iヨハネ 1・7 エペソ 1・7 Iペテロ 1・18～19
黙示 12・11

五 確信の根拠

イザヤ 43・1、25 イザヤ 44・22 ルカ 7・48 ヘブル 8・12 ヘブル 10・17
詩篇 103・12 ヘブル 13・5～6

六 思いわずらうな

マタイ 13・22 マタイ 6・25～32 ピリピ 4・6～7 Iペテロ 5・7～9 詩篇 55・22

七 試練の時

ヤコブ 1・12 ヤコブ 4・7～8 Iコリント 10・13 Iペテロ 5・8～10
Iペテロ 1・5～7 IIコリント 12・9～10 ローマ 5・3～5 ローマ 8・28
イザヤ 40・29～31



実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデのおすすめ

二十歳そこそこのドイツの少女リンデが、がんであることを知りながら、自分の死をかくも冷静に受け入れることができ、すべてを感謝し、自分の思いは少しも求めずに、喜びつつ召されていったというこの事実は、現代の奇跡であり、神の實在を証しする一つの大きな証拠です。

「永遠の愛をもって、わたしはあなたを愛した」
(エレミヤ 31・3)

リンデの、主に従い通す態度は、吉祥寺キリスト集会の中に生き生きとしたリバイバルの波を起し、多くの人々が自分の支配権をイエスさまに明け渡し、そしてただ神のみことばにのみ依り頼む者へと変えられています。

なおこの本は韓国語訳が出版されました。さらに病床にあつて本の読めない方がたのために、PBAのアナウンサー渡辺康子さんが朗読したテープ(8本1組)があります。

ゴットホルド・ベック 編著

実を結ぶ命がんにうち勝ったドイツ少女リンデ

価三三〇円

お申込みはハガキに本の名前(第何集、上下巻の別、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。
代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。



光よあれ第1集 私たちは主のもの 25人の証しシリーズのおすすめ

「光よあれ」第1集を読んだのがきっかけで、新しいクリスチャンがたくさん誕生しました。「私もその中の一人ですが、まるで吸いこまれるように一気に読んだあの時の感激を忘れることはできません。二十五人の証しに感動し、あとがきのベックさんの言葉に衝撃を受け、気がついてみたらクリスチャンになっていました。まさに『光よあれ』です。それは、あつという間のことでした」と、ある方は証しされています。

この本には、山本孝子さんの「み翼のかけで」、野口広教授の「Klein aber mein から Klein aber Deinへ」、野田繁さんの「虚しさからの脱出」、池田傳一さんの「光の中に移されて」など、また巻末にはベックさんの「神は愛です」というメッセージが収録されています。

光よあれ 第1集 吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの 25人の証しシリーズ

価 三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。



光よあれ 第2集 吉祥寺キリスト集会編
私たちは主のもの 25人の証しシリーズ

価五〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別、冊数、氏名、住所、電話番号）ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

光よあれ第2集私たちは主のもの 25人の証しシリーズのおすすめ

アルコール依存症との凄惨な闘いの中から主の恵みによって新生を体験し、力強く証しをする染野茂夫さんの「駆けのぼりし、主の道」。あらゆる偶像崇拜に疲れ切り、真の神に出逢った感激を語る宮田清枝さんの「偶像から解放されて」。安宅産業崩壊の過中で新生を体験した松見敬三さんの「曙からお昼過ぎまで」。愛する一人娘を失い、主にある恵みを証しされる重田定義教授の「主の御名はほむべきかな」など、また巻末にはベックさんの「無限の宇宙にある神」のメッセージが収められています。



光よあれ第3集 私たちは主のもの 42人の証しシリーズのおすすめ

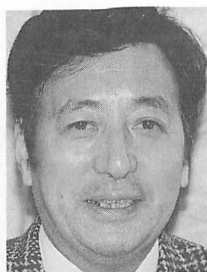
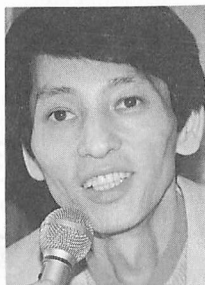
聖書の福音に接して、救いを受け入れる方々がどんどん増えてきています。そのため、この第3集からは証しをする方々を42人に増やし、カラー刷りを倍の16ページに増ページしました。内容は、反発しながらも少しずつ聖書の福音に目覚めてゆく過程を詳細に描いた尾崎英昭さんの「すべては光の中へ」、大学紛争のさ中、酒枝先生を通して聖書と出会い、救いを受け入れた蘇畑卓郎さんの「とこしえの誓」、またご夫婦それぞれの立場から信仰に至る道と深い体験を述べられた3組の夫婦による証しなど、充実した内容になっています。また巻末には、ベックさんのメッセージ、「みこころが地でも行なわれますように」が収められています。第1、2集と併せて、ぜひお読みください。

光よあれ 第3集 吉祥寺キリスト集会編

私たちは主のもの 42人の証しシリーズ

価 三三〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。



光よあれ第4集 私たちは主のもの 66人の証しシリーズのおすすめ

フジテレビの有名なニュースキャスターだった故山川千秋さんの奥様の証し「ここに主がおられる」、重症のがんでありながら、軽井沢のキャンプで証しをされた笹川郁夫さんの「もはや私ではなく、キリストが私の中で」、天に召された長女の文枝さんのことを切々と綴った唐沢梅子さんの「天国で楽しい再会を」、薬物中毒の中で主に出会い、救われた体験を率直に語られる大塚二郎助教授の「高慢を砕かれて」など、すばらしい六十六人の方々の証しが満載されています。

光よあれ第4集

私たちは主のもの

66人の証しシリーズ

吉祥寺キリスト集会編 価三五〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト集会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。



なにもかも私たちを神の愛から引き離すことはできない（上巻）

ゴットホルド・ベック著

この本の上巻で、吉祥寺キリスト教会でのベックさんの聖書の学びの内、「ローマ人への手紙」8章までを一冊にまとめたものです。聖書に初めて接する方、信仰の歩みを始めた方のために分かりやすく書かれていて、全体は第一章から順を追って学ばれていますが、一つ一つのメッセージが深い霊的な内容を持ち独立しているため、どこから読み始めても、豊かな恵みが私たちの心に注がれます。

私たちが神様のみにことばに目覚め、救われるためには、たった一つの聖句でも十分でした。しかし、さらに成長していくためには、多くのみことばが、聖書全体が必要です。

この本は、聖書を「研究」するためではなく、日々の生活においてさらに深く主のみことばを味わいたいと願っておられる方々のために、すばらしい励ましとなると信じております。

なにもかも私たちを

神の愛から引き離すことはできない（上巻）

吉祥寺キリスト教会編

価三〇〇円

お申込みはハガキに本の名前（第何集、上下巻の別）、冊数、氏名、住所、電話番号ご記入の上〒180武蔵野市吉祥寺本町4-9-11吉祥寺キリスト教会まで。代価と郵送料は本が到着後、同封の郵便振込用紙でお振込みください。10冊以上は特別価格でご協力します。

吉祥寺キリスト集会のご案内

吉祥寺キリスト集会

日曜礼拝	10:30	および15:00
日曜メッセージ	12:00	および16:00
子供日曜学校	9:00	
中学生日曜クラス	9:00	
青年日曜クラス	14:30	
火曜学び会	11:00	
水曜学び会	19:30	
木曜祈り会	19:30	
春・夏・秋 軽井沢バイブルキャンプ		
各祝祭日午後 交わり会		



小菅 玉樹氏撮影
フィロマーノ風景



定価 300円(本体291円)